九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

-8-

甘木市所在立野遺跡の調査(3)

上 巻

1 9 8 6

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

-8-

甘木市所在立野遺跡の調査(3)

上 巻

巻頭図版



立野遺跡全景

福岡県教育委員会では日本道路公団の委託を受けて、昭和54年度より九州横断自動車 道の建設工事に伴う発掘調査を行って参りました。本年度ですでに8年目を迎えており ますが、この間、関係諸機関・各位のご協力を得て小郡市・大刀洗町・甘木市・朝倉町 の遺跡の発掘調査が進捗し、朝倉インターチェンジまでについては昭和60年度末までに 調査を終了したところであります。

本書は、この7年の中で昭和56年から昭和58年の間に調査を実施した、第11地点・立 野遺跡についての3冊目の報告書となります。この報告書が、文化財に関する社会教育 的活用において一端の役割を果たし、加えて学術的側面での発展に寄与するところがあ れば望外の喜びであります。

調査および報告書作成の過程で、地元の方々を始めとする関係各位の皆様のご協力が 得られましたことに深甚の謝意を表します。

昭和61年6月30日

福岡県教育委員会

教育長 友野 隆

例 言

- 1. 本書は、九州横断自動車道路線内の遺跡について日本道路公団から委託されて、福岡県教育委員会が発掘調査を実施した8冊目の報告書である。
- 2. 本書に収録した遺跡は、昭和56年度から58年度にかけて発掘調査を行った立野遺跡 C地区で、立野遺跡の3冊目の報告である。
- 3. 遺構の実測図は調査担当者・調査補助員が主として作成した。遺物の実測・製図は 各執筆者の他に、平田春美・豊福弥生・原富子・鶴田佳子・関久江・塩足里美・本田 ひろみ・原田和枝・松嶋邦子・速水公己の諸氏の多大な助力を得た。
- 4. 遺構写真は調査担当者が、遺物写真は九州歴史資料館石丸洋氏の指導の下に藤美代子氏がその大半を、一部について調査担当者が撮影した。
- 5. 遺物整理は九州歴史資料館・岩瀬正信氏の指導の下に、九州歴史資料館と福岡県文 化課甘木事務所とで行った。鉄器処理は九州歴史資料館技術主査・横田義章氏のもと で行った。
- 6. 表に記した遺構の面積は全てプラニメーターによる測定値である。
- 7. 写真図版・挿図の各番号に冠した数字は住居番号であり、それ以外では建物が建、 土壙がD, ピットがP, 遺構上面その他が他、接合土器がJの略号を冠している。
- 8. 本書の挿図で使用する方位は全て真北である。
- 9. 本書の執筆は木下修・児玉真一・佐々木隆彦・伊崎俊秋・日高正幸・武田光正が分担し、各文末に名を記した。
- 10. 本書の編集は児玉・武田の助力を得て伊崎が担当した。

本 文 目 次

< 上 巻 >

				••••••					
I				の遺構と遺					
	<遺	構・遺物	の説明	月のまえに ´ ──<	〈凡例>—				11
	1.	竪穴住	居跡			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		••••••	23
_	山	巻>	>						
_	.1.	7EI /							
	2.			•••••					
	-			•••••					
	i	. 土壙		•••••			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		274
	ii	. 溝 …	•••••				• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		283
	iii	土壙基	<u> </u>	•••••			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	283
	iv	. その他	也の遺物	勿		•••••		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	285
	4.	接合資	料•]	司一個体資料				•••••	289
	6.		•						
	7.								
			•	•••••					
			-						

C. 弥生時代の遺構と遺物330
1. 竪穴住居跡330
2. 掘立柱建物348
3. その他371
i. 土壙 ·······371
ii. 弥生時代のその他の遺物372
D. その他の遺構と遺物375
1. 土壙375
2. 井戸383
3. 縄文・旧石器時代の遺物385
<補遺>387
IV. 総括389
A. 古墳時代後期の竪穴住居と遺物に関する問題390
1. カマド対面粘土・土壙について390
2. カマドのあり方について394
3. カマド祭祀について400
4. 住居空間の使用法406
5. 須恵器について415
6. 祭祀遺物について419
B. 掘立柱建物について425
C. 古墳時代後期の立野集落について429
D. 竪穴住居の出入口小考 ····································
V. おわりに456

図 版 目 次

巻頭図版 立野遺跡全景

< 下 巻 >

			本文対照頁
図	版	1	立野・宮原遺跡航空写真(南西から) 7
図	版	2	立野·宮原遺跡周辺航空写真 7
図	版	3	立野•宮原遺跡周辺航空写真7
図	版	4	立野·宮原遺跡航空写真 7
			上。南から 下。東から
図	版	5	上。立野遺跡全景(西から) 7
			下. 立野C1次調査全景(東から) 9
図	版	6	上。立野C2次調査全景(北西から) g
			下. 西半部全景(北西から) 5
図	版	7	21号住居跡(南東から) 23
			上. 床面の状態 下. 床下層
図	版	8	22~26号住居跡(南東から)26~38
			上。床面 下。床下層
図	版	9	上. 中. 23号住居跡カマド対面粘土 32
			下。 24号住居跡カマド 34
図	版	10	上. 26号住居跡(南東から) 38
			下.• 同遺物出土状態 38
· 図	版	11	27号住居跡
			上。遺物出土状態(西から) 下。床下層(南から)
図	版	12	上. 27号住居跡遺物出土状態 4
			下. 同カマド遺物出土状態
図	版	13	上. 28号住居跡下層(南から) 4
			下. 同カマド遺物出土状態
図	版	14	上. 35~47号住居跡(南から)
			下. 同下層

図	版	15	上.	36・37号住居跡カマド62・63
			下.	44号住居跡カマド 72
図	版	16	上.	29~50号住居跡(南から)
			下.	同下層
図	版	17	上.	45号住居跡(南から) 74
			中.	同床下層
			下.	同カマド
図	版	18	上.	50号住居跡(南から) 82
			下.	
図	版	19	上.	50号住居跡カマド(南から)
			中.	同(北から)
			下.	同カマド対面粘土 (東から)
図	版	20		51号住居跡(南東から)
			中.	同カマド
			下.	同壁面の杭痕 89
図	版	21	上.	52号住居跡(南から) 91
			下.	同カマド 92
図	版	22	上.	53号住居跡(南東から) 94
			中.	同カマド 95
			下.	53~55号住居跡(南東から)94~99
図	版	23		56号住居跡(南から)101
				同カマド101
				同カマド対面102
図	版	24		57号住居跡(南から)104
				同カマド104
				57~59号住居跡(北から)104~106
図	版	25	60 •	61号住居跡(西から)108~117
			上.	床面 下。床下層
図	版	26	Ļ.	60号住居跡(南ま上から)108
			下.	同貼床除去
図	版	27	60号	住居跡遺物出土状態110
図	版	28	60号	住居跡カマド周辺遺物出土状態110
図	版	29	上。	62号住居跡(南東から)120

			中. 67号住居跡カマド128
			下. 68号住居跡カマド131
図	版	30	63~77号住居跡(北西から)122~138
			上. 床面 下. 床下層
図	版	31	上. 下. 79~83号住居跡(南東から)141~148
図	版	32	上. 80号住居跡(東から)142
			下. 84~94号住居跡
図	版	33	84~91号住居跡(南から)150~165
			上。床面 下。床下層
図	版	34	84・85号住居跡(南から)150~152
			上。床面 下。床下層
図	版	35	86号住居跡(南から)156
			上、床面 下、床下層
図	版	36	89号住居跡(南から)162
			上。床面 下。床下層
図	版	37	90・91号住居跡(南から)164・165
			上. 床面 下. 床下層
図	版	38	上. 86号住居跡カマド156
			中. 87号住居跡カマド157
			下. 89号住居跡カマド162
図	版	39	88号住居跡カマド160
図	版	40	カマド対面土壙
			上,85号住居跡152
			中. 89号住居跡162
			下. 91号住居跡165
図	版	41	上。中、93・94号住居跡(南から)170~172
			下. 94号住居跡カマド172
図	版	42	95~107号住居跡
			上。ま上南から
			下. 南東から
図	版	43	95~101号住居跡(南西から)173~181
			上。床面 下。床下層
図	胎	11	ト 95号住居跡カマド ······173

			中.	98号住居跡カマド179
			下.	100号住居跡カマド180
図	版	45	102	~107号住居跡(西から)183~190
			上.	床面 下。床下層
図	版	46	上.	102~105号住居跡(南東から)183~187
			中.	102号住居跡カマド183
			下.	106号住居跡(南東から)188
図	版	47	106	号住居跡カマド188
図	版	48	上.	108号住居跡(東から)192
			下.	109~112号住居跡(北西から)193~199
図	版	49	上.	111号住居跡(北西から)196
			中.	同カマド196
			下.	同東側土器群197
図	版	50	上.	113号住居跡(南西から)200
				114~117号住居跡(北西から)203~207
図	版	51		118・119号住居跡(南東から)209・210
				118号住居跡床下層209
図	版	52		119号住居跡カマド210
				120号住居跡(南から)211
				同カマド
図	版	53	上.	121・122号住居跡(南から)212~214
				123・124号住居跡(南から)215
				124号住居跡カマド216
図	版	54		125~131号住居跡(西から)217~224
				125号住居跡(南東から)217
				128号住居跡(南から)221
図	版	55		23~33号掘立柱建物空中写真
				21~25号掘立柱建物(南東から)
図	版	56		21~26号掘立柱建物(南から)
				22~30号掘立柱建物(南から)
図	版	57		35号掘立柱建物(東から)240
				36号掘立柱建物(南西から)240
図	版	58		37号掘立柱建物(北から)

			中. 38号掘立柱建物(南から)243
			下. 40号掘立柱建物(北から)246
図	版	59	上. 42・43号掘立柱建物(北から)248~250
			中. 44・45号掘立柱建物(東から)252・253
			下. 46号掘立柱建物(南から)254
図	版	60	上. 48~50号掘立柱建物(南から)257~259
			下. 53号掘立柱建物(東から)263
図	版	61	上. 58・75号掘立柱建物(東から)269・362
			下. 60号掘立柱建物(南東から)271
図	版	62	上. 1号土壙(北西から)274
			中。4・5号土壙(北から)
			下。 4号土壙(東から)
図	版	63	上。 5 号土壙(南西から)278
			中. 同遺物出土状態(北西から)278
			下. 1号土壙墓(北東から)
図	版	64	溝 1 土器出土状態
図	版	65	21・22号住居跡出土土器25, 28~30
図	版	66	22号住居跡出土土器
図	版	67	22号住居跡出土土器
図	版	68	22~26号住居跡出土土器
図	版	69	26 • 27号住居跡出土工器31~40
図	版	70	27号住居跡出土土器34~40
図	版	71	27号住居跡出土土器34~40
図	版	72	27号住居跡出土土器34~40
図	版	73	27号住居跡出土土器34~40
図	版	74	27号住居跡出土土器34~40
図	版	75	27号住居跡出土土器34~40
図	版	76	28~39号住居跡出土土器
図	版	77	37~46号住居跡出土土器
図	版		50号住居跡出土土器85~88
図	版	79	50号住居跡出土土器85~88
図	版		50号住居跡出土土器
— ভা			51~50是住民跡出土土界

図	版	82	60号住居跡出土土器115~119
図	版	83	60号住居跡出土土器
図	版	84	60号住居跡出土土器
図	版	85	60号住居跡出土土器
図	版	86	61~67号住居跡出土土器
図	版	87	68~74号住居跡出土土器
図	版	88	80~83号住居跡出土土器
図	版	89	84~86号住居跡出土土器150~157
図	版	90	86~89号住居跡出土土器
図	版	91	91~95号住居跡出土土器
図	版	92	99~106号住居跡出土土器
図	版	93	108~111号住居跡出土土器203~212
図	版	94	111号住居跡出土土器 ······211 • 212
図	版	95	114~120号住居跡出土土器220~227
図	版	96	122~127号住居跡·26号掘立柱建物出土土器 ······227~239, 282
図	版	97	1~4号土壙出土土器284~289
図	版	98	4 • 5 号土壙出土土器
図	版	99	5 号土壙出土土器
図	版	100	溝1, 土壙墓, ピット, 遺構上面その他出土土器 ······292~297
図	版	101	接合土器
図	版	102	立野C遺跡出土手揑土器①296~301
図	版	103	立野C遺跡出土手揑土器②296~301
図	版	104	立野C遺跡出土手捏土器③296~301
図	版	105	立野C遺跡出土手捏土器④296~301
図	版	106	立野C遺跡出土手捏土器⑤ ······296~301
図	版	107	上, 立野C遺跡出土土製模造鏡301
			下. 同土玉
図	版	108	立野C遺跡出土土製品①304~320
図	版	109	立野C遺跡出土土製品②304~320
図	版	110	立野C遺跡出土土製品③304~320
図	版	111	立野C遺跡出土土製品④304~320
図	版	112	上. 27号住居跡出土土製品 ·······296 • 301 • 309~320
			下. 60号住居跡カマド内出土土製品298・302・309~320

図	版 113	立野C遺跡出土鉄製品①321~323
図	版 114	立野C遺跡出土鉄製品② 銅製品, スラッグ, 植物種子321~324・329
図	版 115	立野C遺跡出土石製品①324~328
図	版 116	立野C遺跡出土石製品②324~328
図	版 117	上. 134号住居跡(北から)332
		中. 135号住居跡(北から)336
		下. 同床下層
図	版 118	135号住居跡出入口部分337
		上。北から 中。同断ち割り 下。南から
図	版 119	135号住居跡336
		上。出入口断面 中。屋内土壙 下。遺物出土状態
図	版 120	上. 136号住居跡(南東から)344
		下. 同 (西から)
· 図	版 121	上。62号掘立柱建物(南から)349
		中. 63号掘立柱建物(東から)349
		下. 65・66号掘立柱建物(西から)351・352
図	版 122	上. 76号掘立柱建物(東から)365
		中. 77号掘立柱建物(北から)366
		下. 78・79号掘立柱建物(南から)367・368
図	版 123	133 • 134号住居跡出土遺物331~335
図	版 124	134 • 135号住居跡出土遺物332~344
図	版 125	135号住居跡出土遺物338~344
図	版 126	135号住居跡出土遺物338~344
図	版 127	135 • 136号住居跡出土遺物338~347
図	版 128	136号住居跡, 66・68号掘立柱建物, その他出土遺物347, 369~374
図	版 129	上. 8号土壙(北から)375
		中. 同出土土器375
		下. (左) スクレイパー他, (右) 押型文土器385・386
図	版 130	上. 10号土壙(南から)376
		中. 13号土壙(北西から)378
		下. 14号土壙(北から)380
図	版 131	上. 16号土壙(西から)381
		中 . P-4

下.	61号住居跡須恵器壷出土状態	***************************************	11	7
`a	01万比店呦須思奋軍山工小態	***************************************	•	• 1 /

挿 図 目 次

<上 巻>

		頁
第1図	機関銃分解時の様子(写真)	2
第2図	調査中スナップ① (写真)	5
第3図	九州横断自動車道路線図	6
第4図	周辺遺跡分布地図(1/50,000)折込	み
第5図	大刀洗飛行場跡地と花立山(写真)	10
第6図	塹濠内出土磁器実測図(1/4)	10
第7図	竪穴住居跡模式図と各部の名称	12
第8図	須恵器全器形一覧(1/10)	15
第9図	土師器全器形一覧① (1/10)	18
第10図	土師器全器形一覧②(1/10)	21
第11図	21号住居跡実測図(1/60)	23
第12図	21号住居跡カマド実測図(1/30)	24
第13図	21号住居跡出土土器実測図(1/4)	25
第14図	22号住居跡実測図(1/60)	26
第15図	22号住居跡カマド対面土壙実測図(1/30)	27
第16図	22号住居跡カマド実測図(1/30)	27
第17図	22号住居跡出土土器実測図① (1/4)	28
第18図	22号住居跡出土土器実測図②(1/4)	29
第19図	22号住居跡出土土器実測図③(1/6)	30
第20図	22号住居跡出土土器実測図④(1/6)	31
第21図	23号住居跡出土土器実測図(1/4)	31
第22図	23号住居跡実測図(1/60)	32
第23図	24号住居跡実測図(1/60)	33
第24図	24号住居跡カマド実測図(1/30)	34
第25図	24号住居跡出土土器実測図(1/4)	35
第26図	25号住居跡実測図(1/60)	36

第27図	調査中スナップ② (写真)	37
第28図	25号住居跡出土土器実測図(1/4)	37
第29図	26号住居跡実測図(1/60)	38
第30図	26号住居跡カマド実測図(1/30)	39
第31図	26号住居跡出土土器実測図(1/4)	40
第32図	27号住居跡実測図(1/60)	41
第33図	27号住居跡カマド実測図(1/30)	42
第34図	27号住居跡出土土器実測図① (1/4)	43
第35図	27号住居跡出土土器実測図② (1/4)	44
第36図	27号住居跡出土土器実測図③(1/4)	45
第37図	27号住居跡出土土器実測図④ (1/6)	46
第38図	27号住居跡出土土器実測図⑤ (1/6)	47
第39図	27号住居跡出土土器実測図⑥ (1/6)	48
第40図	27号住居跡出土土器実測図⑦ (1/6)	49
第41図	28号住居跡実測図(1/60)	50
第42図	28号住居跡カマド実測図(1/30)	51
第43図	28号住居跡カマド支脚実測図(1/4)	51
第44図	28号住居跡出土土器実測図(1/4)	52
第45図	29号住居跡実測図(1/60)	53
第46図	29号住居跡出土土器実測図(1/4)	53
第47図	30号住居跡実測図(1/60)	54
第48図	30・31号住居跡出土土器実測図(1/4)	55
第49図	31号住居跡実測図(1/60)	56
第50図	31号住居跡カマド支脚実測図(1/4)	57
第51図	31号住居跡カマド実測図(1/30)	57
第52図	32号住居跡実測図(1/60)	58
第53図	33・34号住居跡実測図(1/60)	59
第54図	32~34号住居跡出土土器実測図(1/4)	60
第55図	35・36号住居跡実測図(1/60)	61
第56図	36号住居跡カマド支脚実測図(1/4)	62
第57図	36号住居跡カマド実測図(1/30)	62
第58図	37 • 38号住居跡実測図(1/60)折込	込み
第59図	37号住居跡カマド実測図(1/30)	63

第60図	36·37号住居跡出土土器実測図(1/4) ·······	64
第61図	37号住居跡手捏土器出土状態(写真)	65
第62図	39号住居跡実測図(1/60)	66
第63図	40号住居跡実測図(1/60)	67
第64図	41号住居跡実測図(1/60)	68
第65図	39~41号住居跡出土土器実測図(1/4)	69
第66図	42号住居跡実測図(1/60)	70
第67図	42号住居跡カマド実測図(1/30)	71
第68図	43号住居跡実測図(1/60)	71
第69図	42~44号住居跡出土土器実測図(1/4)	72
第70図	44号住居跡実測図(1/60)	73
第71図	44号住居跡カマド実測図(1/30)	73
第72図	45号住居跡実測図(1/60)	74
第73図	45号住居跡カマド実測図(1/30)	75
第74図	45号住居跡カマド支脚実測図 (1/4)	75
第75図	45号住居跡出土土器実測図(1/4)	76
第76図	46号住居跡カマド支脚実測図(1/4)	76
第77図	46号住居跡実測図(1/60)	77
第78図	47号住居跡実測図(1/60)	78
第79図	46~48号住居跡出土土器実測図(1/4)	79
第80図	48・49号住居跡実測図(1/60)	80
第81図	48号住居跡カマド実測図(1/30)	81
第82図	45号住居跡カマド (写真)	81
第83図	50号住居跡実測図(1/60)	82
第84図	50号住居跡カマド実測図(1/30)	83
第85図	50号住居跡出土土器実測図① (1/4)	84
第86図	50号住居跡出土土器実測図② (1/4)	85
第87図	50号住居跡出土土器実測図③ (1/6)	86
第88図	50号住居跡出土土器実測図④ (1/6)	87
第89図	51号住居跡実測図(1/60)	88
第90図	51号住居跡カマド実測図 (1/30)	89
第91図	51号住居跡カマド支脚実測図 (1/4)	89
第92図	51号住居跡出土土器室測図 (1/4)	۸۸

第93図	52号住居跡実測図(1/60) 91
第94図	52号住居跡カマド実測図(1/30) 92
第95図	52号住居跡出土土器実測図(1/4) 93
第96図	53号住居跡カマド実測図(1/30) … 94
第97図	53号住居跡実測図(1/60) 95
第98図	54号住居跡カマド実測図(1/30) … 96
第99図	54 • 55号住居跡実測図(1/60)
第100図	53 • 54号住居跡出土土器実測図 (1/4) 98
第101図	55号住居跡出土土器実測図(1/4)100
第102図	56号住居跡カマド支脚実測図(1/4)101
第103図	56号住居跡カマド実測図(1/30)101
第104図	56号住居跡·屋内施設実測図(1/60·1/30) ······102
第105図	56号住居跡出土土器実測図(1/4)103
第106図	57号住居跡実測図(1/60)104
第107図	58号住居跡実測図(1/60)105
第108図	59号住居跡実測図(1/60)106
第109図	59号住居跡カマド実測図(1/30)106
第110図	59号住居跡カマド支脚実測図(1/4)106
第111図	57~59号住居跡出土土器実測図(1/4)107
第112図	60号住居跡実測図(1/60)108
第113図	60号住居跡遺物出土状況・カマド・土壙実測図 (1/30)折込み
第114図	60号住居跡出土土器位置図111
第115図	60号住居跡出土土器実測図①(1/4)112
第116図	60号住居跡出土土器実測図②(1/4)113
第117図	60号住居跡出土土器実測図③(1/4)
第118図	60号住居跡出土土器実測図④(1/4)115
第119図	60号住居跡出土土器実測図⑤(1/4)
第120図	61号住居跡実測図(1/60)
第121図	61号住居跡出土土器実測図(1/4)
第122図	62号住居跡実測図(1/60)
第123図	
第124図	63~78号住居跡全体図(1/100)
第125図	68~72号掘立柱建物配置図(1/100)123

第126図	63・66・74号住居跡実測図(1/60)	…124
第127図	64・65・72・73号住居跡実測図(1/60)	125
第128図	63~66号住居跡出土土器実測図(1/4)	…126
第129図	67号住居跡カマド実測図(1/30)	127
第130図	67号住居跡実測図(1/60)	…128
第131図	68号住居跡実測図(1/60)	129
第132図	67・68号住居跡出土土器実測図(1/4)	130
第133図	68号住居跡カマド実測図(1/30)	131
第134図	69号住居跡実測図(1/60)	132
第135図	70・71号住居跡実測図(1/60)	134
第136図	69~74号住居跡出土土器実測図(1/4)	…135
第137図	75•76号住居跡実測図(1/60)	137
第138図	77・78号住居跡実測図(1/60)	…139
第139図	75~78号住居跡出土土器実測図(1/4)	···140
第140図	79号住居跡実測図(1/60)	···141
第141図	79号住居跡出土土器実測図(1/4)	…142
第142図	80号住居跡実測図(1/60)	…142
第143図	80号住居跡出土土器実測図(1/4)	…144
第144図	81号住居跡実測図(1/60)	…145
第145図	81号住居跡出土土器実測図(1/4)	…146
第146図	82号住居跡実測図(1/60)	…147
第147図	83号住居跡実測図(1/60)	…148
第148図	82 • 83号住居跡出土土器実測図(1/4)	…149
第149図	84号住居跡実測図(1/60)	···150
第150図	84号住居跡出土土器実測図(1/4)	151
第151図	85号住居跡実測図(1/60)	····152
第152図	85号住居跡カマド対面土壙実測図(1/30)	153
第153図	85号住居跡カマド実測図(1/30)	···153
第154図	85号住居跡出土土器実測図(1/4)	…154
第155図	86号住居跡実測図(1/60)	…155
第156図	86号住居跡カマド実測図(1/30)	156
第157図	86号住居跡出土土器実測図(1/4)	···157
第158図	87号住居跡実測図(1/60)	158

第159図	87号住居跡カマド実測図(1/30)159
第160図	87号住居跡カマド支脚実測図(1/4)159
第161図	88号住居跡カマド実測図(1/30)159
第162図	88号住居跡カマド支脚実測図(1/4)159
第163図	88号住居跡実測図(1/60)160
第164図	87・88号住居跡出土土器実測図(1/4)161
第165図	89号住居跡実測図(1/60)
第166図	89号住居跡カマド対面土壙実測図(1/30)163
第167図	89号住居跡カマド実測図(1/30)163
第168図	89号住居跡出土土器実測図(1/4)164
第169図	90号住居跡実測図(1/60)165
第170図	90・91号住居跡出土土器実測図 (1/4)166
第171図	91号住居跡実測図(1/60)167
第172図	91号住居跡カマド対面土壙実測図(1/30)168
第173図	91号住居跡カマド実測図(1/30)168
第174図	92号住居跡実測図(1/60)169
第175図	92号住居跡出土土器実測図(1/4)169
第176図	93号住居跡実測図(1/60)170
第177図	93号住居跡出土土器実測図(1/4)171
第178図	調査中スナップ③ (写真)171
第179図	94号住居跡実測図(1/60)
第180図	94号住居跡カマド実測図 (1/30)
第181図	94号住居跡出土土器実測図(1/4)174
第182図	95・96・101号住居跡実測図(1/60)
第183図	95号住居跡カマド実測図(1/30)176
第184図	95号住居跡カマド支脚実測図(1/4)176
第185図	98号住居跡カマド実測図 (1/30)176
第186図	97・98号住居跡実測図(1/60)177
第187図	95・98号住居跡出土土器実測図 (1/4)178
第188図	99号住居跡実測図(1/60)
第189図	99号住居跡カマド実測図(1/30)180
第190図	100号住居跡実測図(1/60)
第191図	99~101号住居跡出土土器実測図 (1/4)182

第192凶	102号住居跡実測図(1/60)	183
第193図	103号住居跡実測図(1/60)	184
第194図	102~105号住居跡出土土器実測図(1/4)	185
第195図	104号住居跡実測図(1/60)	…186
第196図	105号住居跡実測図(1/60)	…187
第197図	106号住居跡実測図(1/60)	188
第198図	106号住居跡カマド実測図(1/30)	189
第199図	107号住居跡実測図(1/60)	···190
第200図	106 • 107号住居跡出土土器実測図(1/4)	···191
第201図	108号住居跡実測図(1/60)	192
第202図	108号住居跡カマド実測図(1/30)	193
第203図	108号住居跡出土土器実測図(1/4)	193
第204図	109号住居跡実測図(1/60)	…194
第205図	110号住居跡実測図(1/60)	195
第206図	110号住居跡カマド実測図(1/30)	…195
第207図	109・110号住居跡出土土器実測図(1/4)	…196
第208図	111号住居跡実測図(1/60)	…197
第209図	111号住居跡カマド実測図(1/30)	…197
第210図	111号住居跡カマド支脚実測図(1/4)	…197
第211図	111号住居跡出土土器実測図①(1/4)	198
第212図	111号住居跡出土土器実測図②(1/4)	…199
第213図	112号住居跡実測図(1/60)	
第214図	113号住居跡実測図(1/60)	201
第215図	112 • 113号住居跡出土土器実測図(1/4)	202
第216図	114号住居跡実測図(1/60)	203
第217図	調査中スナップ④ (写真)	203
第218図	115号住居跡実測図(1/60)	…204
第219図	116号住居跡実測図(1/60)	205
第220図	114~116号住居跡出土土器実測図(1/4)	
第221図	117号住居跡実測図(1/60)	207
第222図	117号住居跡出土土器実測図(1/4)	
第223図	118号住居跡実測図(1/60)	209
第224図	118号住居跡出土土器実測図(1/4)	210

第225図	119号任居跡美測凶(1/60)211
第226図	120号住居跡実測図(1/60)212
第227図	119~122号住居跡出土土器実測図(1/4)213
第228図	121 • 122号住居跡実測図(1/60)214
第229図	122号住居跡カマド実測図(1/30)215
第230図	123 • 124号住居跡実測図(1/60)216
第231図	124号住居跡カマド実測図(1/30)217
第232図	123 • 124号住居跡出土土器実測図(1/4)217
第233図	125号住居跡実測図(1/60)218
第234図	125号住居跡出土土器実測図(1/4)219
第235図	126号住居跡実測図(1/60)220
第236図	126号住居跡カマド支脚実測図(1/4)221
第237図	126号住居跡カマド実測図(1/30)221
第238図	127号住居跡実測図(1/60)221
第239図	126 • 127号住居跡出土土器実測図(1/4)222
第240図	128 • 129号住居跡実測図(1/60)
第241図	130 • 131号住居跡実測図(1/60)
第242図	128~132号住居跡出土土器実測図(1/4)224
<中	巻>
第243図	21号掘立柱建物実測図(1/60)225
第244図	22号掘立柱建物実測図(1/60)226
第245図	23号掘立柱建物実測図(1/60)227
第246図	24号掘立柱建物実測図(1/60)228
第247図	25号掘立柱建物実測図(1/60)229
第248図	26号掘立柱建物実測図(1/60)23
第249図	27号掘立柱建物実測図(1/60)232
第250図	28号掘立柱建物実測図(1/60)234
第251図	29号掘立柱建物実測図(1/60)235
第252図	30号掘立柱建物実測図(1/60)235
第253図	31号掘立柱建物実測図(1/60)236
第254図	32 • 33号掘立柱建物実測図(1/60)23

第255図	34号掘立柱建物実測図(1/6	0)239
第256図	調査中スナップ⑤(写真)	239
第257図	35号掘立柱建物実測図(1/6	0)折込み
第258図	36号掘立柱建物実測図(1/6	0)241
第259図	37号掘立柱建物実測図(1/6	0)243
第260図	38号掘立柱建物実測図(1/6	0)244
第261図	39号掘立柱建物実測図(1/6	0)245
第262図	40号掘立柱建物実測図(1/6	0)246
第263図	41号掘立柱建物実測図(1/6	0)248
第264図	42号掘立柱建物実測図(1/6	0)249
第265図	43号掘立柱建物実測図(1/6	0)251
第266図	44号掘立柱建物実測図(1/6	0)252
第267図	45号掘立柱建物実測図(1/6	0)254
第268図	46号掘立柱建物実測図(1/6	0)255
第269図	47号掘立柱建物実測図(1/6	0)256
第270図	48号掘立柱建物実測図(1/6	0)257
第271図	49号掘立柱建物実測図(1/6	0)259
第272図	50号掘立柱建物実測図(1/6	0)260
第273図	51•52号掘立柱建物実測図	(1/60)262
第274図	53号掘立柱建物実測図(1/6	0)263
第275図	54号掘立柱建物実測図(1/6	0)264
第276図	55号掘立柱建物実測図(1/6	0)265
第277図	56号掘立柱建物実測図(1/6	0)266
第278図	57号掘立柱建物実測図(1/6	0)268
第279図	58号掘立柱建物実測図(1/6	0)269
第280図	59号掘立柱建物実測図(1/6	0)270
第281図	60号掘立柱建物実測図(1/6	0)271
第282図	掘立柱建物出土土器実測図) (1/4)272
第283図	掘立柱建物出土土器実測図②	0 (1/4)273
第284図	1号土壙出土土器実測図(1	/4)274
第285図	1・2号土壙実測図 (1/60)	274
第286図	2号土壙出土土器実測図(1	/4)275
第287図	4号十塘実測図 (1/60)	

第288図	5 号土壙実測図(1/60)277
第289図	4号土壙出土土器実測図(1/4)279
第290図	5 号土壙出土土器実測図①(1/4)280
第291図	5 号土壙出土土器実測図②(1/4)281
第292図	溝 1 出土土器実測図(1/4, 1/8)
第293図	1 • 2 号土壙墓出土土器実測図(1/3)283
第294図	1 • 2 号土壙墓実測図(1/30)
第295図	ピット出土土器実測図(1/4)286
第296図	遺構上面出土土器実測図①(1/4)
第297図	遺構上面出土土器実測図②(1/4)
第298図	接合土器実測図①(1/4)
第299図	接合土器実測図②(1/4)
第300図	接合土器実測図③(1/4)
第301図	同一個体土器実測図(1/4)
第302図	土製品実測図① (手捏土器①) (1/2)
第303図	土製品実測図②(手捏土器②)(1/2)299
第304図	土製品実測図③(手捏土器③)(1/2)300
第305図	土製品実測図④(模造鏡)(1/2)303
第306図	土製品実測図⑤ (玉・剣・棒) (1/2)305
第307図	土製品実測図⑥ (把手・その他) (1/2)307
第308図	土製品実測図⑦ (盤状・土錘) (1/2) ······308
第309図	土製品実測図® (不明土製品 II ①) (1/2)
第310図	土製品実測図⑨(不明土製品 II ②)(1/2) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
第311図	土製品実測図⑩(不明土製品 II ③)(1/2) ······313
第312図	土製品実測図① (不明土製品 II ④) (1/2) ·······314
第313図	土製品実測図⑫ (不明土製品 II⑤) (1/2)
第314図	土製品実測図③ (不明土製品 II ⑥) (1/2)316
第315図	土製品実測図(4) (不明土製品 II ⑦) (1/2)
第316図	土製品実測図⑮ (不明土製品 II ®) (1/2) ······318
第317図	土製品実測図⑯(不明土製品 II ⑨) (1/2) ·······319
第318図	土製品実測図⑪(不明土製品 II ⑩)(1/2) ·······320
第319図	鉄製品実測図① (1/2)
第320図	鉄製品実測図②(銅製品)(1/2)323

第321図	石製品実測図① (紡錘車・その他) (1/2)3	24
第322図	石製品実測図②(砥石)(1/3)3	26
第323図	石製品実測図③(砥石)(1/3)3	27
第324図	石製品実測図④(台石)(1/4)3	28
第325図	133号住居跡実測図(1/60)	30
第326図	133号住居跡出土土器実測図(1/4)3	31
第327図	134号住居跡実測図(1/60)	33
第328図	134号住居跡出土土器実測図① (1/4)	34
第329図	134号住居跡出土土器実測図② (1/6)	35
第330図	135号住居跡出入口部断面(写真)3.	35
第331図	135号住居跡実測図(1/60)折込	み
第332図	135号住居跡出入口部実測図(1/30)3.	37
第333図	135号住居跡出土土器実測図① (1/4)	39
第334図	135号住居跡出土土器実測図② (1/4)	40
第335図	135号住居跡出土土器実測図③ (1/4)	41
第336図	135号住居跡出土土器実測図④ (1/6)	42
第337図	135号住居跡出土土器実測図⑤ (1/4)	43
第338図	135号住居跡出土土器実測図⑥ (1/4)3.	43
第339図	135号住居跡出土土製品実測図 (1/2)	44
第340図	136号住居跡実測図(1/60)3.	45
第341図	136号住居跡出土土器実測図① (1/4)3.	46
第342図	136号住居跡出土土器実測図②(1/4)3.	47
第343図	61号掘立柱建物実測図(1/60)3.	48
第344図	62号掘立柱建物実測図(1/60)3.	4 9
第345図	63号掘立柱建物実測図(1/60)3	50
第346図	64号掘立柱建物実測図(1/60)3	51
第347図	65号掘立柱建物実測図(1/60)3	52
第348図	66号掘立柱建物実測図 (1/60)35	53
第349図	67号掘立柱建物実測図(1/60)35	54
第350図	68号掘立柱建物実測図(1/60)35	55
第351図	69号掘立柱建物実測図(1/60)35	56
第352図	70号掘立柱建物実測図(1/60)35	58
第353図	71号掘立柱建物実測図(1/60)35	59

第354図	72号掘立柱建物実測図(1/60)360
第355図	73号掘立柱建物実測図(1/60)361
第356図	74号掘立柱建物実測図(1/60)363
第357図	75号掘立柱建物実測図(1/60)
第358図	76号掘立柱建物実測図(1/60)365
第359図	77号掘立柱建物実測図(1/60)366
第360図	78号掘立柱建物実測図(1/60)367
第361図	79号掘立柱建物実測図(1/60)
第362図	66号掘立柱建物出土土製品実測図 (1/3)369
第363図	掘立柱建物出土土器実測図(1/4)370
第364図	6 • 7 号土壙実測図(1/30)371
第365図	6 • 7 号土壙出土土器実測図(1/4)372
第366図	その他の弥生時代土器実測図(1/4)373
第367図	弥生時代出土土製品実測図(1/3)374
第368図	8 号土壙実測図(1/30)
第369図	8 号土壙出土土器実測図(1/4)375
第370図	9 • 10号土壙実測図(1/30)
第371図	11・12号土壙実測図(1/30)378
第372図	13・14号土壙実測図(1/30)379
第373図	15・16号土壙実測図(1/30)380
第374図	17~19号土壙実測図(立野B地区)(1/30) ······382
第375図	1 • 2 号井戸実測図(1/30)384
第376図	グリッド土層図(1/60)385
第377図	スクレーパー・縄文土器実測図(1/2)386
第378図	立野遺跡 D 地区表採土錘実測図 (1/2)387
第379図	立野遺跡A地区 2 号墳土器配置図388
	出入口施設の模式図(1/60)392
	カマドの種類(1/40)394
	カマドの模式図395
第383図	カマド周辺の竪穴部外柱穴(1/120)398
第384図	
第385図	主柱間エリアの占有率409
第386図	住居空間使用の一私案(1/80)410

第387図	竪穴部外の柱穴(1/120)4	12
第388図	53・54号住居跡にみられる杭状痕(1/30)4	13
第389図	立野遺跡における住居の群と掘立柱建物折込	7)
第390図	異方向を示す住居4	31
第391図	出土した土器量4	32
第392図	土製品出土分布4	33
第393図	鉄器・スラッグ・砥石出土分布4	34
第394図	接合土器と21・22・26・27号住居跡出土須恵器(1/3)4	36
第395図	同一工人の作になる土器(1/4)4	38
第396図	竪穴住居の出入口の分類4	49
	表目次	
〈上	卷〉	
第1表	60号住居跡出土土器器種一覧1	LO
	Ma .	
〈中	巻 >	
Mr a ++		頁
	21号掘立柱建物計測表	
	22号掘立柱建物計測表	
	23号掘立柱建物計測表	
	24号掘立柱建物計測表	
	25号掘立柱建物計測表	
第7表	26号掘立柱建物計測表	
	27号掘立柱建物計測表	
	28号掘立柱建物計測表23	
	29号掘立柱建物計測表23	
第11表	30号掘立柱建物計測表	
	31号掘立柱建物計測表	
第13表	32号掘立柱建物計測表2	38

第14表	33号掘立柱建物計測表	2	38
第15表	34号掘立柱建物計測表	2	38
第16表	35号掘立柱建物計測表	2	40
第17表	36号掘立柱建物計測表	2	42
第18表	37号掘立柱建物計測表	2	42
第19表	38号掘立柱建物計測表	2	44
第20表	39号掘立柱建物計測表	······2	45
第21表	40号掘立柱建物計測表	2	47
第22表	41号掘立柱建物計測表	2	48
第23表	42号掘立柱建物計測表	2	49
第24表	43号掘立柱建物計測表	2	50
第25表	44号掘立柱建物計測表	2	52
第26表	45.号掘立柱建物計測表	2	53
第27表	46号掘立柱建物計測表	2	55
第28表	47号掘立柱建物計測表	2	56
第29表	48号掘立柱建物計測表	2	58
第30表	49号掘立柱建物計測表	2	58
第31表	50号掘立柱建物計測表	2	60
第32表	51号掘立柱建物計測表	2	61
第33表	52号掘立柱建物計測表	······2	61
第34表	53号掘立柱建物計測表	2	64
第35表	54号掘立柱建物計測表	2	64
第36表	55号掘立柱建物計測表	2	66
第37表	56号掘立柱建物計測表	2	67
第38表	57号掘立柱建物計測表	2	67
第39表	58号掘立柱建物計測表	2	68
第40表	59号掘立柱建物計測表	2	70
第41表	60号掘立柱建物計測表	2	71
第42表	不明土製品一覧表	3	20
第43表	61号掘立柱建物計測表	3	48
第44表	62号掘立柱建物計測表	3	49
第45表	63号掘立柱建物計測表	3	49
第46表	64号掘立柱建物計測表	3	50

第47表	65号掘立柱建物計測表351
第48表	66号掘立柱建物計測表353
第49表	67号掘立柱建物計測表354
第50表	68号掘立柱建物計測表354
第51表	69号掘立柱建物計測表357
第52表	70号掘立柱建物計測表357
第53表	71号掘立柱建物計測表359
第54表	72号掘立柱建物計測表360
第55表	73号掘立柱建物計測表362
第56表	74号掘立柱建物計測表362
第57表	75号掘立柱建物計測表364
第58表	76号掘立柱建物計測表365
第59表	77号掘立柱建物計測表366
第60表	78号掘立柱建物計測表368
第61表	79号掘立柱建物計測表368
第62表	祭祀関連遺物出土部位421
第63表	竪穴住居跡出入口一覧表······454 • 455
〈下	巻〉
	頁
第64表	立野 C 地区竪穴住居跡一覧表 $①$ \sim $②$ \cdots \cdots 折込み
第65表	立野B・D・E地区掘立柱建物一覧表457
第66表	立野C地区掘立柱建物一覧表①~②······458~459
第67表	竪穴住居跡出土土器法量表①~②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第68表	掘立柱建物出土土器法量表473
第69表	土壙・溝等出土土器法量表①~④474~475
第70表	接合土器法量表476
第71表	不明土製品計測一覧表①~⑤
付図	1 立野・宮原遺跡路線・遺構配置図 (1/1,250)
	2 立野遺跡遺構配置図 (1/1,000)
	2 立野遺跡遺構配置図 (1/1,000)3 立野B~E地区遺構配置図 (1/400)

I.調査の経過

昭和54年度に開始した高速自動車道九州横断自動車道建設に伴う事前の発掘調査は本年度で8年目を迎えた。この間、昭和56年5月18日に着手した第11地点(立野・宮原遺跡)の調査は延々3年間に及び昭和59年4月30日を以てすべての調査を終了した。

第11地点は中央に溜池があり、小字名をとって、溜池の東側を宮原遺跡、西側を立野遺跡とした。両遺跡とも路線内を走る農道で分割された部分にアルファベットを用いて小地区に区分し、宮原A~D地区、立野A~F地区とし、宮原遺跡A地区だけ調査の便宜上2分割し、AI地区、AII地区とした(付図1)。この台地上には以前より、縄文時代以降の遺構・遺物がかなり知られていたが、旧陸軍大刀洗飛行場建設に伴ってかなり削平・破壊を受けたものと予測された。が、最初に調査にはいった宮原AI地区では約1,700㎡程の面積であったが住居跡を中心に無数のピットが陸続と検出され、3年間にわたって検出した主な遺構の累計は、竪穴住居跡約450軒、掘立柱建物約200棟、多数の土壙、方形周溝墓16基、円墳9基、土壙墓約80基におよび、ピットの数は夥しい量にのぼり、筒形銅器・鏡鑑・帯金具・円面硯・墨書土器・刻印土器・土馬・瓦等を含め、出土遺物も莫大な量となり、6~8世紀代の村落問題や、方形周溝墓等が筑後川北岸のこの地域に営まれた社会状況を考える上で貴重な資料を追加した。

昭和56年度の第11地点の調査は先述のように、まず宮原AI地区から開始した。公団側からは 工事用道路を確保するため,側道予定地の調査を先行して欲しいとの要望が寄せられ,宮原 AI地区の調査と併行して6月3日より立野遺跡の試掘調査に着手した。立野遺跡は先述のよう に東から西へA~F地区に分割した。試掘調査の結果、F地区には遺構は検出できず、調査対象 地点から落としたが、A・D地区で埋葬遺構を、B~D地区で村落関連遺構を検出し、特にC地 区での遺構の密集度は夥しいものであった。工事用道路は立野遺跡の西半部では本線の南側を 通り、C地区の東半部を斜断してA・B地区では北側に切り換えられ、宮原遺跡では本線の 北側を走るということであった。また、工事用道路の造成も西から行ってくる工程になってお り,宮原AI地区の調査終了を俟って9月1日より第11地点の西端部にあたる立野遺跡D・ E地区の調査を開始した。E地区は狭い範囲に竪穴住居跡2軒と掘立柱建物等を検出し、D地・ 区の調査と併行して実施した。D地区の側道部分は住居跡5軒が存在し、同本線部分の封上を 欠失した円墳 6 基,土壙墓13基,土壙 7 基,掘立柱建物 2 棟も同時に調査を実施した。 D・ E 地区の調査と併行してB・C地区の表土剝ぎを行い,公団立会のもとにポールを立てて工事 用道路部分を確認し、B地区全体とC地区のセンター杭以南を調査対象地としてD地区から引 き続き調査を続行した。D・E地区は遺構の密度は薄く、調査は比較的円滑に進んだが、B・ C地区、とりわけC地区は遺構の密度が濃く、単独で存在する遺構は稀で、住居の切り合い関

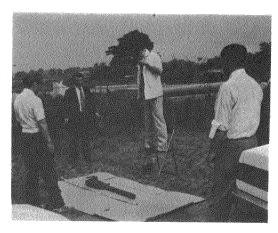
係は複雑で調査は煩雑を極めた。が,竪穴住居跡の貼床下の構造,壁面に遺存する細い杭を打ち込んだと思われる小ピットの存在,カマド対面の粘土や土壙の存在等,個別住居跡についての割と細かな部分へ調査のメスが加えられた。しかし,調査期間の切迫等の条件が重なり,それらも十分に深めることは出来なかった。かなりきつい調査ではあったが,昭和57年2月6日にA地区とC地区の北半分を残して立野遺跡の調査を中断した。この間の立野C地区の調査が第1次調査である。

立野遺跡の工事用道路部分の調査終了後、宮原遺跡の工事用道路部分の調査を続行した。 昭和57年度は立野A地区西半部の調査を除いて、宮原遺跡の主に工事用道路部分の調査に終始した。

昭和58年度は立野A地区東半部と宮原遺跡の2本立てで調査に着手した。宮原遺跡の調査終了後立野A地区に合流し、6月15日にA地区のII次調査を終了した。途中、6月5日からC地区の第II次調査を開始した。丁度梅雨の時期に重なり、集中豪雨の度に調査区3,000㎡全面が水没し、水中ポンプが2~3日フルに活躍する状況が現出した。構造物のできるC地区西端部の調査をまず終え、西から東へ向って調査を行った。この調査では住居貼床をすべて剝がして床面下まで全面調査することが出来た。住居跡が数軒以上で切り合った場合、その下に掘立柱建物や土壙等がすっぽりと隠れている場合がままあり、その意味で、II次調査は完掘することが出来、住居床面下の形状をも含めて十分に図化することが出来た。

調査の過程で、太平洋戦争終了時頃に旧陸軍大刀洗飛行場兵士が使用していた機関銃が出土 した。出土したのは、28号住居跡北側に掘られた幅約3m,長さ約20m程の長方形の土壙南端





第1図 機関銃分解時の様子

からで、これは戦争終了時頃に掘られて軍関係のものを埋めたものと思われるが、機関銃以外の武器等は出土しなかった。福岡県警や甘木署から係官が現地に再三訪れ、鑑識等をした後、甘木署で保管されている。外面は銹が著しかったものの、まだ実用に耐えるものとの事であった。

この様なハプニングもあったが、調査の途中に於いて空中写真の撮影も行い、10月2日にC地区の調査は終了し、立野遺跡の調査は完了した。

立野遺跡の調査終了後,再度,宮原遺跡へ移動し,A・D地区南半部の調査に入った。重機とダンプに追いたてられながら,第11地点の永い永い調査を完了したのは,菜の花の咲き乱れる昭和59年春4月であった。

この間,立野遺跡B・D・E地区の村落遺構を第2集として、A・D地区の埋葬遺構を第5 集として報告した。今回のC地区の報告で立野遺跡の報告は終了し、宮原遺跡は現在整理の途上にあり、東端のB・C地区について、本年度末に報告する予定である。

なお, 立野遺跡 C地区の調査関係者等は以下のようである。

第I次調査

調査期間 自 昭和56年10月6日 至 昭和57年2月6日

調査関係者

日本道路公団福岡建設局

 局
 長
 持永竜一郎

 総務部長
 田代 勝重

 管理課長
 布川 勇

管理課長代理 村上 博之 谷口 浩二

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所 長 江口 正一 副所長 矢野 浩司 庶務課長 森本 太助 用地課長 溝口 萩男 工務課長 深町 貞光 小郡工事区工事長 田口 裕 甘木工事区工事長 瀬戸山邦雄 朝倉工事区工事長 吉永 英一

福岡県教育委員会

総括教育長 友野隆

教育次長 守屋 尚

管理部長 森 英俊

管理部文化課長 藤井 功

ル 課長補佐 蓮尾 謙吉

庶 務 文化課庶務係長 内山 孝之

ル 事務主査 平尾 敏映 三島 洋輝

調 査 文化課調査第2係長 栗原 和彦

ル 主任技師 石山 勲 児玉 真一

ル 新原 正典 佐々木隆彦

調査補助員 高田 一弘 武田 光正

ル 日高 正幸

第II次調査

調査期間 自 昭和58年6月5日

至 昭和58年10月2日 ·

調査関係者

日本道路公団福岡建設局

局 長 今村 浩三

総務部長 落合 一彦

管理課長 梅田 道人

管理課長代理 野口 利夫

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

ル (技術)

所 長 乗松 紀三

副 所 長 西田 功

中村 義浩

庶務課長 松下 幸男

用地課長 岩下 剛

工務課長 山口 宗雄

小郡工事区工事長 友田 義則

甘木工事区工事長 狩野 宗雄

朝倉工事区工事長 平沢 正

杷木工事区工事長 前田 雄一

福岡県教育委員会

総 括 教育長 友野 隆

教育次長 安部 徹

管理部長 伊藤 博之

管理部文化課長 藤井 功

ル 課長補佐 中村 一世

庶 務 文化課庶務係長 松尾 満

ル 主任主事 長谷川伸弘

調 査 文化課調査第2係長 栗原 和彦

〃 主任技師 児玉 真一

ル 技 師 伊崎 俊秋

調査補助員 武田 光正 日高 正幸

ル 狐塚 省蔵

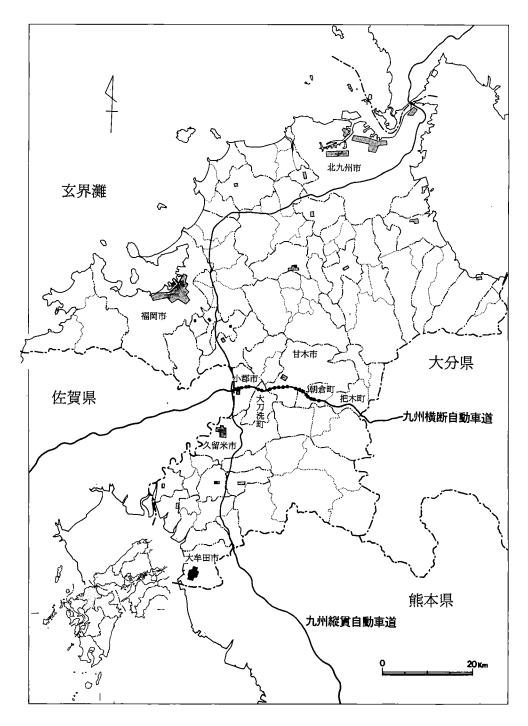
なお、I次・II次調査を通じて、現場の図面作成には次の方々の協力を得た。

池田和博·吉橋秀美·富森裕子

(児玉)



第2図 調査中スナップ①



第3図 九州横断自動車道路線図

II. 位置と環境

所在地:福岡県甘木市大字下浦字立野

立野遺跡の地形的概要と周辺の関連する遺跡については『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』の第2集及び第5集において既に述べられている。また,周辺を含めた立地については『上川原遺跡』にて触れられているので参照されたい。ここでは横断道に関連した遺跡を中心として周辺を簡単に概観しておく。

九州横断自動車道の建設に先立つ文化財の発掘調査においては、この数年間で多くの遺跡がそのヴェールをぬいできた。小郡市から朝倉町に至る路線内で最も顕著な特徴は奈良時代を前後する遺構・遺物が目立つことである。これまでの30数ヶ所に及ぶ路線内外の遺跡の内で、半数以上は奈良時代に関わっていると言ってよい。集落としては、小郡市域で前代(2地点)、光板井(3・4地点)、薬師堂(5地点)、薬師堂東(6地点)があり、大刀洗町では宮巡(8地点)、春園(9地点)、甘木市で宮原(11地点)、高原(16地点)、塔グ上(19-A地点)、朝倉町で大選端(19-B地点)、石成久保(19-C・D地点)、中道(20地点)、西法寺(21-A地点)、大庭久保(21-C地点)、上の原(21-D地点)、狐塚南(22-C地点)、才由(24地点)、美島(27地点)、中妙見(28地点)等々がある。墓地としては、この立野遺跡と大還端遺跡の土壙墓群と甘木市柿原古墳群がある。多くは他の時期と複合しているが、前伏・塔ノ上・大還端のように奈良時代のみの遺跡もある。各遺跡の詳細はその本報告を待つとしても、奈良時代を前後する時期の、この地方の集落構造の解明に向けて資料が蓄積されつつあると言えよう。

この立野遺跡の主要な時期は6世紀後半~7世紀前半代であり、この時期に属する遺跡は上記の中にもあまり見当らない。ただ、東隣にある宮原遺跡が、この時期から8世紀代に及ぶ大集落であり、この立野集落との関連も注意されるところである。

立野遺跡においては多くの祭祀関連の遺物が出土したが、時期のちがいを別として同様の遺物を出土した遺跡も多くはないが幾つか見られる。佐賀県基山町伊勢山遺跡、小郡市西中隈遺跡では手揑土器が多い。甘木市上々浦遺跡の土製模造鏡などはつくりの良好なものである。も(世)の少し目を転ずれば、夜須町松延池畔祭祀遺跡などは当時の祭祀関連遺物の様相を知るに貴重な資料であろう。

また、立野遺跡では弥生終末期の住居・建物もあるが、この時期については甘木・朝倉地方に於いて現段階で内容の知られる遺跡はあまり多くない。甘木市小田道、上々浦、西原、小隈出口、神蔵など、佐田川と小石原川に挟まれた段丘上に集中して知られているのは意味のあることかもしれない。蛇足ながら、甘木市上川原遺跡では甕棺内から扁平磨製石鏃が出土しており、立野遺跡36号住居跡出土石鏃を考える際に参考となる。

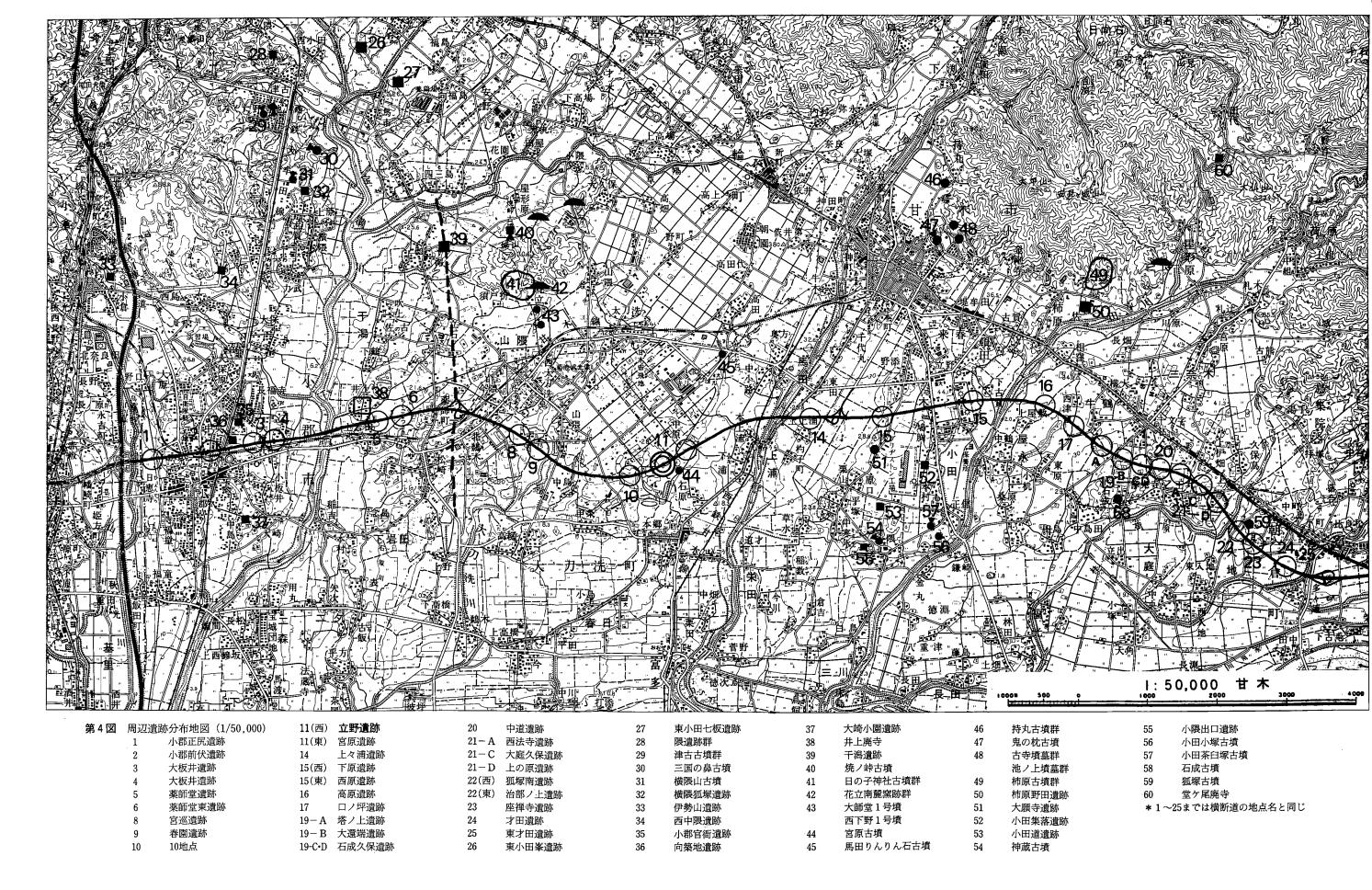
なお、この立野遺跡の立地する台地上には、1918(大正 7)年に日本陸軍の飛行場がつくられた。現在のキリンビール甘木工場敷地とその西南部一帯である。その時分の"遺構"も検出(駐17) された。

註

- 1. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告——(2)——』 1983
- 2. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告——(5)——』 1984
- 3. 甘木市教育委員会『上川原遺跡』(甘木市文化財調査報告 第13集) 1982
- 4. 羅列した遺跡は全て未報告であり、その内容については各遺跡の担当者に御教示をいただいた。
- 5. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告——(4)——』 1984 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告——(6)——』 1986
- 6. 佐賀県教育委員会『基山町伊勢山・鳥栖市永吉遺跡』 1970
- 7. 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告——V——』 1974
- 8. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告――(1)――』 1982
- 9. 赤崎敏男・島津義昭「福岡県朝倉郡松延池畔発見の土製模造品」 九州考古学49・50 1974
- 10. 甘木市教育委員会『小田道遺跡』(甘木市文化財調査報告 第8集) 1981
- 11. 註8に同じ
- 12. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告――(3)――』 1984
- 13. 調査担当者の小田和利氏の御教示による。
- 14. 甘木市教育委員会『神蔵古墳』(甘木市文化財調査報告 第3集) 1978
- 15. 註3に同じ
- 16. 桑原達三郎『大刀洗飛行場物語』 葦書房 1981
- 17. 機関銃の出土した土壙を"塹濠"とするにはやや抵抗もあるが、あるいは戦時中に掘られて使われていた可能性もあるのでこの様に呼んでおく。 (伊崎)

〈補註〉

小郡市前伏遺跡は、遺物整理の進展につれて、7世紀前半代から営まれていることがわかった。



III. 調査の内容

A. 概要

立野遺跡C地区では1981年と1983年の2回の調査で次の如き遺構を検出するに至った。

●古墳時代後期(6世紀後半~7世紀前半)

• 竪穴住居跡

112軒(21~132号)

• 掘立柱建物

40棟(21~60号)

• 土壙

5基(D1~D5)

• 十塘墓

2基(1は7世紀後半)

• 溝

1条

・ピット

多数

●弥生時代後期

• 竪穴住居跡

4 軒(133~136号)

• 掘立柱建物

19棟(61~79号)

• 土壙

2基(D6·D7)

・ピット

●縄文時代晩期

• 土壙

1基(D8)

●時期不詳

土壙

8基 (D9~D16)

• 井戸

2基(SE1·2)

●近~現代

塹濠

1基

• 溝

数条

これらの遺構からは各々の時期に属する多量の土器をはじめとする遺物が出土した。主体は 古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物である。他に遺構は不明ながらも縄文土器1点,スクレ イパー1,黒曜石,サヌカイト剝片が出土しており,その時期の遺構をもとめてグリッドを設 定し掘り下げてみたものの,何ら遺構を見出せなかった。(Ⅲ-D-3参照)

この立野 C 地区の地勢はほぼフラットであるが、遺構検出面でみると座標軸 Y = -34.925の付近(45号住居跡と84~87号住居跡の中間くらい)の調査区中央部あたりがやや低くなる。

視覚的な遺構のあり方は、上記の低くなった所に空間を持って、東半部と西半部とに分かれる様相を示す。竪穴住居はその西半部に大きめのものが多い。その西半部の中程に幅2.7~3.3 m, 長さ18m程にわたって塹濠が掘られていた。この塹濠出土の最も新しい遺物は第6図の磁器碗である。約¼の破片であるが復原口径17cmを測り、天草石を使った良質の胎土で、白色の素地に呉須で草木文を絵付する。1945年の太平洋戦争終結時にこの種の碗が使用されていたことはまちがいない。

掘立柱建物の分布は、調査区西北端部、中央付近南端部、同北半部、東端部といった、大きく4つの箇所に分けられそうである。溝1は調査区のほぼ中程で直角に折れ曲がっている。

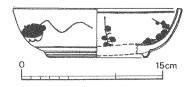
弥生時代の遺構は中央部から東半部に偏在するが、その部分の古墳時代後期の住居跡や包含層からも弥生土器片が多数出土している。北側への拡がりはあまり見込まれず、南側に集落の主体があるのは間違いないところである。

立野遺跡全体の集落のあり方、拡がりについては総括にてふれる。

なお、遺物包含層が随所に見られたが、1号土壙と53~58号住居跡の中間部分を包含層 I、2号土壙と62号住居跡の中間付近を包含層 IIとする。 (伊崎)



第5図 大刀洗飛行場跡地と花立山



第6図 塹濠内出土磁器実測図 (1/4)

B. 古墳時代後期の遺構と遺物

〈遺構・遺物の説明のまえに―凡例―〉

各遺構・遺物については時期的に近接した間の所産とみられるので、あらゆる点で共通した 事項がかなり多い。厳密に言えば、各々が全て手づくりゆえに個性を有しているはずであるが、 我々が特性を抽出しきれないでいるのが大半といえる。ここで、説明の重複を避けるためと、 理解の為の一助として集約できる点は予め一括して記す事にする。

I 竪穴住居跡

個別の住居の各部分(第7図の模式図に拠る)の計測値については,第64表①~④を参照されたい。この表については完全なものではないが,翻って不必要かと思われる数値をも取込んでいるところがある。将来的に斬新な視点でその数値が見直されることを期して,現時点での繁雑さを諒とされたい。

なお,第7図の模式図のように名称及び番号を付して説明する。 P_5 については全ての住居に見られる訳ではないが,出入口に関連するものかも知れない。 $P_{11\sim18}$ についても,住居に伴う確証がある訳ではないが,関連する可能性もあるものとして呈示する。さらに,それらピット群の外に周堤を想定することも出来るが,今はそれについては触れず,将来に期したい。この図についてはあくまでも模式図として捉えていただきたい。

プラン

方形を呈する。厳密に正方形ではなく、隅円の方形となるものが最も多く、'歪んだ方形、長方形気味のもの等がある。

床

貼床で、主柱穴4本に囲まれた部分(主柱間エリア)はよく踏み固められている。それ以外の部分は床面として認知はできるが、あまり固くはない。ほぼ平坦としてよく、レベル差は最大5cm程である。

主柱穴

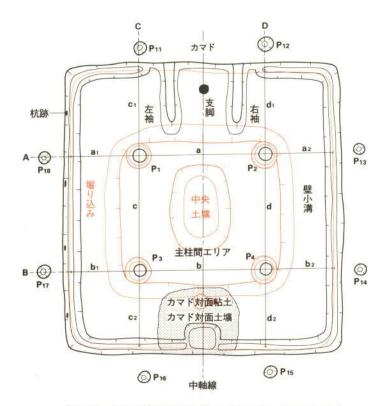
・4本。第7図のように番号を付す。この4主柱間を主柱間エリアと称しておく。

カマド

本来,全ての住居に見られる。造りつけで,二例(113・115号)を除いて全て北辺から北西辺の壁に付設される。突出型のものは3基(B・D・E地区を入れても5基)しかなく,他は壁の内側に構築される。総じて残存状況はよくない。なお,その残存状況に関わることであるが住居の廃棄に際して意識的にカマドを破壊する(潰す)行為が多くなされているようである。

カマド対面粘土

全てではないが大半の住居に見られた。黄色~黄灰色を呈する粘土だが、



第7図 竪穴住居跡模式図と各部の名称 (赤線は下層)

各住居が全て同一の質のものではなかった。入口に関連するものと考えている。

マド対面土壙

普遍的なものではないが、いくつかの住居に見られ、土器の遺存しているものもある。これの性格については後述する。

小溝

かなりの住居に見られる。広狭2種があり、また溝中に小ピットを持つ ものもある。壁体に関与する遺構と考えている。

層の掘り込み

全ての住居に見られ、その代表的形状は第7図の如くである。これの機能については種々の考えが提起されようが、今のところ結論を得るに至らない。

掘立柱建物

行

1間から3間まである。

行

1間から3間までが普通で、例外的に4間のものがある。1間×1間、1間×2間、そして総柱のものは倉庫(クラ)と考えている。2間×2間 の総柱でないものもクラとする。居住用と考えられる建物は、立野Cに於いて3棟しか捉えられない。なお、ピットの整然と並ばないもので建物と

したのがいくつかあるが**,**それは可能性の提示でしかないことを諒とされたい。この点の責は全て編者に帰する。

III 遺物

出土した遺物はかなりの量にのぼり、その中から実測・図示したものも相当数ある。本来であれば個々の遺物について多くを語りたいところであるが、あまりに繁をきわめると思えるので特に最も量の多い土器については下記の如くに概述し、法量のみを第67表①~②に掲げる。

須恵器・土師器の出土した全器種は第8・9・10図の通りである。その各器種の名称は必ずしも妥当でないものもあるが、今次の報告に際しての便宜的なものとして諒とされたい。坏形土器・甕形土器等の「形土器」は省略する。

「胎土」「焼成」「色調」「成形」までは概括して述べ、その後「器形の特徴」・「調整」、等については、各器種ごとに記す。なお、特に土師器に於いて器形で分類しているのは、あくまでも当遺跡に於いての説明の便の為であって、普遍化出来るものでもないし、これを以て次なる目的の手段とするものでもない。

須恵器・土師器以外の遺物(土製品・鉄製品・石製品)については、出土した各住居の項で 出土位置等を触れてはおくが、個々の説明は $B-5\sim9$ に一括する。また、各遺物の出土部位 を言うとき、特に触れないものは埋土中出土である。

Α	須恵器

〈胎土〉

一般には砂粒を若干含む程度で、割に良質といえる。稀に水ごしした様な極めて精良なものや、反対に大砂粒の目立つ粗質なものもある。その差は器形の違いと相関はないので、大きな問題とはなるまい。

〈焼成〉

ごく一般的な焼上りを示すが、温度不足のものもまま見受ける。器形とは無関係である。遺存状態の良し悪しと誤認する時もあるが、焼成の良否は偶然性もあろう。

〈色調〉

焼成と、一部には胎土とも関わる事であるが、還元炎焼成にて概ね灰色 〜灰褐色、灰緑色を呈する。灰被りで灰黄色を呈するものも見られる。温 度不足は紫灰色、灰白色となるが、量的に多くない。

〈成形〉

粘土紐巻上げで、回転台(ロクロ)を使用するも、一本ビキ法は用いられていない。所謂マキアゲ・ミズビキ法である。

「坏」 器形

〔蓋〕 口縁が直になるのは稀で、内傾しつつ緩やかに天井部へ移行する。天井部も大半が丸味を持っているが、極端に扁平なものも稀にある。 口唇部内側の段、外面天井部と口縁との境に段及び沈線が入るものは皆無 である。

丸みを持った底部から内弯しつつ受部へと移り、受部は外上方 〔身〕 へ張り出すのを常とする。立上りは大半が40~50°の角度で受部にとりつ き,端部はやや外反気味となる。口唇部を意識的に打欠いている例が非常 に多い。

調整

〔蓋〕 天井部外面は回転へラ削り, 同内面はナデ, 口縁の内外は回転 ナデを施す。天井部外面についてはナデ及び静止へラ削りのものが稀にある。

底体部外面は回転へラ削り、同内面はナデ、立上り及び受部の 内外は回転ナデを施す。底体部外面に於いてヘラ削りを行わず、ナデのみ のものが稀にある。立上り端部が、丸味をもちながらも内側に稜が入るよ うに面をとるものが多いのが特徴的である。

蓋・身ともに回転へラ削りは左回り(ロクロは右回り)が大半を占める。 へラ記号は有するもの全てが外面(天井部・底体部)に施す。

「叢」 器形

高坏・壺・坩の蓋がある。器形・調整ともに坏蓋に準ずる。撮みを有する ものは高坏の蓋とするが、1点だけかえりを持つものがある。壺蓋は口径 が大きく扁平である。坩蓋は筥形に近く丸味をもつ。

調整

撮みのあるものは、そこが回転ナデである外は坏蓋と変わらない。

「高坏」 器形

有蓋と無蓋の2種がある。有蓋は1点しか見ない。坏身と同様ながら口 径が大きい。無蓋は脚の長いものと脚台状になるものとがある。

調整

調整

有蓋は底部外面がカキ目を施している。無蓋は坏部が回転ナデとヘラ削 りでカキ目を施すものもある。脚部は回転ナデで、筒状部にしぼり痕を見る。 丸底で球形の体部に,頸部が細くしまり,口縁が大きく開く形状を呈す。 口径のかなり大きくなるものと、やや小ぶりのものとある。

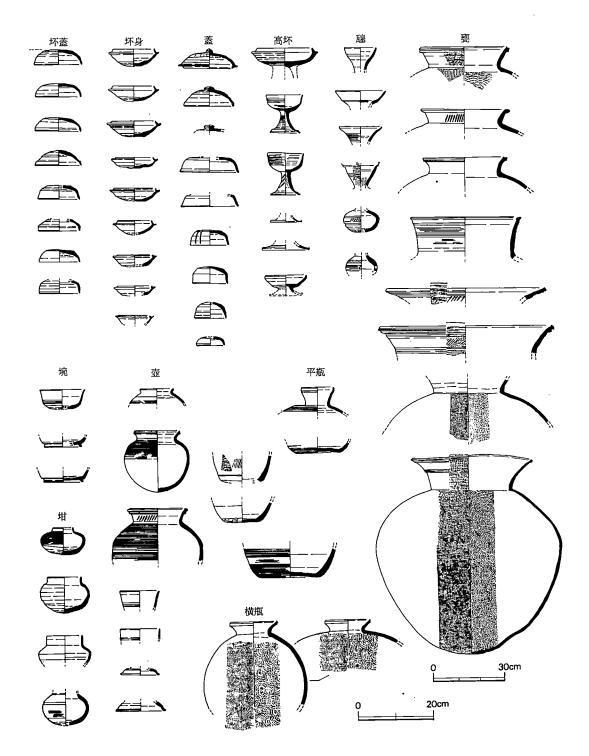
「嬴」 器形

> 底部はヘラ削り、体部下半はカキ目か回転ナデ、同上半に櫛歯列点文を 施し, 肩部は回転ナデとなる。頸部は回転ナデを施し, 櫛描波状文を持つ ものもある。

「埦」 器形

高台の付くものと付かないものとがある。高台の付くもの(5号土壙南 側拡張部上層と114~117住居跡上面出土の2点)は出土状態からしても、 この立野遺跡C地区に於いては住居群と関連するものとは思われず、掘立 柱建物の一部がこの期にあたるのか、或は調査区域外にこの期の遺構があ るものと思われる。

調整 坏身のあり方と変わらない。高台の付くものは、高台部分が回転ナデを 施している。



第8図 須恵器全器形一覧 (1/10, ●は1/16)

「坩・壺」 器形

短頸直口で球形の胴部を持った坩と、外反する口頸部に球形胴という甕に近い器形の壺とである。直口で長頸になる壺もあるのかも知れないが、破片の為断定は出来ない。脚台の付くものは壺であろう。坩・壺とも丸底であるが、平底で壺形になるのもあるかもしれない。

調整

底部は外面が回転へラ削り、内面がナデ、胴部は外面が回転へラ削りと カキ目、内面が回転ナデ、口頸部は内外とも回転ナデを施すのが通有であ る。ただ壺に於いては胴下半部をタタキの後ナデるものが多い。脚台部分 は内外とも回転ナデである。

「平瓶」 器形

数は少なく完形になるものがない。胴部の屈折は緩やかで、稜を持つには至らないと考えられる。

調整

器形

底部は外面がヘラ削り、内面がナデ、胴部は外面がカキ目、内面がナデ を施すと思われる。口頸部は回転ナデである。

「横瓶」 器形

はっきり判るのは1点しかない。口径が平瓶のそれよりやや大きい。

調整

「雍」

胴部は外面がタタキの上を粗い刷毛目,内面が同心円の当具痕である。

胴部破片は多いが、全形の判るものは少ない。口頸部が直立気味に開く もの、ほぼ直立に近いもの、大きく外反して開くものの3様を見る。孰れ も肩部がやや張った形状を呈すと思われる。口縁端部の形態はヴァリエー ションにとむ。

調整

底部~胴部は外面が平行タタキ(擬格子になるものもある)で、内面は 同心円の当具痕を見る。外面に所々カキ目の入るものもある。口頸部は基 本的には内外とも回転ナデで、個体によっては沈線を入れたり、斜めタタ キ痕が認められる。

なお、この甕の破片で同一個体と覚しき資料が複数の住居・ピット等から出土しているので、それについてはB-4にて同一個体資料として触れる。

B 土師器

〈胎土〉

大きく精製と粗製の二種に分けられる。前者はきめの細かい良質の粘土を使用しており、坏・高坏・焼・坩と鉢の一部が含まれる。これには焼成温度とも相俟って遺存状態の不良なものが多い。後者は粗製といっても、大きめの砂粒を含み、あまり良質と言えないという程度のものが多く、極端に粗悪な質のものは少ない。粗製・精製の孰れとも言い難いものすらある。前者との比較の中での粗製としてよく、甕・甑と鉢の一部が該当する。角閃石・雲母片を含むものがある。

〈焼成〉

ごく一般的な焼成と言えるが,精製の土器に温度不十分のものをよく見る。

〈色調〉

〈成形〉

粗製のものは黄褐色・橙褐色などの褐色系を呈し,甕・甑に於いては2 次的火熱を受けて赤味がかったものや,煤が付着したものを見る。精製土 器は黄桃色・黄橙色の明るい黄色系統の色調である。

坏・高坏・塊・鉢・坩等に於いては、粘土紐及び粘土帯の巻上げか積 上げと思われるが、その痕跡を器表面に見ることは出来なかった。一本ビ キ法での成形は見ない。

甕・甑は粘土紐巻上げであり、断面を見ると粘土紐接合の様子が良く判るものが多い。それは断面図に於いて間違いなく、右上りの斜線となって描かれる。粘土紐の幅は $1 \, {\rm cm}$ 弱の狭いものから、 $4 \, {\rm cm}$ 強のものまである(${\rm gt}$ 4)。 $2 \, {\rm cm}$ 前後のものを多く見る。なお、「器の下半部は外型のなかに粘土をつめて成形し、その上へ粘土を巻上げて上部をつくる方法」が存するか否かは判らない。

把手の接合は、把手に突起をつくって本体に差込むようにするソケット式、粘土塊か粘土棒かを介して接合するジョイント式、ただ単にお互いを 貼り合わせる方式の三様があるらしい。把手自体の外面に貫通しない孔を 穿ったものが多数見られる。

大型品に於いて,底部と口縁部は分厚いが,胴部はかなり薄いものも見られるので,タタキしめの成形を行っているものと思われるけれども,その痕跡は見出せなかった。

「坏」 器形

形状に大きく4つの種類がある。

- I. 鉢に近い形状をなす。直口のものと口縁部が外反するものを見る。高 坏Iの脚をとった形状である。
- II. 屈折部があり、直立するものとS字気味に立上るものとがある。
- III. 境に近いもの、鉢に近いものを見るが、深さに於いて浅いものをさす。 IV. IIIとしても良い形状をなす。量は少ない。

調整

口縁内外(IIに於いては屈折部まで)は回転ナデ,底体部内面はナデ,同外面は横方向のヘラ削りを行う。

「高坏」 器形

坏部は脚との接合部から丸味を持って内弯気味にカーヴしつつ伸びてゆくが、その形状に3種類ある。

- I. 通有の器形であるが、屈折部から口縁にかけては外弯しつつ開くもの、 直に開くもの、端部に至って急に外反するもの等、ヴァラエティに富む。
- II. 屈折部の所がS字状になるもの。数は少ない。 I と区別しにくいものもある。

III. 屈折部を有しないもの。これも数は少ない。脚部は筒状部に長短の差をみるが、等しくラッパ状に開いて裾部へ至る。ヘラ削りの施し方によって裾部内外に段を持つものと持たないものがある。

調整

坏部は口縁下の屈折部までが回転ナデ,底部内面はナデ,同外面は削りを施す。脚部は筒状部が外面は縦方向,内面は横方向のヘラ削り,裾部は内外とも回転ナデにて調整する。全体に磨滅して,調整の詳細を摑みにくいものが多い。

「埦」器形

坏・鉢と区別しにくいものもある。大きく2種類がある。

I. やや浅めのもの(a)と深めのもの(b)とがあり、両方ともに口縁が直口とやや外反するものとを見る。

II. 口縁下でS字状に屈曲するものである。

調整

坏と全く同じである。外面ヘラ削りが口縁のすぐ下にまで及ぶものが稀にある。

第9図 土師器全器形一覧① (1/10)

調整

もの等若干の変化はあるが、球形の胴部、丸い底という点は共通する。

口頸部は回転ナデ, 胴部・底部は内面がナデ, 外面がヘラ削りを行う。 磨減が著しい為詳細の不明な点が多い。

「鉢」 器形

精製 (A) と粗製 (B) とがある。この 2 種は基本的には異なった用途に供するものとしてつくられたと思われる。両方とも 2 類に分けうる。

AI. 口縁下がS字状に屈曲するもの。

II.大きく外上方へ開口するもの。

BI、浅めのもので多くは平底である。

II. 深めのもので、小型品は平底・丸底両方を見るが、やや大型になると丸底のみである。

調整

A類は坏・焼と全く同様の調整を示す。ただ、AIIは外面の削りが縦方向となる。B類は口縁周辺は回転ナデであるが、胴部・底部については内面がナデかへラ削り、同外面がナデか刷毛目を施す。外面にヘラ削りは見ない。

「有脚埦及び鉢」

これは高坏としてよい形状のものもあるが、胎土・成形にかなり異質な 点があるので分けることとした。この器形のものが精製と粗製の中間的胎 土を示している。調整は高坏に準ずるが、特に脚部のナデにおいて指押え の著しいものがあり、それらは手捏的外観を示している。

「脚台」

本来は・小型の甕か鉢に付くものである。口縁まで一部なりとも残存していたのは、僅か4例にすぎない。

器形

本体の底部から外反して開く形状のものと、やや踏んばるように内彎気味になるものとがある。前者が圧倒的に多い。脚台の高さは最大3.6cmである。明確な底部穿孔が3例ある。

調整

脚部自体は回転ナデで,天井部はナデというのが普通だが,内面に刷毛目をもつものと,しぼり痕の見られるものがある。

「蓋」

断定は出来ないが、甑か甕かに被せた蓋形の土器であろうと思われる破片が若干ながら出土している。撮みらしき部分4点、裾部4点があり、陣笠形のものは無いようである。ナデと刷毛目にて調整する。

「甕」 器形

大きく2類に分ける。

Ⅰ類

頸部ですぼまって口縁が外反するという普通に見られる形態である。大きさで大・中・小の3つに分けられるが、分類の常として中間的大きさのものも当然有り得る事で、厳密な区分ではない。完形に復しえた器形を参考として、全体の形状を以って判断するけれども、一応の目安は口径である。破片資料の多い中での判断は困難を伴うが、主観的ながらも全体の形

状を念頭においた。(第10図の器種一覧では甕II類,甑との図中のバランスより,大型品から先に並べた。)

①小型 口径11cm以下のもの(b)。稀に7.5cmに満たぬもの(a)があって、これは特殊的な小型品といえる。丸底であるが、若干平底がかるものもある。胴部の張りは少ない。口縁は僅かに外反する形態のものが多い。脚台の付くものが稀にある。鉢の深めのものと区別しにくいものもある。

②中型 口径 $11\sim17$ cmを普通の基準とするが,次の大型のより大きい口径を持ちながらも,器形としては大型にしえないものもある。これらは更に小(a. 口径 $11\sim13$ cm),中(b. 同 $13\sim15$ cm),大(c. 同 $15\sim17$ cm,稀に18cm程のものあり),特大(d,同19cm以上)の4種類には分けうる。底部は丸底だが,大甕と同様に平底風になるものが多い。胴部の張りは顕著でない。口縁はその形態に種々のものを見る。脚台を有するものがある。

③大型 完形品に復しえた物で見ると、口径17cm以上、胴径24cm以上、器高30cm以上を測る。ただ、稀に口径17cmを切るものもあるが、形態からみてどうしても大型としか考えられないものがある。底部はおよそ平らになっているが、完全に平底というのではない。平坦地に置いた際には、倒れはしないけれどもぐらつきながら立っている。底部から胴部へはやや開きながら、長胴の形状で肩部へと移行する。肩部は所謂いかり肩の張った形状が大半を占める。口頸部は大きなカーブを描きながら外反し、如意形に開く口縁となる。頸部のすぼまる形状と外反する口縁・長胴のあり方など、全体的に均整のとれたプロポーションと言える。

川類

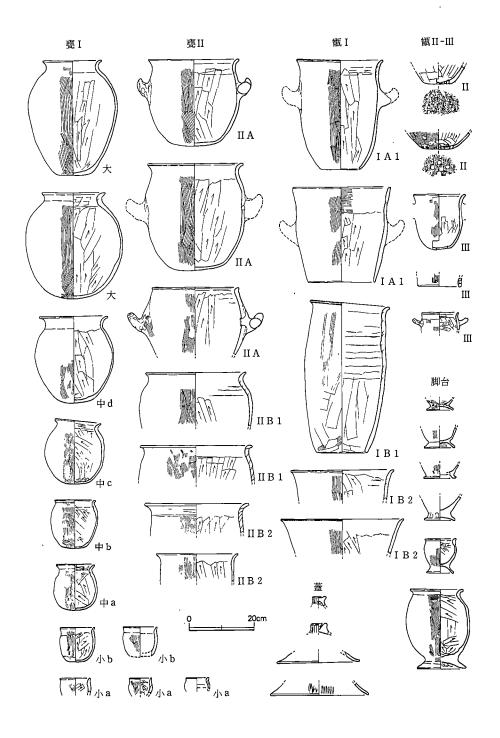
普通甑の下に置く甕であろう。把手の付くIIAと、付かないIIBとに分ける。双方とも機能上、口径の大きいものを常とし、頸部のすぼまりは殆どなく、胴部の張りもあまりない。口径23cmをこえる。

IIA 口縁の外反度の強い物と弱い物とがある。

II B 破片が多い為,II A になる物(把手が付く)もかなり出てこよう。 甑 I A とも区別しにくい物がある。肩部に張りを持つ II B_1 と持たない II B_2 がある。口径23cmを切る,やや小型の物が若干存す。

調整

I. II類ともに調整は全て同じである。外面は底部が刷毛目の後にナデ、胴部から頸部までは刷毛目、口頸部は回転ナデを施す。稀に胴部を削り上げるものもある。刷毛目の起点の判る例は全て上(口頸部)から下(底部)方向へなされている。化粧土をかけたらしい個体も稀にある。内面は底部がナデ、胴部は下から上への縦方向へラ削り、口頸部は回転ナデを行う。



第10図 土師器全器形一覧 (1/10)

頸部最下端に横方向へラ削りを施すものが,大型のものの一部に見られる。 また,口頸部は横方向の刷毛目後に回転ナデを行うものが多い。

「甑」 器形

全体の形状により、3類をみる。

Ⅰ類

把手の付く物(IA)と付かない物(IB)に分ける。

- IA-1. 底部から丸味をもって(やや張りをもって)開くか,或は殆ど 土管状になる。口縁の外反度は前者が大きく,後者は小さい。
- IA-2. 底部から直線的にラッパ状に開く物。口縁の外反は殆どないのが多い。 $1 \cdot 2$ とも把手は口縁下 $4 \sim 10$ cmの所につく。
- IB 把手のない事以外はIAと全く同じである。

Ⅱ類

甕 II A 類と同様の形状を示すと思われ, 小円孔を多数穿ったものである。

Ⅲ類

特殊な小型品である。

調整

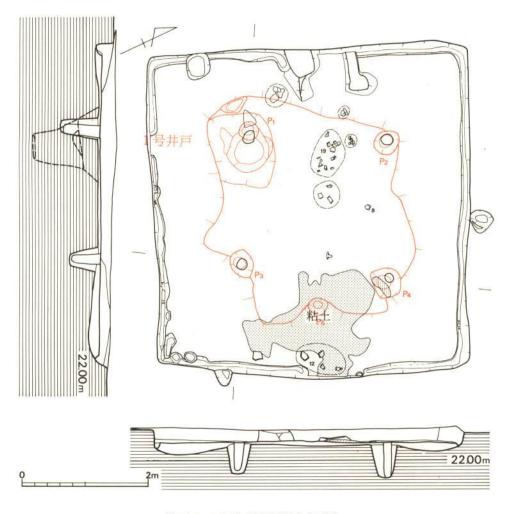
底部透し部分端部の内外を回転ナデする他は、甕と全く同様である。

- 註1.115号については北西辺になく,また南西辺の残存する壁面にも見られない事から,北東辺と推 定したものである。
 - 2. 実測した土器は1,500個を越している。
 - 3. 中村浩『須恵器』考古学ライブラリー 5 P45 ニューサイエンス社 1980
 - 4. 甑(I類)底部の透孔周辺の断面で、右下りの接合痕らしきものがある。これは底部から口縁まで円筒状に成形した後、倒立して透孔部分の整形にもう一段分の粘土紐を積み上げて(この時は輪積みとなる)接合したものかと思われる。この点についてはいま少し検討の余地がある。
 - 5. 4 cmにも及ぶように見えるのは、多分その中間の接合痕が見えないものと思われるが、未だはっきりしない。
 - 6. 田中琢「畿内と東国 一古代土器生産の観点から一」 日本史研究90 1967 またこの中で、籾痕の存否を問題とされているが、立野遺跡 C地区に於いては気付いただけでも 20数点の土器・支脚に籾痕があった。ことに、土製支脚に多数の籾痕を見るものについては、その 背後に別なる意味付けを考えるべきであろう。
 - 7. この孔の用途については、1. 装飾的なもの、2. 実用的なもの —例えば、この孔に棒を留め 置いて本体を支えるなど—、3. マジカルなもの等が考えられるけれども未だはっきりしない。
 - 8. カマド内での支脚に転用されるのは、小型のbと中型のa・bである。
 - 9.60号住居跡のカマド内に遺存した炊飯具のセットを見ると, 甑の下に甕 I 類の大型品が置かれた 状態であった。この様な例もあるのか特殊事例なのか現時点では不明。 (伊崎)

1. 竪穴住居跡

21号住居跡 (図版7, 第11図)

C地区西南端に位置し単独で営まれている住居跡である。一部現代溝に切られてはいるものの、主に黒褐色土の埋土であった。平面形態・規模や主柱穴の位置は一般的なものであり、北西辺中央部の壁際にカマドが付設されている。壁小溝はカマド部とカマド対面以外に一ケ所途切れてはいるものの巡っている。カマド対面には灰色系粘土がやや広範囲に潰れた様相を呈して散布している。床面は略水平に成形され、主柱間エリアがかなり硬化していた。床面下層には壁に沿って掘り込みが存し、 $P_3 \sim P_4$ 間中央で P_5 も検出した。 P_1 に切られた井戸1も存した。



第11図 21号住居跡実測図 (1/60)

カマド (第12図)残存状態はあまり良くないく支脚も存しなかった。火床面は51×67cmを測りやや窪む程度である。

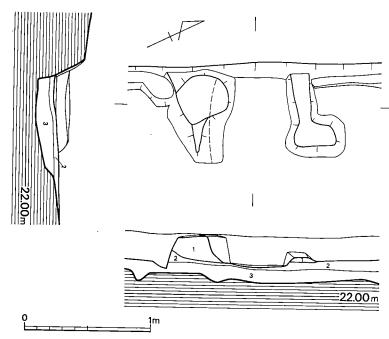
出土遺物 (図版65, 第13図)

出土量はやや多い方である。土錘と若干の不明土製品が埋土中より出土した。

須恵器 $(1\sim6)$ $1\cdot3$ ≥ 4 がカマド対面粘土付近よりの出土で、地は埋土中である。若干時期が異なる 3 ≥ 4 が同一地点より出土したことは、埋没状態を考える上で問題となるであるう。

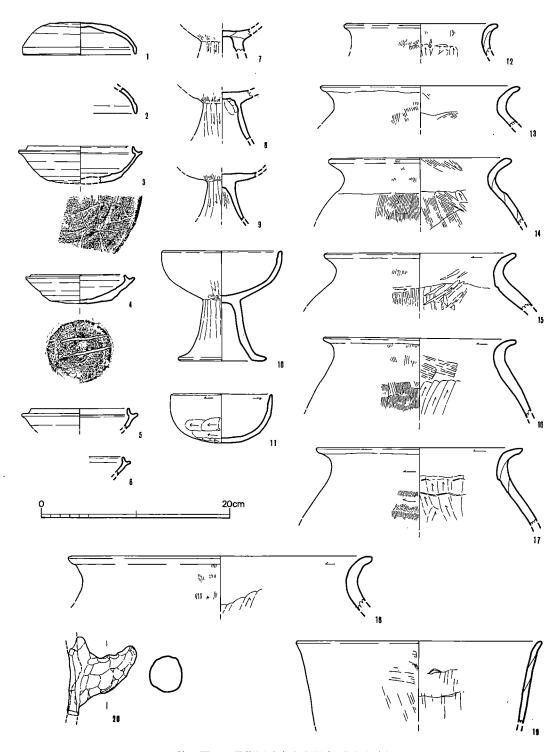
なお、埋土中より出土した坏身片が22号住居跡埋土中より出土したのと接合した。

土師器 (7~19) 甕類の大半が中~大型で12はカマド対面粘土付近より出土し、他は埋土中より出土した。甑は19が主柱間エリア床面上の出土である。7・8と10は丹塗りの精良な高坏である。8は主柱間エリア床面上で出土したもので、廃棄時に使用された可能性を有する。11は完形の精良な境で主柱穴より出土したもので築造時のものか。 (武田)



- 1 焼土混入黄褐色粘質土
- 2 黒灰褐色土・茶褐色粘質土混じり
- 3 2に黄褐色粘土混じり

第12図 21号住居跡カマド実測図 (1/30)



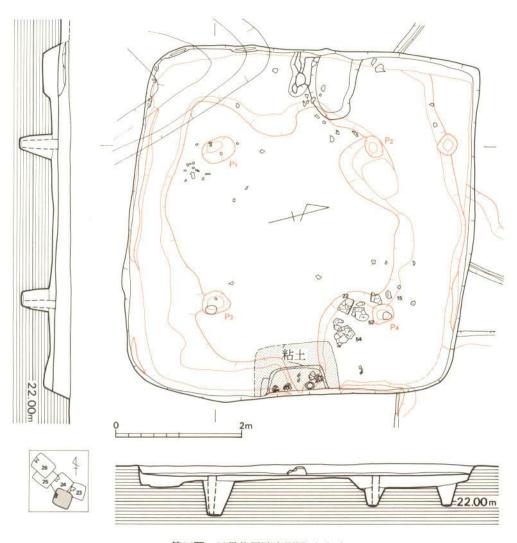
第13図 21号住居跡出土土器実測図 (1/4)

22号住居跡 (図版 8, 第14図)

 $23 \cdot 24$ 号住居跡を切って営まれ、21号住居跡と主軸をほぼ同じくしている。西側コーナー付近は近時の溝により攪乱を受けていた。 $P_3 \cdot P_4$ の 2 主柱は径15cm程の柱痕を確認した。壁小溝はごく一部に見られるのみである。床下層の中央土壙は見られない。

カマド対面土壙 (第15図) 黄色砂質の粘土が略長方形状に広がり、その下に土壙が見られた。95×40cmの長方形プランである。土壙中には土玉と須恵器坏身が完形で、土師器の高坏・坏等が潰れた状態で出土した。

カマド (第16図) 左袖の一部が残存するのみで、右袖から火床にかけては後時のピットに

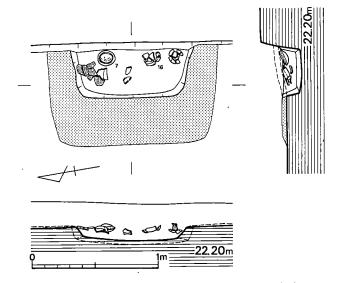


第14図 22号住居跡実測図 (1/60)

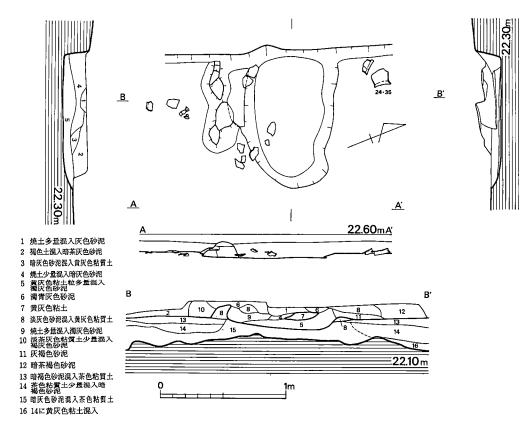
より削平されている。周辺に若干 の土師器が散乱していた。

出土遺物 (図版65~68,第 17~20図)

かなりの量が出土したが、大半は埋土中、それも主柱間エリアの上面からである。P4付近では床面に密着して潰れた状態で甑・甕が出土している。北辺中央付近床面の手捏土器、カマド対面土壙内の土玉、その南隣埋土中出土の土製模造鏡、それに把手状・棒状の土製品等については後述する。



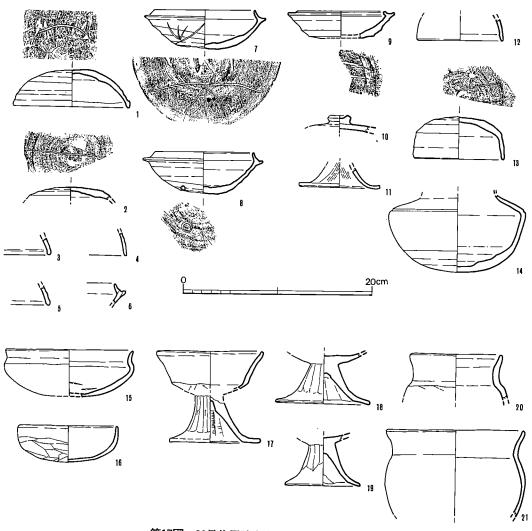
第15図 22号住居跡カマド対面土壙実測図(1/30)



第16図 22号住居跡カマド実測図 (1/30)

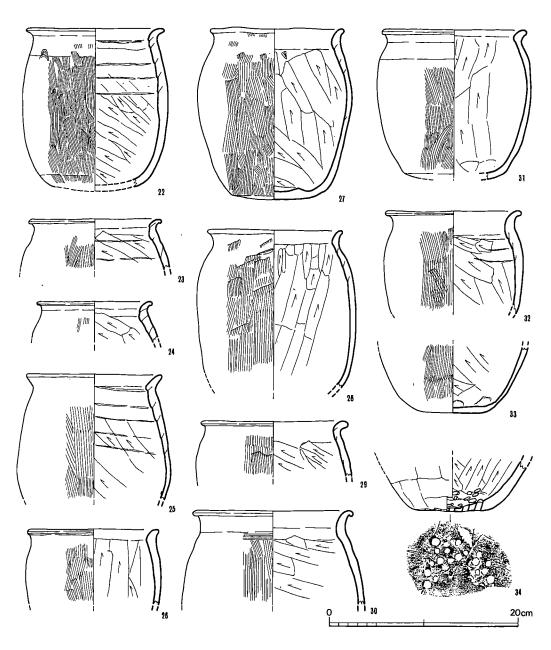
須恵器 $(1\sim14)$ $12\cdot13$ は坩蓋であろう。 7 はカマド対面土壙で,他は埋土中に存した。なお,坏身の 1 点が21号住居跡のそれと,また別の 1 点が27号・50号住居跡出土のものと,更にもう 1 点が25号住居跡出土品と接合した(B-4参照)。

土師器 (15~55) 15~21は精良品であ。甕は小型はほとんどなく,中~大型が大半を占める。34は数少ない甑II類の例であるが,円孔には大小 2 種類があり,小さい孔には貫通しないものもある。24は 2 次火熱を受けて赤変しており,支脚として利用されていたものか。16がカマド対面土壙,15・22・23・50・52が床面,24・35がカマド右側の出土である。なお,籾痕のある土器を 2 点確認した。

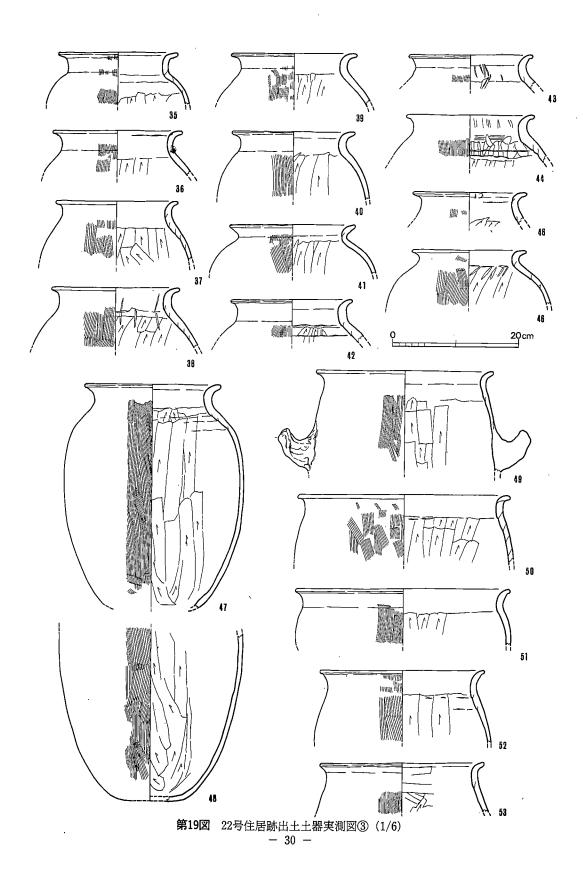


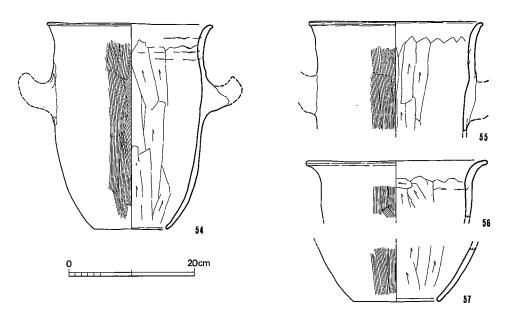
第17図 22号住居跡出土土器実測図① (1/4)

この住居のカマド対面土壙内土器は、住居設営時に置かれたまま残っているものと思われ、また、 P_4 周辺の土器は廃棄時に置去りにしたと考えられる。住居廃棄跡は凹みとなった所がゴミ捨て場として利用されたのであろう。 (伊崎)



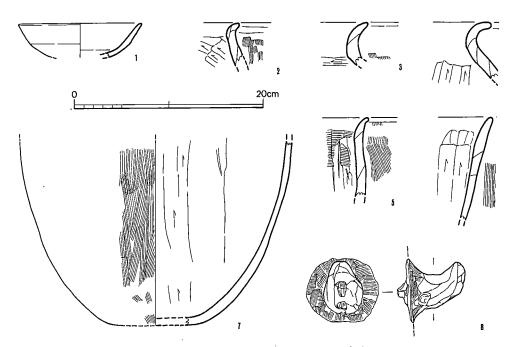
第18図 22号住居跡出土土器実測図②(1/4)





第20図 22号住居跡出土土器実測図④ (1/6)

23号住居跡 (図版 8 · 9, 第22図)



第21図 23号住居跡出土土器実測図(1/4)

22号住居跡の東隣にあり、22・24号住居跡に一部を切られている。壁下に斜位に流入した土を除けば、他はほぼ水平の土層を示す。壁小溝は北壁と東壁の一部にのみある。カマド対面には粘土が床面にくっついて広がっていた。下層の中央土壙は見ない。

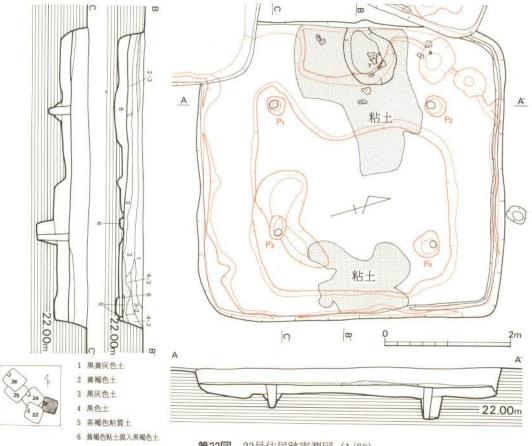
カマド 西壁中央の上層に粘土の広がりが見られたが、カマド本体は完全に潰れた状態であった。周辺に若干の土器片を見るのみである。

出土遺物 (図版68, 第21図)

カマド周辺に若干存したのみで、埋土中にもごく僅かしかなかった。須恵器はカメ片が 2 点と坏片が 1 点出土したが、その坏片は P1050出土のものと接合した。これは B-4 に図示する。埋土中出土の砥石 1 と土製模造鏡、不明土製品について別述する。

土師器 $(1 \sim 8)$ 1 は高坏になろう。屈折の度合いは弱い。 8 の把手は本体とさし込む突起がある。また孔を 2 個有する。 $6 \cdot 7$ がカマド周辺からの出土である。

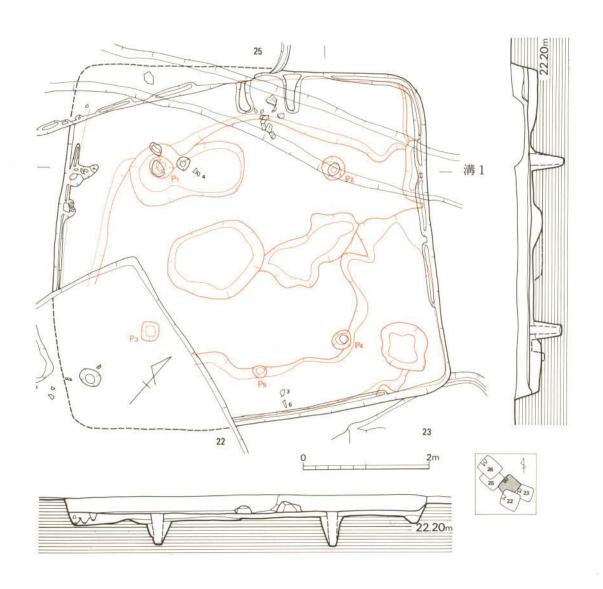
なお、籾痕のある土器片1(甕)を確認した。 (伊崎)



第22図 23号住居跡実測図 (1/60)

24号住居跡 (図版 8, 第23図)

 $22\sim26$ 号住居跡の5軒の中で略中央にあり、23号住居跡を切って、 $22\cdot25$ 号住居跡と溝1に切られるが残存する壁面と下層のあり方とで全形は復原出来る。それはやや台形気味の平面形となる。黄色っぽい黒色土を埋土としていた。壁小溝は途切れながらも全周壁下に存する。カマド対面の粘土はなかった。床下層には中央土壙と P_5 がある。

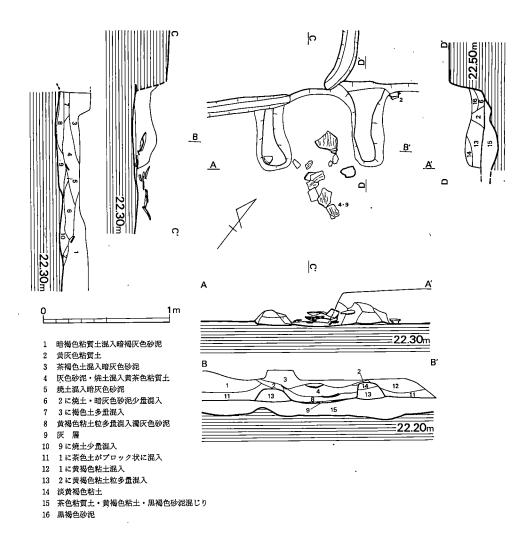


第23図 24号住居跡実測図 (1/60)

カマド (図版 9 ,第24図) この真上を溝 1 が通り,一部を25 号住居跡に切られるが,両袖 とも残存していた。焚口幅51cmでその付近に甕の破片が散乱していた。

出土遺物 (図版68, 第25図)

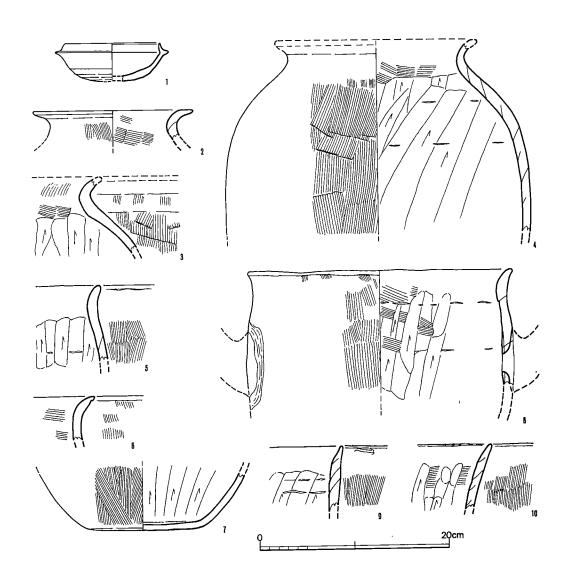
土器量は極めて少なく、土器以外の遺物としては床下層から手捏土器 1 個があったみのである。



第24図 24号住居跡カマド実測図 (1/30)

須恵器 (1) 床下層出土の,この1点のみである。

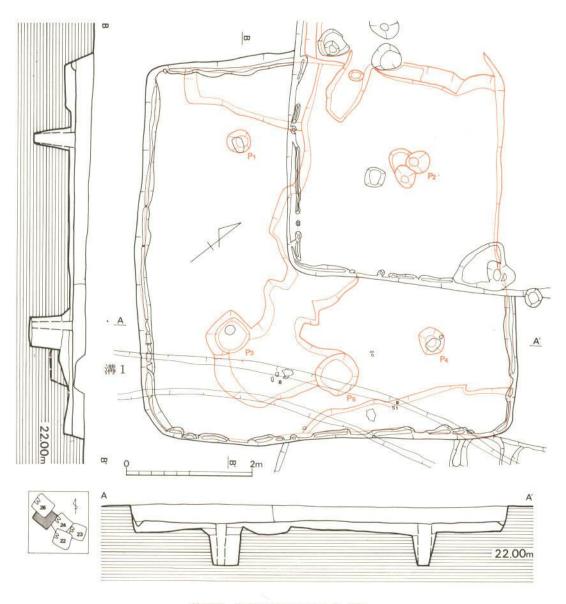
土師器 $(2\sim10)$ 大型の甕と甑のみである。6 が埋土中である外は床面から出土した。8 の甑は把手を欠失するが,ソケット式のさし込みの孔が見えている。 (伊崎)



· **第25図** 24号住居跡出土土器実測図(1/4)

25号住居跡 (図版 8, 第26·27図)

24号住居跡を切り、26号住居跡と溝1とに切られている。26号住居跡に切られた北西辺にカマドを持っていたのであろう。床面はガチガチにしまっていた。壁小溝は所々に小ピットを配する形で全周する。床下層の掘込みは典型的パターンを示さない。



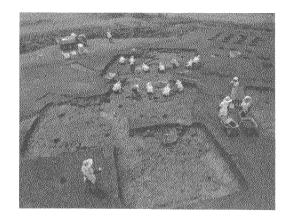
第26図 25号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (第28図)

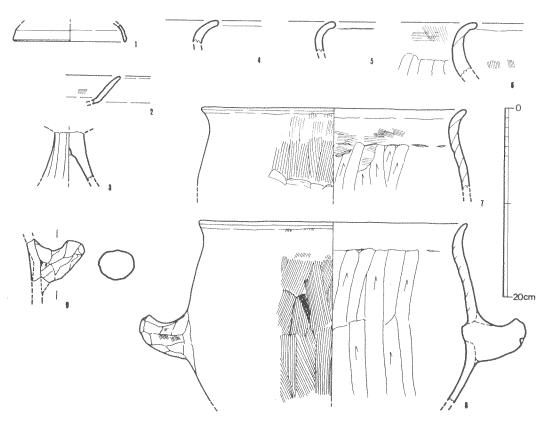
量は少ない。床面出土の紡錘車、やや浮いて出土した鉄器、手捏土器は別述する。

須恵器 (1) 坏蓋片 1 点の他に甕片 1 をみるのみであった。

土師器 (2~8) 2・3は精製の高坏である。8はP₅付近の床面から出土した。 (伊崎)



第27図 調査中スナップ②



第28図 25号住居跡出土土器実測図 (1/4)

26号住居跡 (図版8·10, 第29図)

25号住居跡を切って営まれた大型と言える住居である。黒色土及び淡黒色土を埋土としていた。 $P_2 \cdot P_4$ については柱痕を確認した。抜き去られた様子は示していない。カマド対面に粘土は無いが、土壙がある。床下層の中央土壙はみない。

カマド対面土壙 床面より40cm強の深さを測る。この住居が使用されていた時に、この土壙自体も機能していたか否かは不明である。この中から手捏土器と須恵器2点が出土し、その須恵



第29図 26号住居跡実測図 (1/60)

器のうち1片はカマド右側から出土したもの及び22号住居跡埋土中出土のものと接合した。

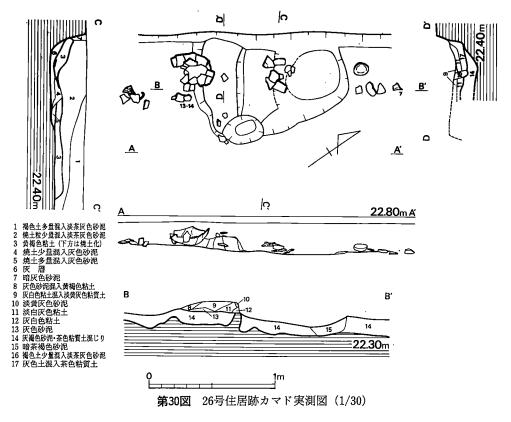
カマド (第30図) 左袖のみ残存する。丁度22号住居跡カマドの遺存状態とよく似ている。カマド左袖傍には大型甕の下半分が潰れてはいるものの,カマドに寄りかかるように出土した。本来据え置かれていたものだろう。

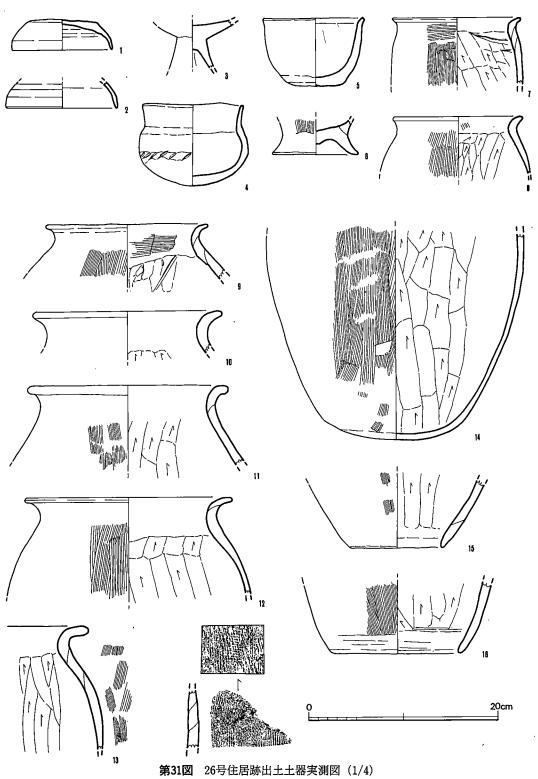
出土遺物 (図版68·69, 第31図)

カマド内外と P_1 の周辺,そして P_5 の周辺で床面にくっついて土器が出土した。しかし,埋土中と合わせてもあまり土器量は多くない。カマド対面土壙の北隣・壁小溝上面埋土中に鉄器片が存したが,調査中に紛失した。カマド対面土壙内と埋土中の手捏土器については後述する。

須恵器 (1・2) 1はカマド対面土壙内の出土である。埋土中の壺片で32号住居跡出土品と接合したもの及び先に述べた坏身についてはB-4で触れる。他に甕片が3点ある。

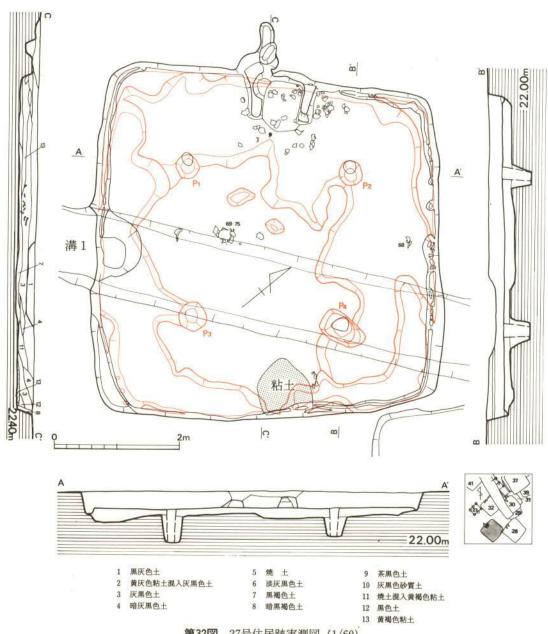
土師器 $(3\sim17)$ 3・4 は精製である。 4 はカマド対面土壌の西側で床面に窪みをつくって据え置かれたかの様な状態で出土した。 7・13・14・16はカマド内外にあり,13・14は左袖横に置かれた甕である。 $9\sim12\cdot15$ は床面に存した。17は埋土中出土の破片であるが,外面に布目痕が存する。わりと粗い織目で経糸・緯糸の間隔が 2 mm位ある。 (伊崎)





27号住居跡 (図版11・12, 第32図)

28号住居跡と東隅で接するかの如くであるが、切合いはない。溝1が、上面を略東西に横切っ ている。検出面から10cmも掘り進めないうちに、大量の土器が出土しはじめ、土よりも土器片 の方が多い位にかなりの量が存した。この住居が廃絶された後の窪みに投棄されたものである。



第32図 27号住居跡実測図 (1/60)

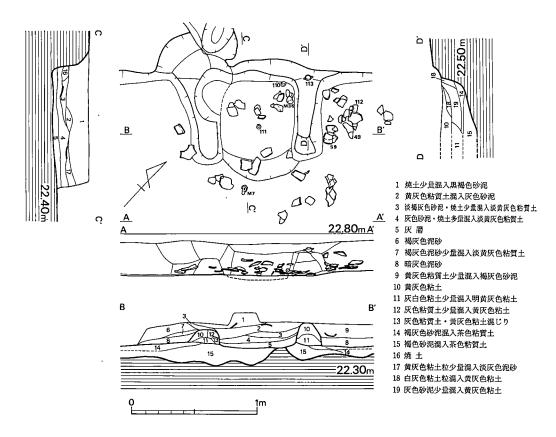
床面のすぐ上から大量に出土しているので、住居廃絶時に上屋も片付けられたのであろう。投棄されていたのは土器ばかりではなく、一部に焼土も見られた。カマド対面にはあまり広くない範囲で粘土が見られた。また、南壁中央付近に土壙が存し不明土製品が出土した。

カマド (図版12, 第33図) このカマドを特徴づけるものは何といってもその内外出土の祭祀関連の遺物である。焚口幅55cm, 奥行65cm程で, 焚口前面に不明土製品があり, 他に手捏土器が火床中央部と最奥部に各1個, 右袖上に1個, 右袖右側に1個存した。住居廃棄時に何らかの祭祀(まつり)が行われたことは確実であり, この点については総括で再度触れる。

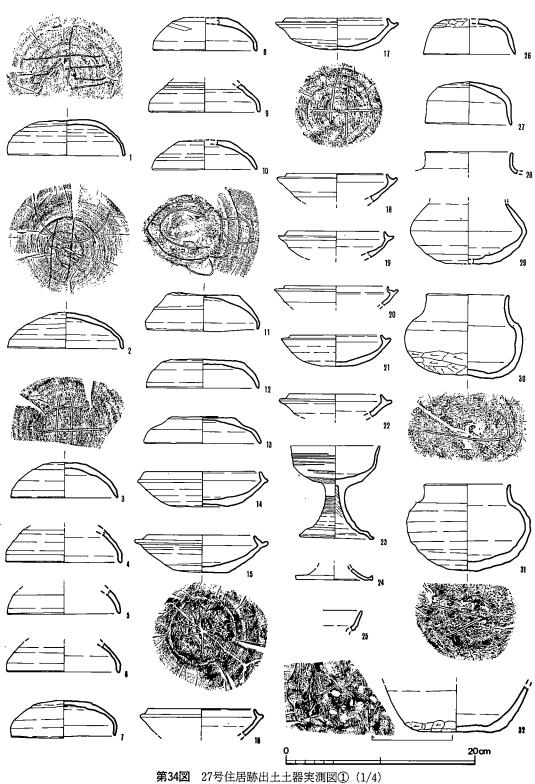
出土遺物 (図版69~75, 第34~40図)

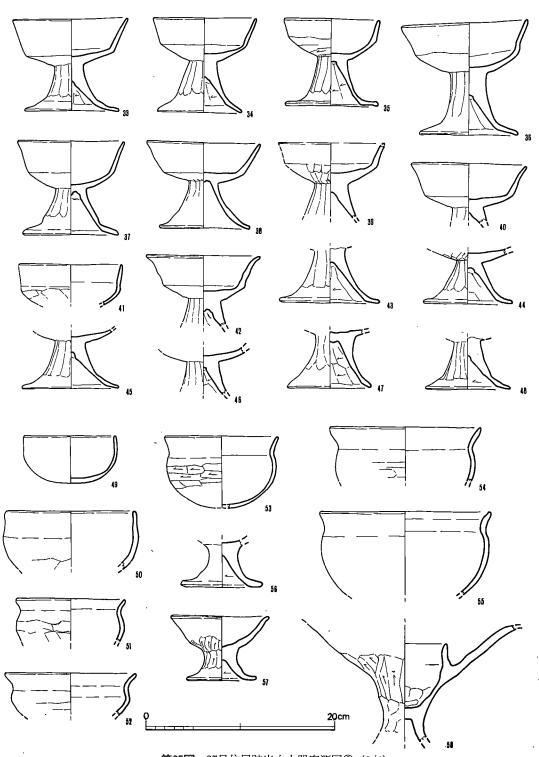
既述のように埋土中から大量の土器が出土したが、その他に鉄器(鋤先1、鏃片2)、砥石1、 模造鏡、不明土製品、手捏土器2も存した。手捏土器、不明土製品がカマド周辺から出土した ことも前述の通りである。

須恵器 (1 \sim 32) 図示した以外に甕・横瓶の破片も出土している。25は鏧か壺になろう。30・32の底部は静止へラ削りを施す。14・30は焼成があまい。24はカマド左から出土した。他



第33図 27号住居跡カマド実測図(1/30)

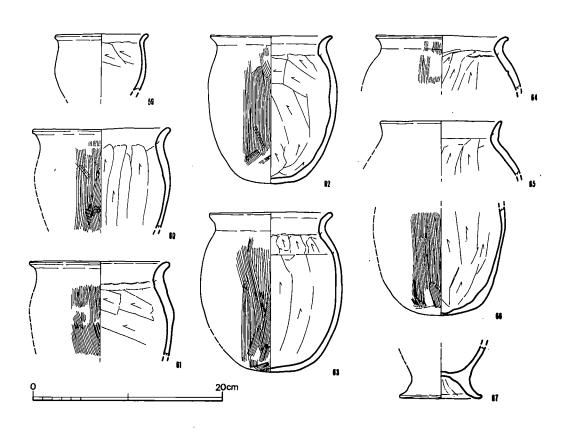




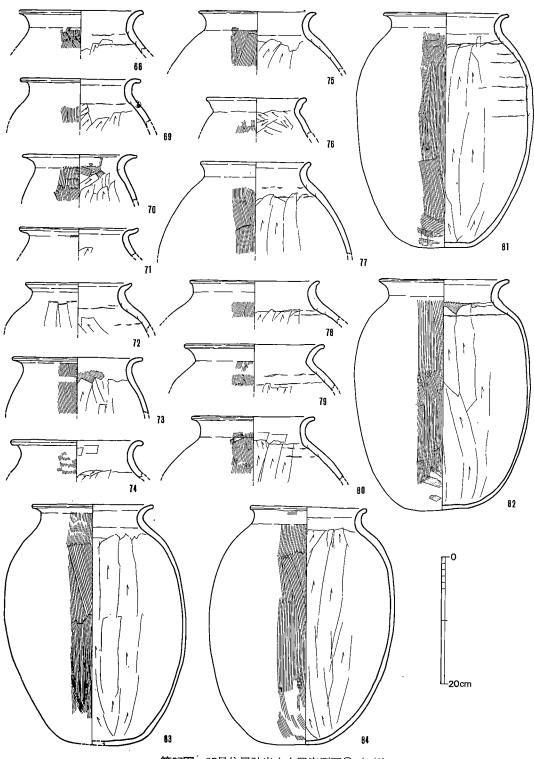
第35図 27号住居跡出土土器実測図② (1/4)

に甕の破片が7点程ある。

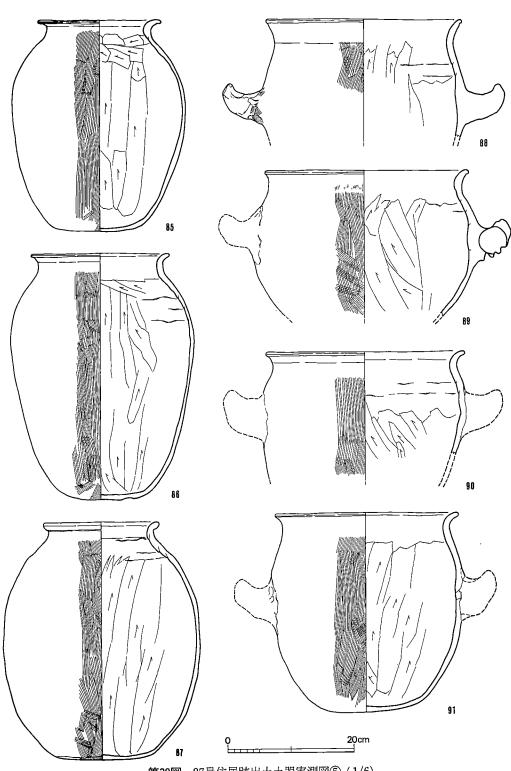
土師器(33~108) 精良品(33~58)は高坏が多い。56・57は粗製と精製との中間位である。58は特異な器形で、高坏に埦を折衷した形状をなす。用途としても日常的なものではなかろう。甕は小型・中型・大型と全て揃っている。 I 類の大型は 7 個が完形に復しえた。甕 II 類の89の把手には 3 個の孔が見られる。98・99は恐らく蓋となるものであろう。甑は106が土管状を呈して特異である。49・59がカマド周辺に、68、69・75が床面に存し、76は床下層から出土した。この住居出土品と22・50・51・56・106号の各住居からの出土品と接合したもの及び同一個体であると確認しうるものが存する。特に50号住居跡出土品とは須恵器、土師器ともで5 点程が接合しているのは、お互いに住居廃絶後の窪みがごみ捨ての場所に使用されたためであろうし、この2つの住居の廃棄の時期があまり時間を隔てていないことの証左ともなる。 (伊崎)



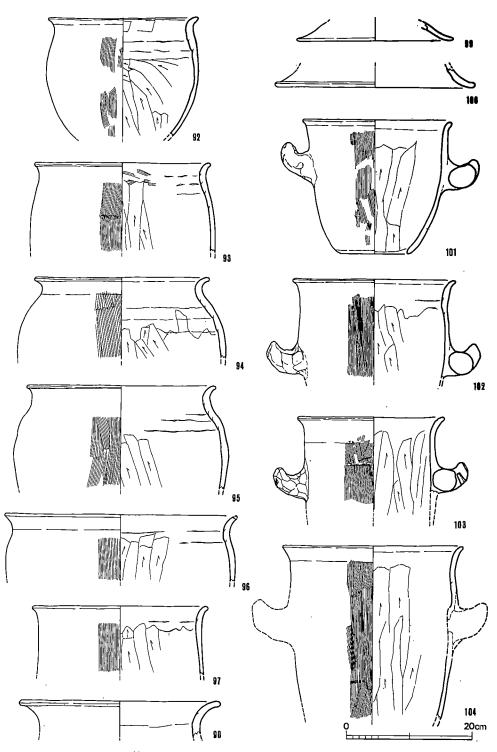
第36図 27号住居跡出土土器実測図③ (1/4)



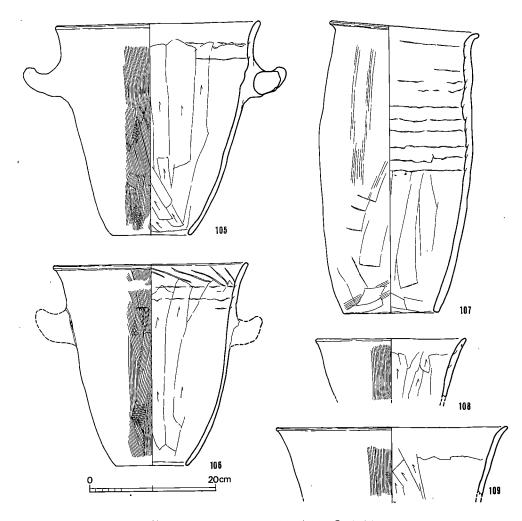
第37図 27号住居跡出土土器実測図④ (1/6)



第38図 27号住居跡出土土器実測図⑤ (1/6)



第39図 27号住居跡出土土器実測図⑥ (1/6)



第40図 27号住居跡出土土器実測図⑦ (1/6)

28号住居跡 (図版13, 第41図)

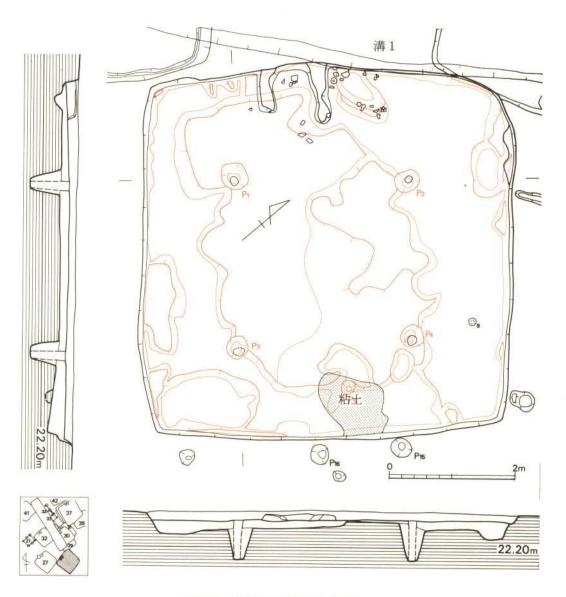
27号住居跡とほぼ主軸を同一にしてその東側にある。29号住居跡の一部を切り、溝1に切られている。壁は10cm強しか遺存していなかった。壁小溝はない。カマド対面にあまり広くない範囲で粘土があった。さらに、その粘土前面の竪穴外に2個のピットが並んで存した。床下層に中央土壙はない。

カマド (図版13, 第42図) カマド自体がやや東に偏って存する。両袖とも残存し焚口幅60

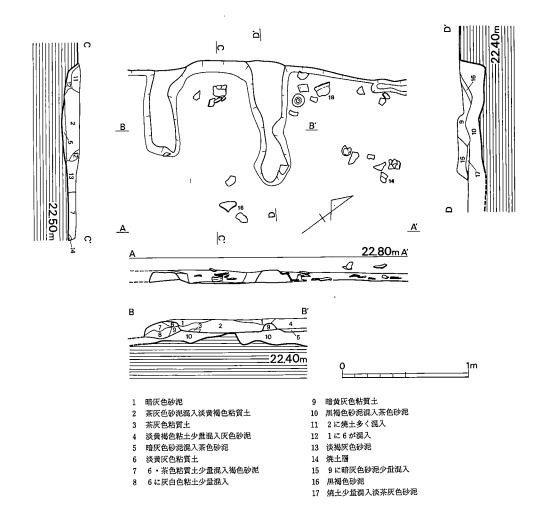
cm, 奥行85cm程を測る。火床面に残存した甕破片を支脚と考える。右袖の外側に土器片が散在 していた。なお,カマド内とその東外に土製品があった。

出土遺物 (図版76, 第43図)

埋土中には割合多くの土器が存したが、図示しうるものは少ない。土製模造鏡1点、手捏土器2点、砥石1点、スラッダ1点、不明土製品2点が埋土中にあった。床下層からも土製品が



第41図 28号住居跡実測図 (1/60)

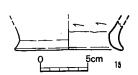


第42図 28号住居跡カマド実測図 (1/30)

出土している。

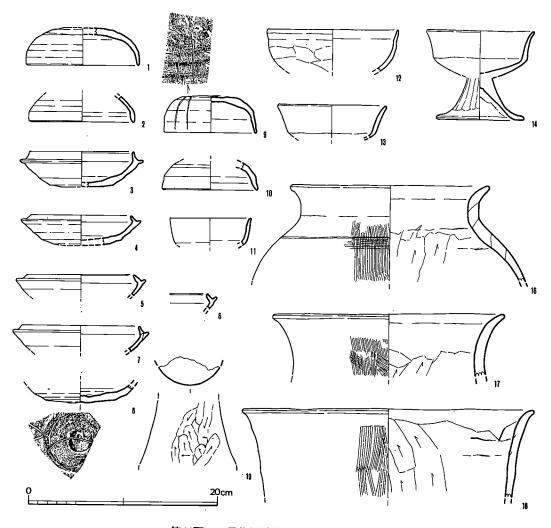
須恵器 $(1\sim11)$ 9の坩蓋は P_4 の北側床面に伏せたままの状態で出土した。 3 はカマド対面粘土中, $8\cdot10$ が床下層の出土である。他に甕片と坩片などがある。

土師器 (13~19) 14は脚部と坏部を図上で接合した。脚部はカマド右袖のすぐ横に立位で出土している。この坏部と13もカマド右側の出土である。15はカマド支脚である。16・18はカマド付近,17は床下層より出土した。19は埋土中に出土した支脚片である。



第43図 28号住居跡カマ ド支脚実測図 (1/4)

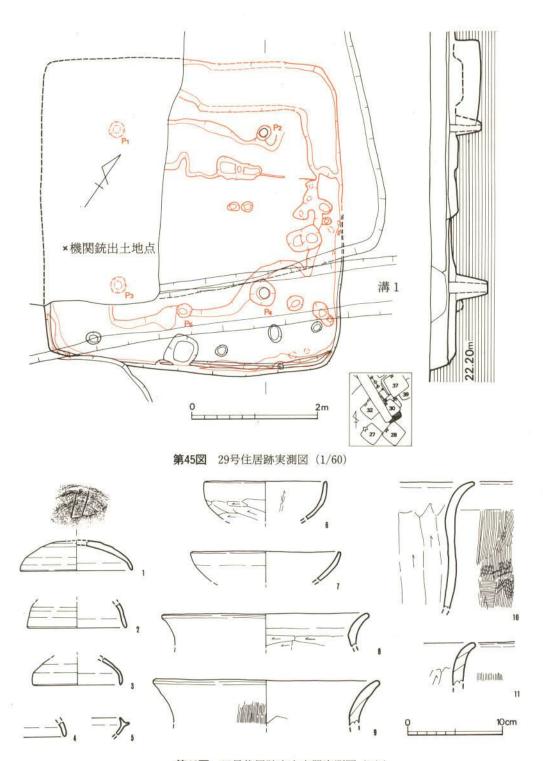
(伊崎)



第44図 28号住居跡出土土器実測図 (1/4)

29号住居跡 (図版13, 第45図)

30号住居跡に2/3以上を切られ,かつ28号住居跡にも塹濠にも切られ,さらに溝1が残った部分を横断するという悪条件ながら,下層掘込みラインから2 辺を知りうるので,おおよその規模は復原しうる。床面レベルは30号住居跡より下位にあるが,同じく下位にある31号住居跡により切られる。 P_5 の存在とその前面の土壙の存在より,カマドは北西壁に存したものとみなされる。



第46図 29号住居跡出土土器実測図 (1/4)

出土遺物 (図版76, 第46図)

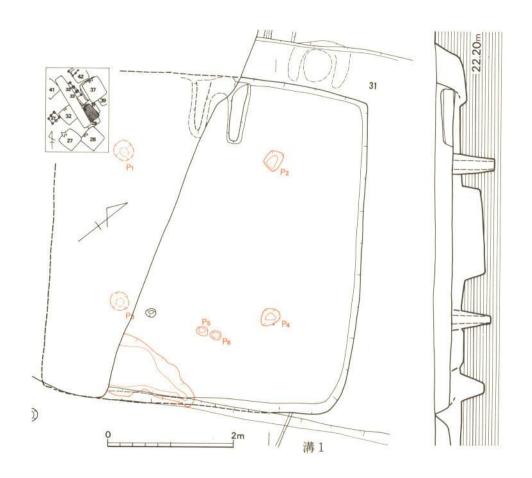
かなり他から切られていた割には遺物が存した。土製模造鏡1,砥石1,手捏土器1,不明 土製品が埋土中から出土し,もう1個の手捏土器 (29-12) は床面に正立の状態で出土した。

須恵器 $(1\sim5)$ 4・5 が床直上,1 が床下層の出土である。他に甕片その他がある。28 号・50号住居跡等出土品と同一個体とみられるものもある。

土師器 (6~11) 7・9・11は床直上の出土である。

30号住居跡 (図版13, 第47図)

約1/3程を塹濠に切られ、柱穴2個 ($P_1 \cdot P_3$) は欠失している。カマドも右袖しか残って



第47図 30号住居跡実測図 (1/60)

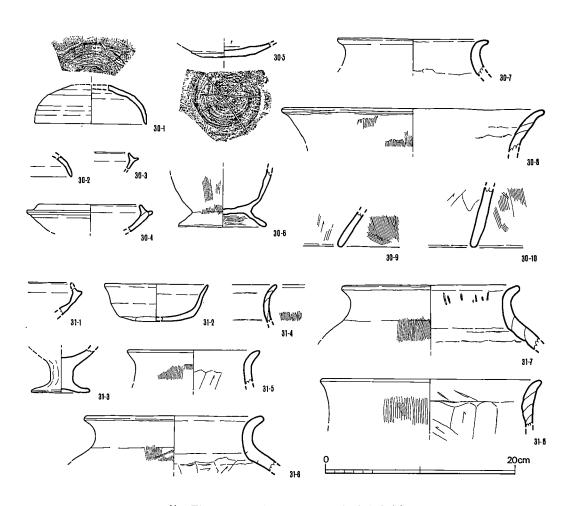
いなかった。29・31号住居跡を切っている。

カマド 右袖部分のみの残存で、焼土は多かったが詳細は不明である。

出土遺物 (図版76, 第48図)

遺物量はあまり多くない。

須恵器 $(1\sim5)$ 1 は28 $(28-1)\cdot50$ (50-3) 各号の,4 は44 $(44-1)\cdot31$ (31-1) 各号の住居跡出土品とほとんど同一の手法・胎土・色調を呈している。 $1\cdot3$ が下層,2 がカマド内,5 が床面の出土である。 (伊崎)



第48回 30·31号住居跡出土土器実測図(1/4)

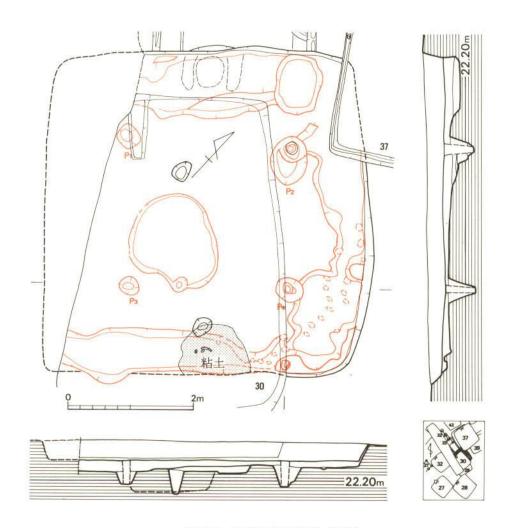
31号住居跡 (図版13, 第49図)

重複の著しい中に存する。30号住居跡に切られるけれども床面はまだその下に存する。37・38号住居跡に切られ、29・33・34号住居跡を切っている。カマド対面には粘土が存した。

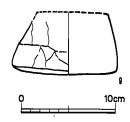
カマド (第51図) 30号住居跡に焚口付近をカットされていたが、それにもまして潰された 様相が著しかった。両袖は殆んど痕跡もなかった。支脚は円錐台形の低いもので、基部を粘土 で固めてすえおかれていた。手捏の高坏と不明土製品が周辺に存した。

出土遺物 (図版76, 第48·50図)

土器量は少ない。埋土中に土製模造鏡の破片と不明土製品が存した。



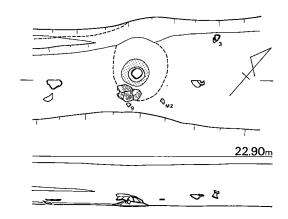
第49図 31号住居跡実測図 (1/60)

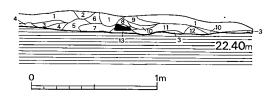


第50図 31号住居跡カマド支脚実測図 (1/4)

須恵器 (1) 立上り端 部を欠くもので,下層出土 品である。

土師器 (2~8) 3 の脚台はカマドのそばでかなり浮いて出土した。 2 は下層出土で, 6 はカマド対面の粘土中に存し, 7 は下層中央土壙内にあった。 9 の支脚は底径11cm,高さ6.4 cmの低いものである。 (伊崎)





- 1. 灰白色粘土
- 2. 褐灰色砂泥 (1と焼土が少し混入)
- 3.1+2
- 4. 茶褐色砂泥
- 5. 灰色砂泥 (焼土が少し混入)
- 6. 灰褐色砂泥

- 7. 淡褐灰色砂泥
- 8. 淡褐色砂泥に焼土が多く混入
- 9. 淡茶褐色砂泥に焼土が多く混入
- 10. 暗灰色砂泥+1 (焼土が少し混入)
- 11. 暗褐灰色砂泥に焼土が少し混入
- 12. 淡黄灰色粘土に1が少し混入
- 13. 淡茶灰色粘質土

第51図 31号住居跡カマド実測図 (1/30)

32号住居跡 (図版13, 第52図)

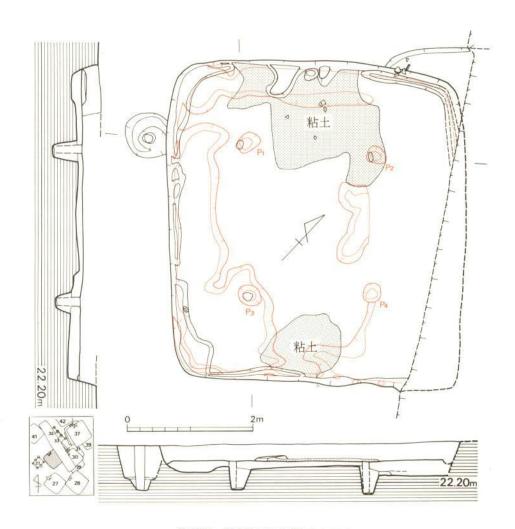
33号住居跡を切って営まれ、一部を塹濠に切られている。また、27号掘立柱建物を切っている。カマド周辺は粘土が崩れて広がっており、僅かに左袖の一部が残存するにすぎない。カマド対面にも粘土が存した。

出土遺物 (図版76, 第54図)

カマドの粘土の崩れ去った下に若干の土師器片があったのみで,他に床面に遺物はなかった。 埋土中の遺物も少ないが、図示したものは全て埋土中の出土である。埋土中と床下層とに、不明土製品があった。

 $\pmb{\eta}$ 恵器 ($1\sim7$) 6 は壺であろうか。7の甕は焼成不良。他に甕の破片が2点ある。

土師器 $(8\sim12)$ 13の甑は焼成以前の径3.3cmの穿孔があるが、かなり小型であることより特殊な用途に供したものであろうか。 (伊崎)



第52図 32号住居跡実測図 (1/60)

33号住居跡 (第53図)

塹濠に中心部を切られ、残存する部分の方が少ないが、32号住居跡の下層に現れた掘込みのラインと 2 柱穴($P_1 \cdot P_3$)とにより、もとの規模は大略復原できる。カマドは北西辺にあったものとしてよかろう。34号を切り、32号・31号の各住居跡に切られる。

出土遺物 (図版76, 第54図)

北西隅から数個まとまって出土したもののみがある。埋土中に不明土製品があった。

須恵器 (1) 底部は静止ヘラ削りで、その上にヘラ記号を施している。

土師器 (2・3) 2は中型の甕であろう。

(伊崎)

34号住居跡 (第53図)

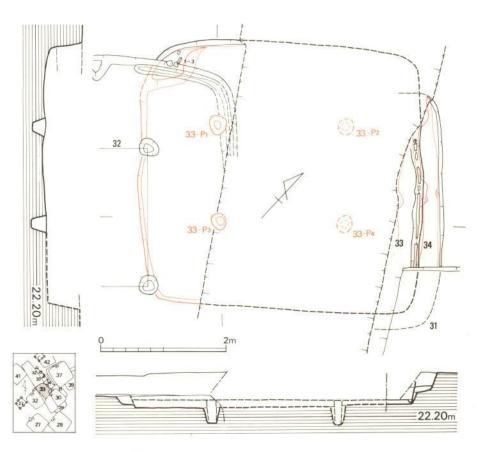
33号・31号住居跡に切られていて殆ど様相はわからない。ただ、残存部からみても規模としては33号とあまり変わらないものと考えられる。

出土遺物 (第54図)

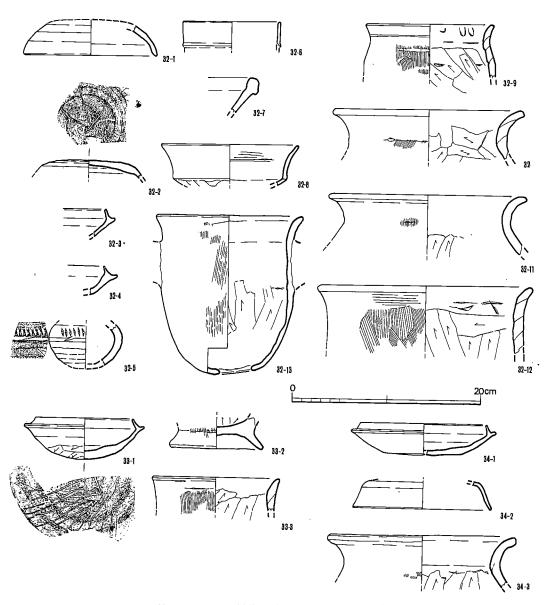
須恵器 2 点と土師器 1 点を示すが、これは或は33号に属す可能性もある。

須恵器 (1・2) 2は壺の蓋であろう。きわめて精良な土器である。

土師器 (3) 大型でもやや小ぶりの甕であろう。 (伊崎)



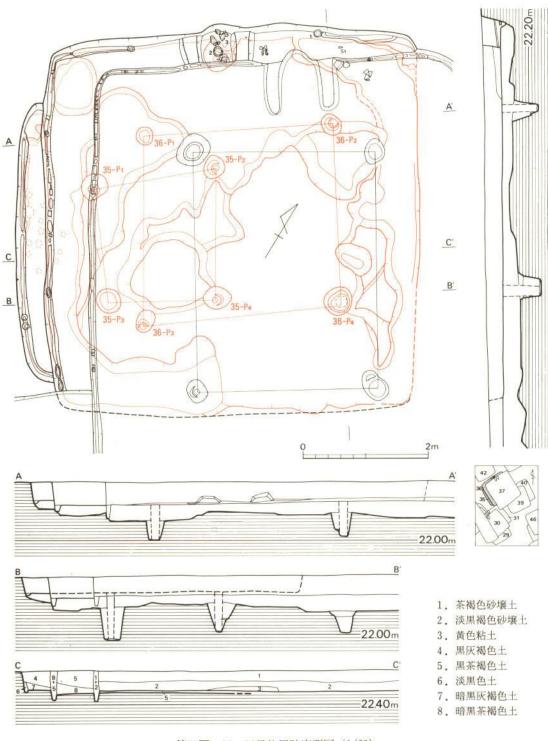
第53図 33·34号住居跡実測図 (1/60)



第54図 32~34号住居跡出土土器実測図 (1/4)

35号住居跡 (図版14, 第55図)

塹濠の東側にあり、36号住居跡に切られる。南西辺とコーナー部分のみの残存であるが、下層より検出した柱穴によりおおよその規模は復原できる。カマドは北西辺にあったものとしてよい。これより新しい36・37号住居跡に比べればかなり小さい。壁小溝は細いが深くはない。



第55図 35·36号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物は床面に土師器甕破片2 と埋土中に土師器甕片2,須恵器坏片1,スラッグ1があったものの図示しえない。 (伊崎)

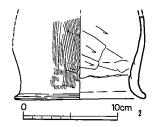
36号住居跡 (図版14, 第55図)

35号を切り、37・31号住居跡に切られている。2辺しか残存しないものの柱穴等より復原は可能である。主柱穴を結んだ形状はやや台形気味である。壁小溝は細く,所々にその中に小ピットが存する。

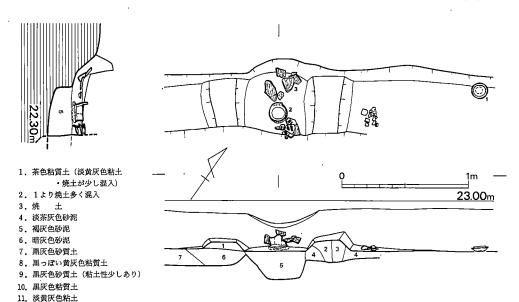
カマド (図版15, 第57図) 37号住居跡に焚口付近が切られている。火床中央には甕を転用した支脚が、口縁付近を粘土で固定して置かれたままになっていた。また、その奥には甑の破片があった。両袖の残存頂部と壁検出面とに20cm程の差があり、支脚の甕底部も欠失しているのは住居廃絶時にカットされたものと思われる。

出土遺物 (図版76,第56·60図)

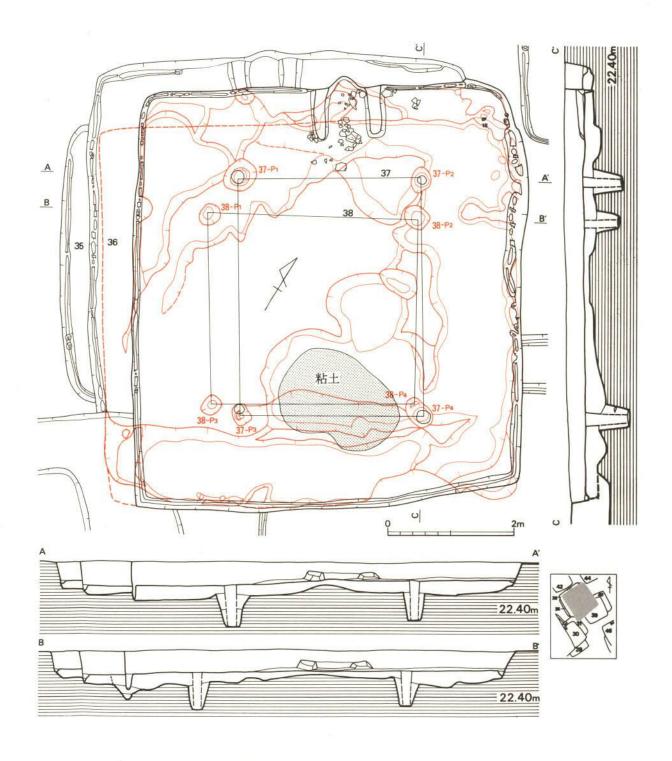
カマド内の土器の外に,カマド右袖より約1m離れて須恵器 坏身が壁際に正立で,また,それより40cm離れて扁平磨製石鏃 が鋒を東に向けて,いずれも床面に存した。磨製石鏃は時期的に 合致しないが,床面にくっついて出土している。他に埋土中に 須恵器坏片2,土師器片若干,不明土製品1があったのみであ る。



第56図 36号住居跡カマド支脚実測図 (1/4)



第57図 36号住居跡カマド実測図 (1/30)



第58図 37・38号住居跡実測図 (1/60)

須恵器 (1) 完形で、口縁端部は全周の8割程が打欠かれている。

土師器 $(2 \cdot 3)$ 2はカマド内支脚に使用された甕、3はカマド内に存した甑である。

(伊崎)

37号住居跡 (図版14, 第58図)

 $31 \cdot 35 \cdot 36 \cdot 38 \cdot 39 \cdot 40$ 号の各住居跡を切っており、この近辺で最も新しい住居である。茶 褐色の砂っぽい土で埋まっていた。縦長のプランを呈し、柱穴もそれに応じて長方形配置となる。床面はよく固められていた。壁小溝は細く深いのが、小ピットを配しながらほぼ全周している。カマド対面には壁からやや離れて黄色粘土が存した。床下層は重複が激しい為か、かなり不規則な形状を呈する。 P_3 の柱痕は径 $14\sim15$ cmであった。

カマド (図版15, 第59図) やや北に寄って設置されている。焚口幅60cm, 奥行80cmで, 内外に土器片が存したが全て破片である。

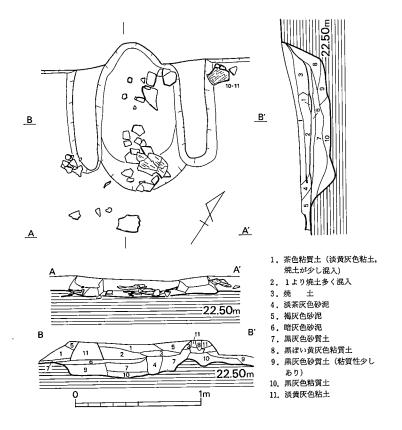
出土遺物

(図版77, 第60図)

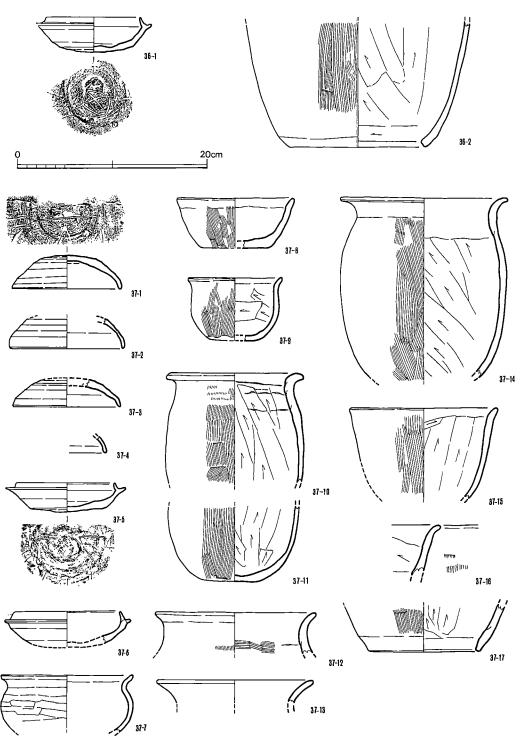
大きい分だけ埋土中には 土器片が多かったが,大量 ではない。埋土中から紡錘 車1,棒状土製品1,不明 土製品,手捏土器1が出土 し,北側コーナー付近の床 面に把手付の手捏土器が横 位で存した。また,床下層 より手捏土器1とスクレイ パー1が出土した。

須恵器 $(1 \sim 6)$ 1・3が下層,他は埋土中の出土である。5の底部はヘラ削りを施していないらしい。他に甕の破片が若干ある。

土師器 (7~16) 7は 極めて精良な土器である。 8はつくりが粗い。10・11



第59図 37号住居跡カマド実測図 (1/30)



第60図 36・37号住居跡出土土器実測図 (1/4)

はカマド右袖外側より出土した。同一個体と思われるが接合しない。12は床下層, 15は床直上の出土である。 (伊崎)

38号住居跡 (図版14, 第58図)

37号住居跡と2辺がほとんど重複している為,当初はその存在に気付かなかったが,床下層の発掘の段階で柱穴を確認した事によって初めて認知した。北東辺は37号住居跡のそれより僅かに外に存するも、南東辺はほぼ重なるとみてよい。下層に見られる段と柱穴配置から復すれば,やや横長のプランとなるらしい。37号住居跡に切られ,36号住居跡とは明確にしえなかったが,切っていると思われる。カマドも37号住居跡と同方向に存したであろう。出土遺物は一部が37号住居跡に混在した可能性もあるが,不明としか言えない。 (伊崎)

39号住居跡 (図版14, 第62図)

37号住居跡に切られ、40号住居跡を切っている。主柱穴を結んだ形状は平行四辺形気味となる。カマドは北辺にあった事が、その対面の粘土より推定される。粘土下の下層に P_5 があり、中央土壙も存した。壁小溝は残存部に全周している。

出土遺物 (図版76, 第65図)

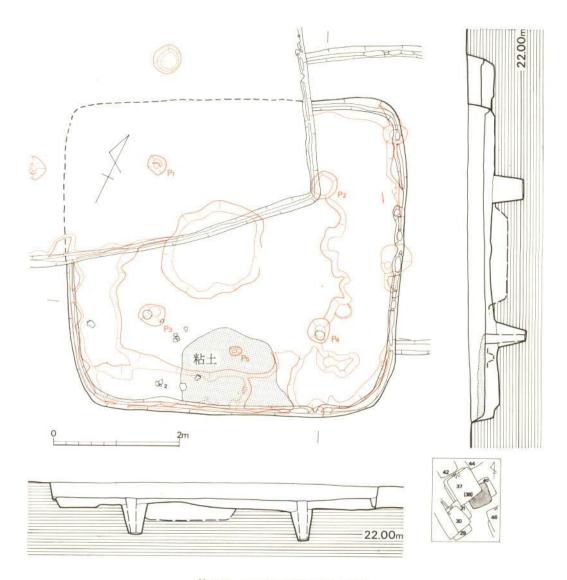
土器は床面に若干と、埋土中にも少ししかなかった。他に埋土中から土製模造鏡2,手捏土器1,不明土製品1,床下層から手捏土器1が出土した。

須恵器 (1) 床直上から出土している。他に埋土中出上の坏身があり、これは89号住居跡出土のものと接合している。

土師器 $(2\sim6)$ 6 は薄手のつくりながら口径が大きくなる。 2 はカマド対面粘土のそばの床面から出土した。 (伊崎)



第61図 37号住居跡手揑土器出土状態



第62図 39号住居跡実測図 (1/60)

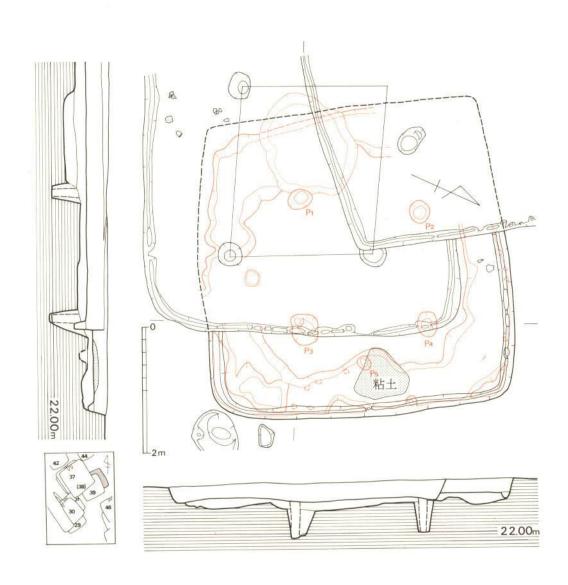
40号住居跡 (図版14, 第63図)

37・39号住居跡に切られ、約30か残存しない。これまでの住居と違い、カマド対面の粘土が北東壁に存するので、カマドは南西壁にあったとみられる。その粘土は黄灰色を呈し、こぢんまりと存した。壁小溝は残存部に全周する。

出土遺物 (第65図)

極めて少ない。須恵器は甕破片が1点あったのみである。

土師器 $(1\sim4)$ 1は精良な土器である。 4は床下層から出土した。 (伊崎)

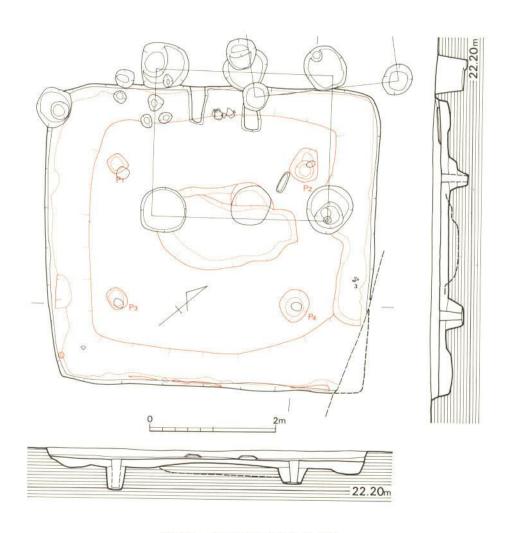


第63図 40号住居跡実測図 (1/60)

41号住居跡 (図版56, 第64図)

西側コーナーを塹濠に切られている。また、24・28・29号掘立柱建物にも切られる。他の住居跡との切合いはない。やや横長のプランを呈し、4主柱を結んだ形も横長方形を示す。壁小溝は無かった。下層の中央土壙も横長の形状を呈している。

カマド 焚口幅・奥行ともに60cmで、両袖とも残存はするが、殆ど基底部のみである。右袖の一部を29号掘立柱建物の P_4 に切られる。左袖の基部は主軸を横断する形で、幅3cmの暗褐色砂泥土が入っていた。火床面に土飾器甕破片が存した。

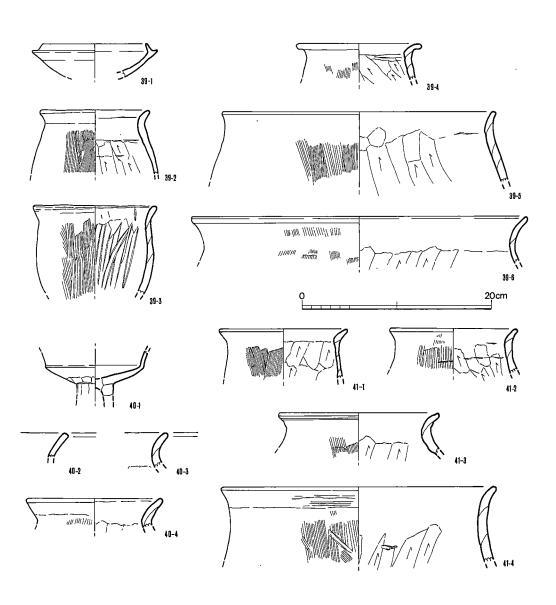


第64図 41号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (第65図)

住居自体の残存が悪いせいもあるが、遺物は極めて少ない。須恵器は皆無で、他は土師器の 破片が存するのみである。

土師器 $(1\sim4)$ 甕のみである。 2 はカマド内出土で、 3 は床面に存した。 (伊崎)

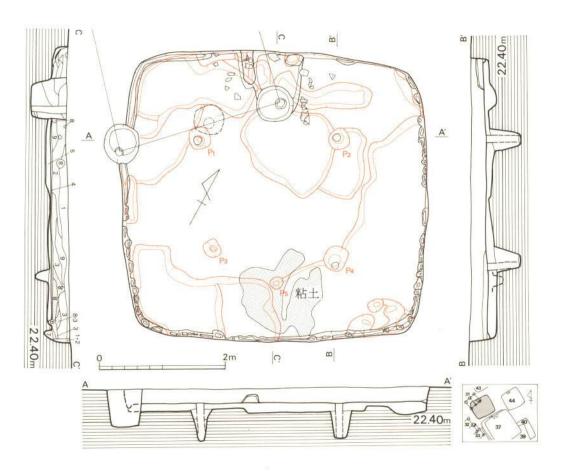


第65図 39~41号住居跡出土土器実測図 (1/4)

42号住居跡 (図版14, 第66図)

35~38号住居跡のすぐ北西にあり、他の住居跡との切合いは無いが、31号掘立柱建物のピッ トに切られる。ことにP6はカマド焚口付近を切っていた。 壁小溝は小ピットの連続といった 様相で、一部途切れながらもほぼ全周する。カマド対面に黄色粘土が、また、南側コーナー付 近で床面から5cm程の厚さに黄茶色粘土が存した。下層にはカマド対面粘土の下に P_5 がある。 また,中央土壙は北側に寄って存した。

カマド (第67図) 焚口付近が31号掘立柱建物の P。に切られ、かつ右袖も削除されている。 左袖のみの残存は22・26号住居跡のあり方とよく似ている。内部と周辺に土器片が散乱してい た。



- 1. 黑茶褐色砂壤土
- 2. 淡黑茶褐色砂壤土
- 3. 黑色土
- 4. 茶褐色粘質土
- 5. 黄褐色粘土混入茶褐色土
- 6. 黄褐色粘質土 (やや黒い)
- 7. 黑褐色土
- 8. 黄色粘土
- 9. 黑色土混入明茶褐色砂壤土

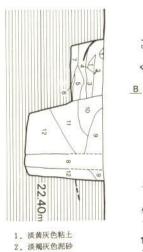
第66図 42号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (図版77,第69図)

カマド内外の土 器片以外に、床面 に遺物は無かっ た。埋土中に須恵 器甕片1と土師器 片若干、手捏土器 1が存した。須恵 器片は図示しえな

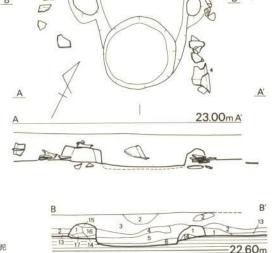
土師器(1~9)

1の精製の高坏と 7・9が埋土中で 他はカマド内外に 存した。6がカマ ド内,8は左袖上 にあった。(伊崎)



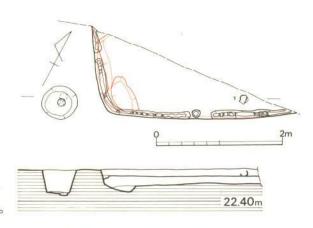
0

- 淡褐灰色泥坑
 褐色砂泥
- 4. 淡褐灰色粘質土
- 5. 燒土少量混入灰褐色砂泥
- 6. 灰 層
- 7. 炭化物少量混入黑色土
- 8. 黑色土
- 9. 黑茶灰色砂泥
- 10. 燒土·粘土少量混入褐灰色砂泥
- 11. 茶褐色砂泥
- 12. 黑茶褐色土
- 13. 淡灰褐色砂泥
- 14. 暗黄灰色砂泥
- 15. 暗灰色砂泥混入茶色粘質土
- 16. 黄灰褐色粘質土
- 17. 1 に焼土混入



43号住居跡 (第68図)

42号住居跡の北西にあるが、大半が 調査区外にかかり全貌不明である。壁 小溝が南東辺で幅30cm強にわたって途 切れ、そこに小ピットが配されている のは何かしら意味ありげに思える。南 西辺でも1ヶ所途切れるが、溝内に小 ピットを持ちつつ全周するのであろう。



第67図 42号住居跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物 (図版77, 第69図)

第68図 43号住居跡実測図 (1/60)

床面に密着して土師器が1個ゴロンと横たわって出土した。

土師器 (1) 完形に復される坩である。精良土器であるが、器表は荒れている。(伊崎)

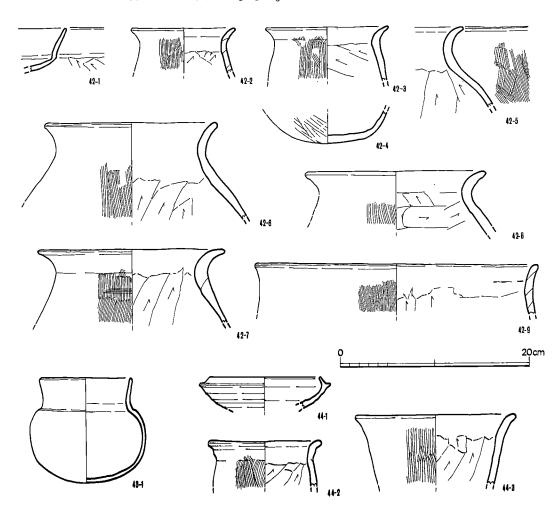
44号住居跡 (図版14, 第70図)

切合いはなく単独に存するも、37号住居跡とは南側コーナーで10cmも離れていない。埋土は 黒色〜暗褐色を呈する砂質土であった。4主柱穴を結んだ形状はやや平行四辺形気味となる。 壁小溝はカマドのある壁とその近辺は巡っていない。カマドの上面とカマド対面には黄色粘土 が大きく拡がっていた。カマド対面の粘土は、ほぼ検出面の付近から存する。

カマド (図版15, 第71図) 遺存状態は普通である。焚口部幅55cm, 奥行65cmを測り, 火床部分はやや窪む。内外に土師器の破片が存したのみである。

出土遺物 (第69図)

殆ど無かったと言ってよいくらいに少ない。

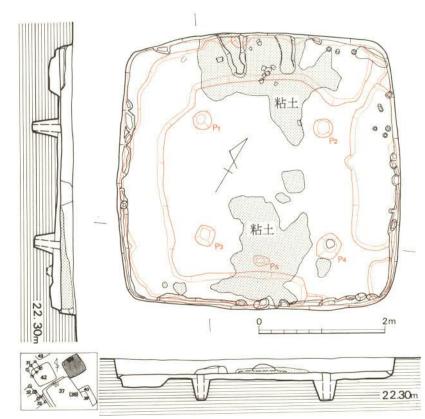


第69回 42~44号住居跡出土土器実測図 (1/4)

須恵器 (1) 埋土中に存し た。30号・100号 住居跡出土品と よく似ている。

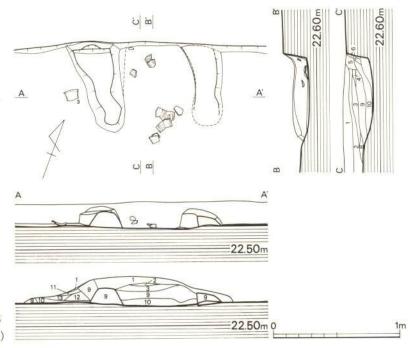
土師器 (2 •

3) 2は埋土中,3はカマド左袖の外側に存した。(伊崎)



第70図 44号住居跡実測図 (1/60)

- 1. 暗褐色砂質土
- 2. 灰少量混入暗褐色砂質土
- 3. 黑褐色砂質土
- 4. 灰・焼土少量混入黒 褐色土
- 5. 灰・焼土少量混入灰 褐色砂質土
- 6. 灰褐色砂質土少量混 入 焼土層
- 7. 黄灰褐色砂質土少量混入 灰層
- 8. 灰少量混入灰褐色土
- 9. 黄色粘土
- 10. 焼 土
- 11. 黑褐色粘質土
- 12. 暗灰褐色土混入灰層
- 13. 暗褐色土

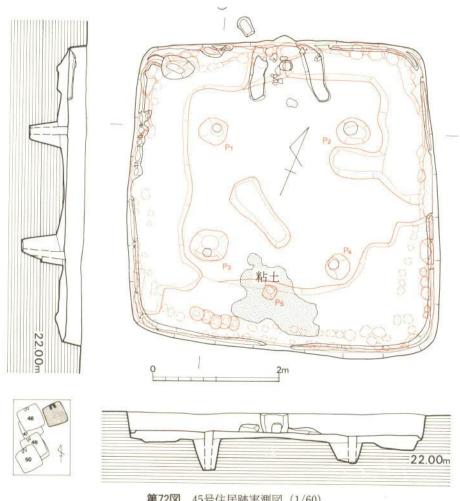


第71図 44号住居跡 カマド実測図 (1/30)

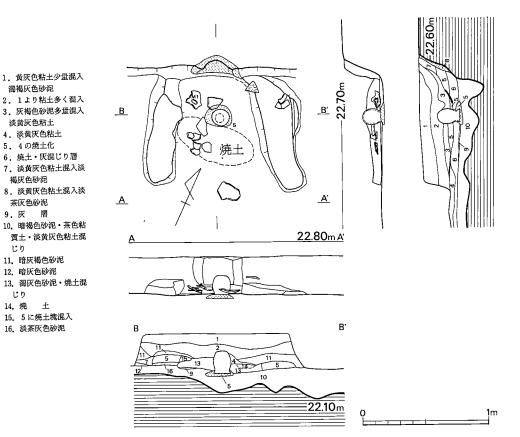
45号住居跡 (図版16·17, 第72図)

46号住居跡の東側に単独で存する。主柱穴配置は若干歪んでいて台形状となる。壁小溝は全 周するも、四辺の各中央部で途切れるという特徴がある。P.*の柱痕は径15cmであった。カマド 対面には黄灰色粘土があり、その下層に P_5 がある。下層には四壁に沿って深土10cm前後のク レーター状の窪みが連続する如く存した。

カマド (図版17, 第73図) 両袖部分は壁高に比して残りが悪いが、甕を転用した支脚はも との状態で完形ですえ置かれたまま存した。支脚を置く箇所を若干掘りしぼめ、粘土を入れ込 んだ甕をそこに逆さに置いて、口緑周辺に粘土を巻き付けて固定している。焚口幅80cm、奥行 85cmを測る。煙出し部分がややとび出す形状を示すが、そこは黄灰色粘土混じりの土を塗りこ



第72図 45号住居跡実測図 (1/60)



第73図 45号住居跡カマド実測図 (1/30)

めていた。カマド内部左袖寄りに火床面より3cm程浮いて土製模 造鏡が出土した。他には土師器甕の破片が内部に、須恵器甕の破 片が右袖上面に,周辺に不明土製品1があった。

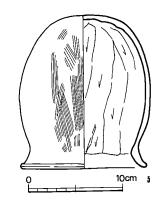
(図版77, 第74, 75図) 出土遺物

t: n

遺物は極めて少ない。床面にも埋土中にも少ししかなかった。 カマド内より土製模造鏡1,周辺から不明土製品が出土した。

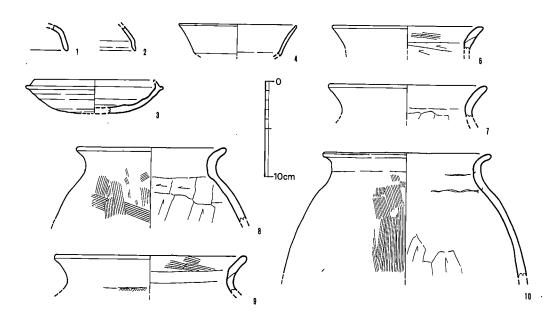
須恵器 $(1 \sim 3)$ 1・2 は床面に存した。3 は口緑端部が打欠か れている。他に高坏があり、これは47・48号住居跡出土品と接合 した。また、坏蓋が90号住居跡のものと接合している。

土師器 $(4\sim10)$ 4の高坏, $7\cdot9$ の甕は床面,7はカマド周辺 の出土である。5の支脚としていた甕は器高16.2cm。



第74図 45号住居跡カマド支 脚実測図 (1/4)

この住居では、廃絶時にかなり徹底した片付けがなされたものと考えられる。 (伊崎)



第75図 45号住居跡出土土器実測図 (1/4)

46号住居跡 (図版16, 第77図)

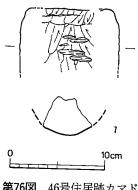
47号住居跡を切り、溝1にカマドの上面を切られる。床面の貼床はしっかりしていたが、47号住居跡との重複部分はやや窪んでいた。 P_2 が重複しているのは建て直しがあったのかもしれないが確認しえなかった。 P_3 上面より土師器埦が出土している。

カマド 溝1に切られ、両袖基底部のごく僅かしか残存しない。焚口付近に須恵器横瓶の破片と土製支脚破片が存した。

出土遺物 (図版77, 第76·79図)

埋土中の土器は少なく,カマド周辺と床下層に主に遺物が存した。カマド左側の床面から手捏土器1,下層から手捏土器破片が出土している。また,床面から桃かと思われる種子が出土した(図版114)。

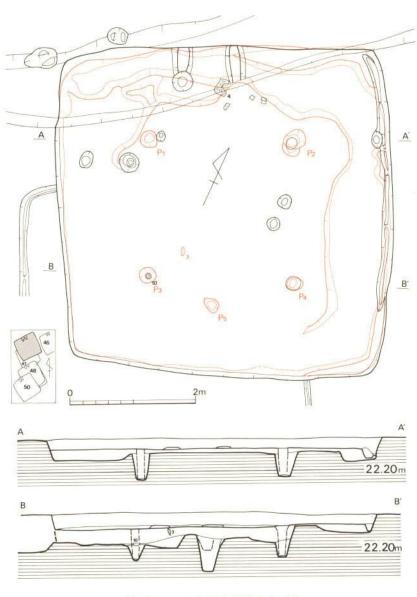
須恵器($1\sim4$) $1\cdot2$ は床面近くから,3 は P_3 の近くの床下層から出土した。3 は完形品である。4 はカマド焚口付近出土で,焼成がややあまい。内面は同心円の当具痕があるが,その同心円の弧線に直交した刻みを持つ当具も用いられている。胴部短径は



第76図 46号住居跡カマド支脚実測図 (1/4)

27.1cmである。また、壷破片もあり、 $28 \cdot 29 \cdot 86 \cdot 87$ 号の各住居 跡出土品と同一個体と思われる。

土師器 $(5\sim7)$ 5 は床下層、6 は床面近くからの出土である。7 はカマド内に残存していた支脚の小破片である。頂部径 9 cm。二次火熱を受けている。 (伊崎)



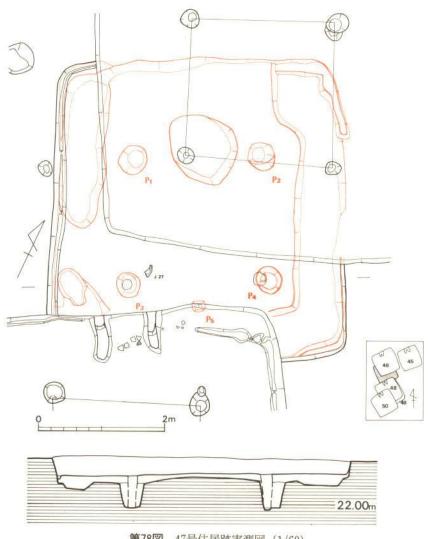
第77図 46号住居跡実測図 (1/60)

47号住居跡 (図版16, 第78図)

46・48住居跡に切られ½程しか残っていなかったが、46号住居跡の下層に、この住居の下層 が現れたので規模の復原は可能である。カマドは北西辺にあったとして間違いない。下層の中 央土壙は $P_1 \cdot P_2$ 間に存した。 P_5 も下層にて確認できた。

出土遺物 (第79図)

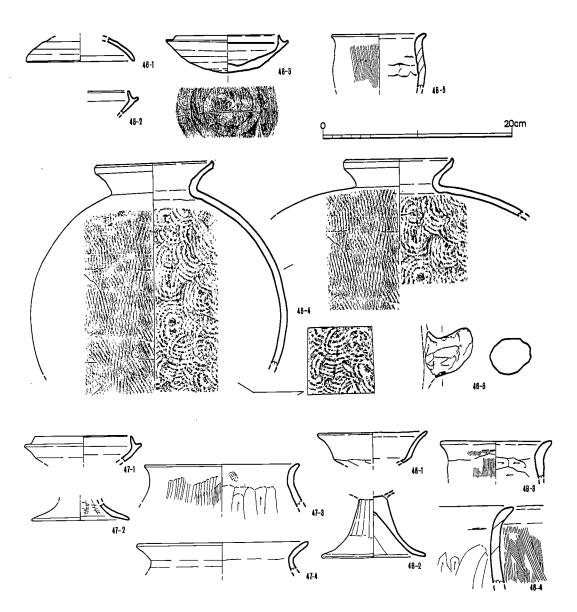
住居自体の残存部が狭小である事もあって遺物は少ない。 P_3 付近の床下層から出土した須 恵器高坏片は45・48号住居跡床面出土品と接合した。



第78図 47号住居跡実測図 (1/60)

須恵器(1) 埋土中の出土である。口縁端部を一部打欠いている。他に甕の破片が2点あった。

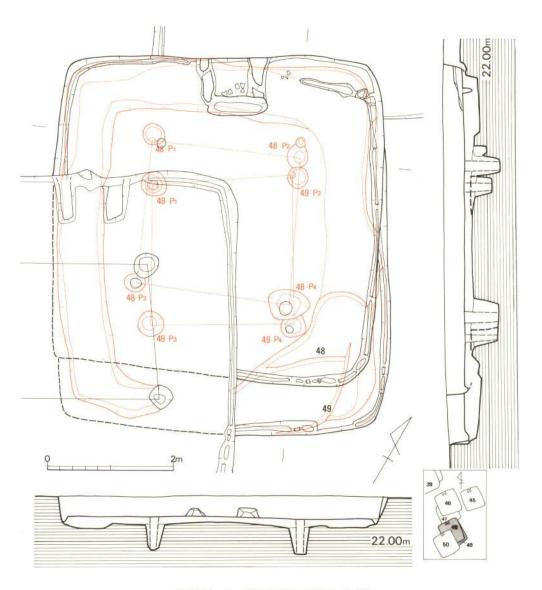
土師器 $(2 \sim 4)$ 2 は床下層から、 $3 \cdot 4$ は埋土中から出土した。 4 はかなり細身のつくりである。 (伊崎)



第79図 46~48号住居跡出土土器実測図 (1/4)

48号住居跡 (図版16, 第80図)

47・49号住居跡を切り、50号住居跡に切られている。当初は49号住居跡との切合いが摑めず 南西辺は49号住居跡のものをそれとしていたが、床面に至って重複のある事に気付いた。よっ て出土遺物は混入した格好となるが、49号住居跡の残存部分が狭小なので、図示したものは48 号住居跡のものとして大過ないと思われる。床面はかなり踏み固められていた。壁小溝は残存 部に殆ど巡っている。



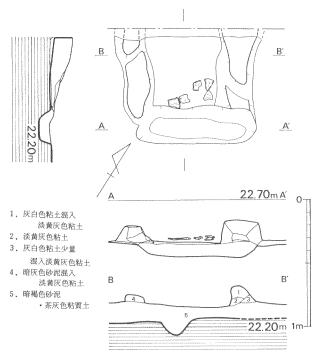
第80図 48·49号住居跡実測図 (1/60)

カマド(第81図) 両袖とも残存 はするが残りは良くない。焚口付 近に横長のピットが掘り込まれて いる。火床面に土師器片が少し遺 存していた。

出土遺物 (第79図)

前述のような取上げであったが、遺物量自体極めて少ない。須恵器は45・47号住居跡出土品と接合した高坏片1点が床面に存したのみである。

土師器(1~4) 4点ともに埋土中出土である。3の小型甕の内面は煤で真黒になっている。カマド支脚に使用されていたものかもしれない。 (伊崎)



第81図 48号住居跡カマド実測図 (1/30)

49号住居跡 (図版16, 第80図)

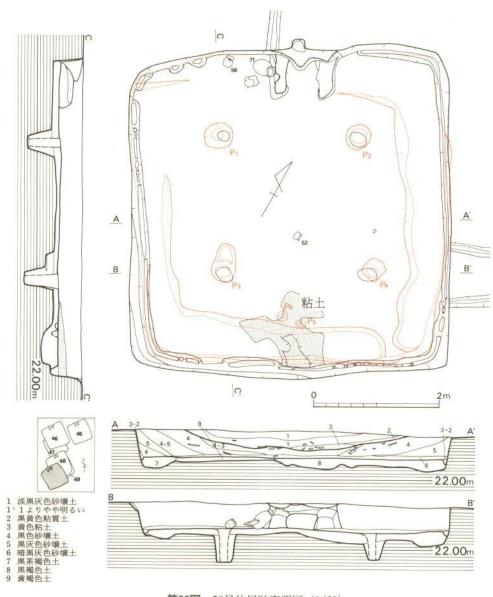
48号住居跡の項で述べたような事情であった。北東辺は48号住居跡のカマドの真下あたりにあったと想定でき、かなり縦長のプランであったと思われる。この事は、 P_4 と北東壁・南東壁までの各距離の差からも伺い知れるところである。床面のレベルは48号住居跡と殆どかわらなかった。壁小溝は本来は全周していたものと考えられる。 (伊崎)



第82図 45号住居跡カマド

50号住居跡 (図版16·18·19, 第83図)

48・49号住居跡を切って営まれている。この住居は立野遺跡の中では最も残りのよかったものである。この住居を廃棄した後、まず黒灰色土が壁際に斜めに流入し、次に黒色砂壌土が堆積するのと併行して遺物の投棄がなされ始めている。そして、更に黄色粘土が投棄された時には、すり鉢状の窪みになっていた。その後も黒灰色砂壌土の堆積と併行して多くの遺物が投棄

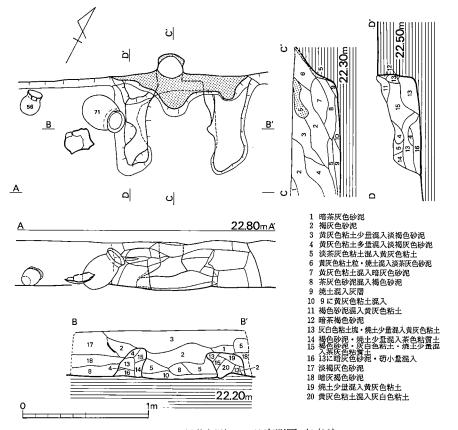


第83図 50号住居跡実測図 (1/60)

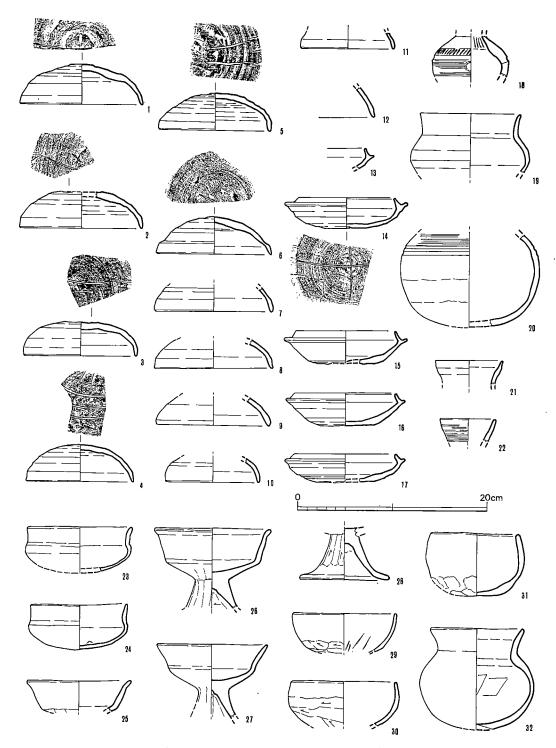
されている。つまるところ,かなりの量の土器等が投棄されて出土した。床面はしっかり固められており,床面上に $2 \sim 3$ cmの厚さで黒灰色土が帯状に認められるのは,本来何か敷いてあったものが腐蝕した痕跡なのかもしれない。カマド対面には黄色粘土が壁側から内側へ傾斜をもって床面にくっついて存した。壁小溝はほぼ全周する。下層に中央土壙はなく,カマド対面粘土下には 2 つのピットがみられた。

カマド (図版19, 第84図) 立野遺跡の中では最も残りが良かった。焚口幅47cm, 奥行67cm程で天井部の一部が崩れかかりながらも遺存していた。黄灰色粘質土を基調とした粘土でつくられている。煙出しは奥壁が火床面から15cmばかり急傾斜で立上った後,外側へ屈折してのびてゆく。上面で確認した煙出し部の孔径は15~20cmであった。

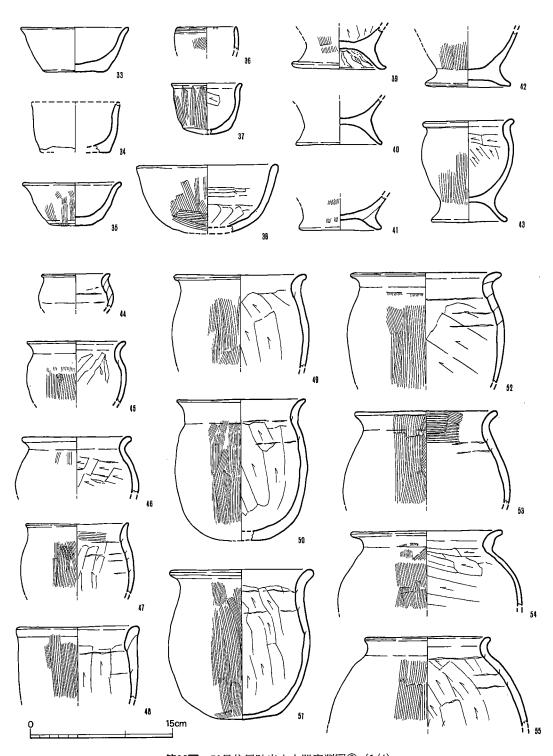
左袖に寄りかかって完形の甕1,そのやや手前に甕底部破片,その左側に脚台を手前に向けて横倒しになった完形の脚台付甕,更にその左に中型の甕が横位にて出土した。孰れも土師器である。但し,脚台の付いた甕は検出後の写真・実測以前に何者かに持ち去られてしまった。また,左袖の斜め南前方の床面上に作業台に使用したと思われる石があった。他にカマド付近にて鉢・脚台・手捏土器各1点が出土している。



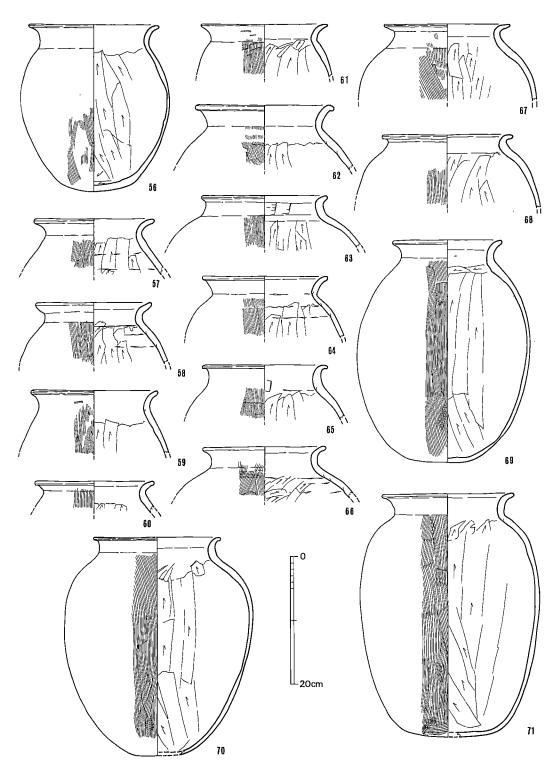
第84図 50号住居跡カマド実測図(1/30)



第85図 50号住居跡出土土器実測図① (1/4)



第86図 50号住居跡出土土器実測図②(1/4)



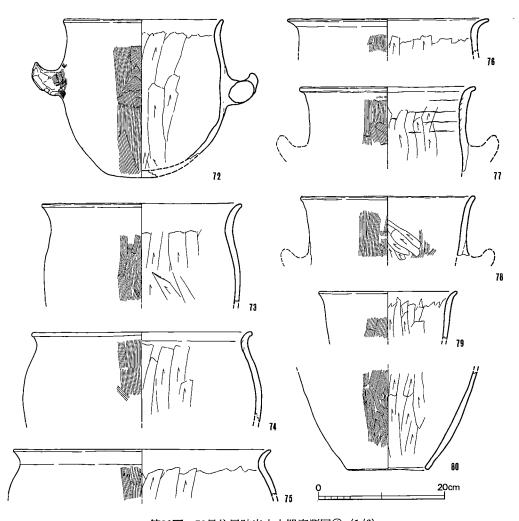
第87回 50号住居跡出土土器実測図③ (1/6)

出土遺物 (図版78~80, 第85~88図)

上記のカマド周辺を除いて床面に存したのは、土師器坩(32)・甕(52)と手捏土器(85)のみで、他は多量の遺物が埋土中から出土した。通常の土器以外には、鉄器(鎌1・手鎌1・鏃1)、砥石1、手捏土器6、把手状と不明の土製品各1、桃の実らしき種子があった。

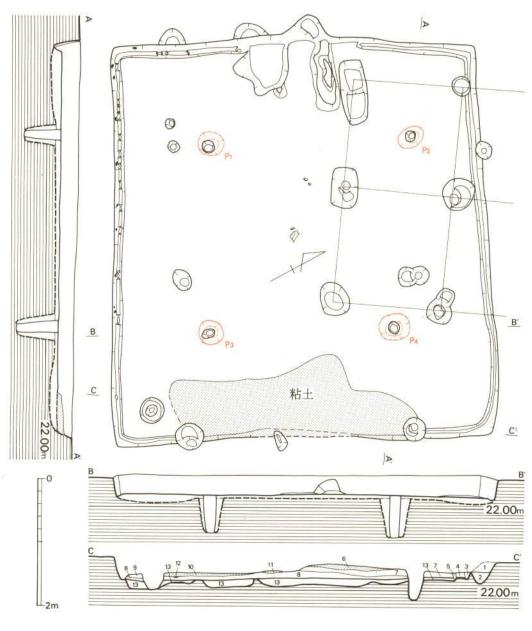
須恵器 $(1\sim22)$ 全て埋土中の出土である。 $3\cdot 4\cdot 8$ は胎土・焼成・ヘラ記号ともによく似たもので、 $79\cdot 30\cdot 28$ 号の各住居跡からも同様のものが出土している。また、坏蓋・坏身・壺・壺脚で他の住居跡出土品と接合、もしくは同一個体と認められるものがある。

土師器 (23~80) 23~32は精製品である。43は脚台の付く小型甕で完形に近い。32·52が床面,71·56がカマド左,38·40がカマド周辺の出土で他は全て埋土中に存した。また,甕2点が27号住居跡出土品と接合した。 (伊崎)



第88図 50号住居跡出土土器実測図④ (1/6)

51号住居跡 (図版20, 第89図)

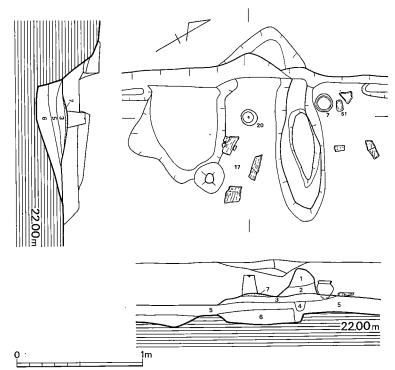


1. 暗黑灰褐色土

- 2. 暗茶褐色土混入黑褐色土
- 4. 暗茶褐色粘質土
- 5. 3に灰色土少量混入
- 3. 黑茶褐色土 6. 黑褐色土少量混入茶褐色粘質土

- 7. 3 に黒褐色土混入 8. 4 と黒褐色土泥じり 9. 黒褐色土 10. 灰褐色土少量混入茶褐色粘質土11. 黒褐色土少量混入黄褐色粘土 12. 暗黒褐色土 13. 8 に黄色粘土混じり

第89図 51号住居跡実測図 (1/60)

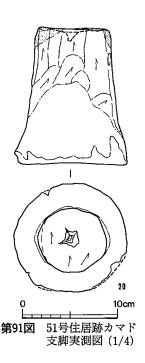


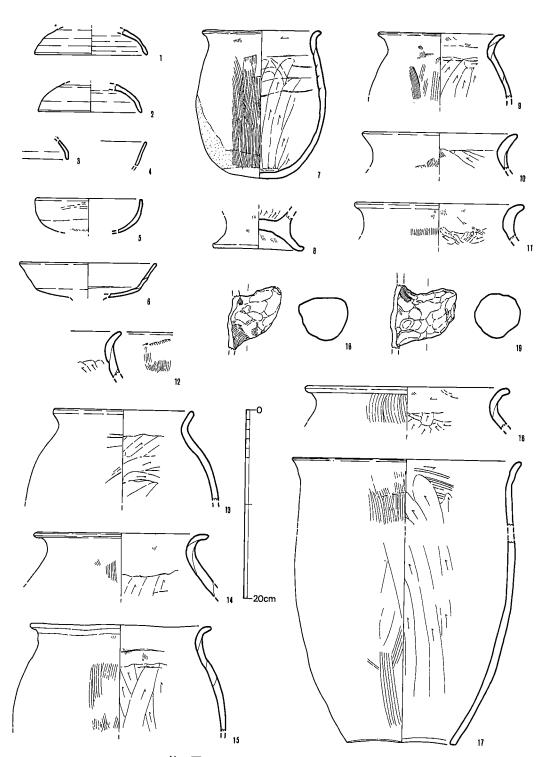
第90図 51号住居跡カマド実測図 (1/30)

- 1. 灰褐色土少瓜混入黄褐色粘土
- 2. 焼土混入暗茶褐色粘質土
- 3. 茶褐色土混入黒褐色土
- 4. 焼土混入黒褐色土
- 5. 灰褐色土混入茶褐色粘質土
- 6. 暗茶褐色粘質土・黒褐色土混じり
- 7. 黄褐色粘土 (焼土化)

21号住居跡より東7mに位置し、52号住居跡を切り34号掘立柱建物に切られている大型の住居跡である。平面形態は南東部隅が僅かに張り出し気味となるが、略隅円方形を呈している。主柱穴の配置も一般的である。壁小溝はカマド部・カマド対面を除き巡っており、溝内に小穴がやや規則的に確認された。壁面にも小穴と略同じ位置に杭状痕が認められた。カマド対面粘土は南東壁に沿って幅広く散布している。床面は主柱間エリアが著しく硬化していた。床面上より出土した遺物は僅かであった。床下層は明瞭な掘り込みではなく、やや凹凸をなし主柱穴周辺から壁際に向って緩やかに下っている。 $P_3 \sim P_4$ 間の略中央に P_5 が存した。

カマド (図版20, 第90図) 北西壁略中央に付設されている。左袖の大半を後世の柱穴で壊されていたが、支脚は円柱状土製品が粘土で固定された状態で出土した。左袖外床面上より支脚として使用されたであろう甕と叩石が出土した。





第92図 51号住居跡出土土器実測図 (1/4)

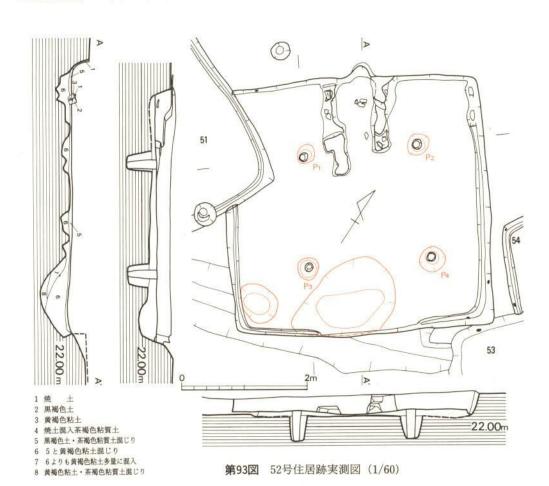
出土遺物 (図版81, 第91·92図)

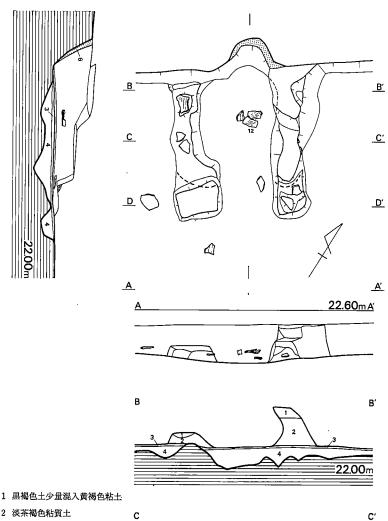
総出土量は少ない部類に属し、大半以上が埋土中より出土したものである。手捏土器 2 点とも埋土中より,不明土製品がカマド内及び埋土中より出土した。鉄器も埋土中よりの出土である。

須恵器 $(1 \sim 4)$ 坏蓋の 3 は床面より、 1 は床面下層より、 2 と高坏の 4 は埋土中より出土した。

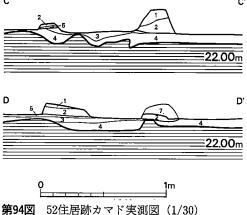
土師器 $(5\sim19)$ 甕は中 \sim 大型が殆どで, $7\cdot9$ と15がカマド周辺より出土したが他は埋土中より出土した。甑の17は同一個体になると思われるが,口縁部周辺がカマド周辺部より,下方がカマド内より出土した。高坏と思われる6がカマド右袖内より出土したのは注目される。精良な境5は埋土中より,台付甕と考えれる8は床面下層より出土した。 (武田)

52号住居跡 (図版21, 第93図)



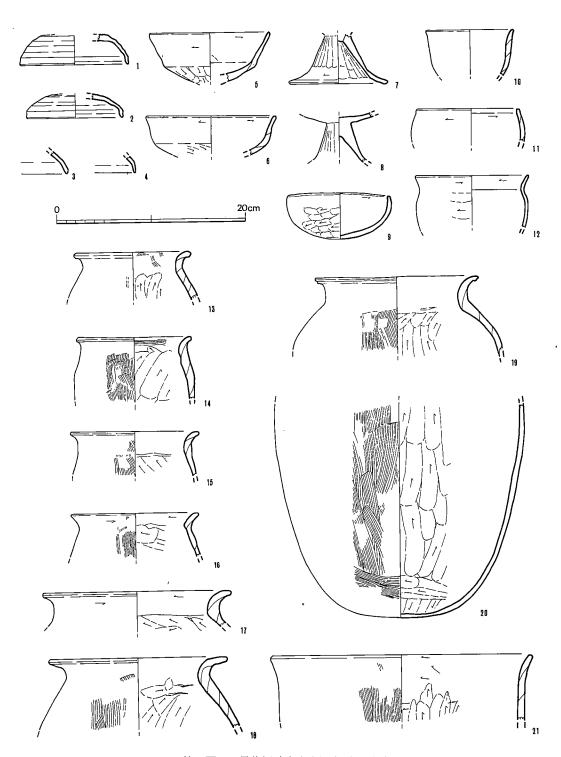


- 1 黒褐色土少量混入黄褐色粘土
- 3 黄褐色粘土・灰褐色土混じり
- 4 黒褐色土・茶褐色粘質土混じり
- 5 黒褐色上・黄褐色粘土混じり
- 6 黄褐色粘土(焼土化)
- 7 淡黄褐色粘質土



51号住居跡に切ら れ,53号住居跡にも 僅かに切られる。平 面形態は一般的でや や小型の規模であ り, 主柱穴配置は北 東辺寄りである。壁 小溝はカマド付設辺 とカマド対面を除き 2条存す。床面の硬 化は普通で,床面下 層はやや凹凸が見受 けられた。南西壁際 にやや深い土壙を検 出したが, 所謂中央 土壙と同じ性格と推 測される。カマド対 面に粘土は認められ なかった。

カマド(図版21, 第 北西壁中央 に付設されている。 やや広範囲に潰され た様相を呈して, 粘 土及び焼土が散布し ていた。火床面は 54×90cm程と推定さ れるが, 支脚は存し なかった。煙道部は 火床面より粘土を貼 り付けて造られてい た事が窺われる。な お,カマド内及び周



第95図 52号住居跡出土土器実測図(1/4)

辺部より出土した遺物は、一部を除き壁体内に埋め込まれていた可能性を有する。

出土遺物 (図版81, 第95図)

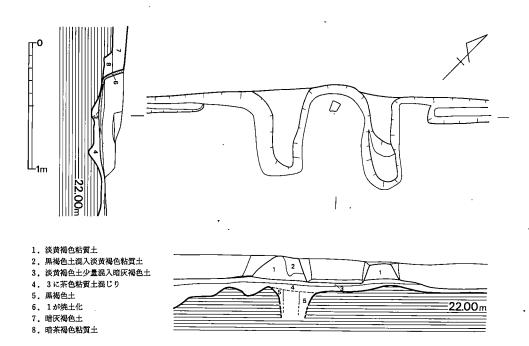
総出土量は少ないが、坏や埦類の占める比率は他の住居跡より高い。有孔不明土製品が埋土中より出土した。

須恵器 $(1 \sim 4)$ 蓋類のみで全て埋土中より出土したものである。

土師器 $(5\sim21)$ 5 \sim 12は精良品である。 $6\cdot8\cdot10$ と12は磨滅が著しい。9は略完形品で南東部壁際の床面上より,12はカマド内より出土したが他は埋土中である。 $13\sim20$ の甕は,19が床面上で,16が床面下層より出土したが他は埋土中より出土した。21の甑も埋土中より出土した。

53号住居跡 (図版22, 第97図)

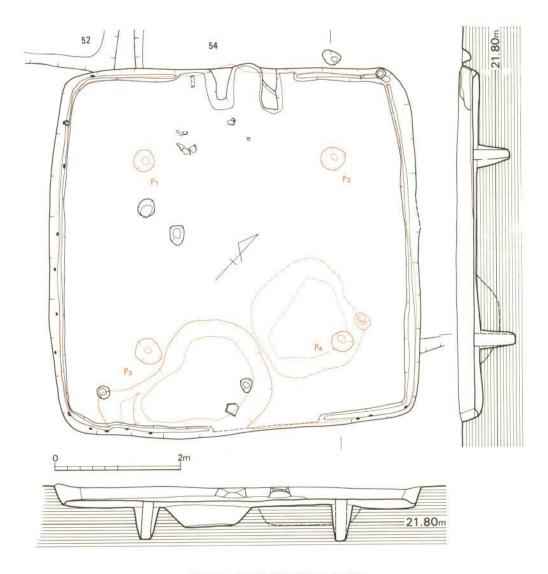
52・54・55号住居跡を切り、56号住居跡と隣接したやや大型の住居跡である。平面形態及び主柱穴の配置は略正方形で整然としている。壁小溝はカマド部とその対面を除いて巡っている。壁面はやや緩やかな勾配の立ち上りで、壁面に十数本の杭状痕が認められた。床面は主柱間エ



第96図 53号住居跡カマド実測図 (1/30)

リアが特に硬化していた。床面下層は起伏の乏しい掘り込みが存し南壁付近にやや深い2基の 土壙を検出した。他の住居跡より類推するならば東側の土壙は54号住居跡に伴うであろう。カ マド対面粘土は存しない。

カマド(図版22, 第96図) 北西壁略中央に付設されていたが残存状態はあまり良くない。火 床面は $46 \times 75 \text{cm}$ を計測したが両袖共に若干伸びると思われる。支脚は存せずカマド内外より出 土遺物も少なかった。



第97図 53号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (図版81, 第100図)

総出土量は少ない方である。手捏土器と鉄器が埋土中より出土し、略完形の有溝円板が埋土中と床面より2個出土した。不明土製品も若干出土している。

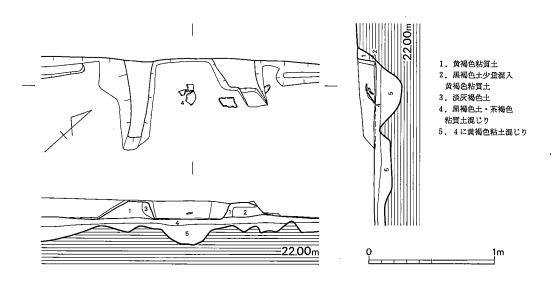
須恵器 $(1\sim10)$ $1\sim9$ は埋土中より出土したが大半が小破片である。10は壺の蓋と考えられ,カマド周辺より出土した略完形品である。出自が明確な10が当住居跡の時期を示すであろう。

土師器 (11~20) 精良な高坏11は埋土中より出土した。甕類では15と18がカマド内より,19が床面上より,14が床面下層より出土した。超小型の12も他と同じく埋土中より出土したものである。甑の19は床面上より,把手の20は埋土中より出土した。 (武田)

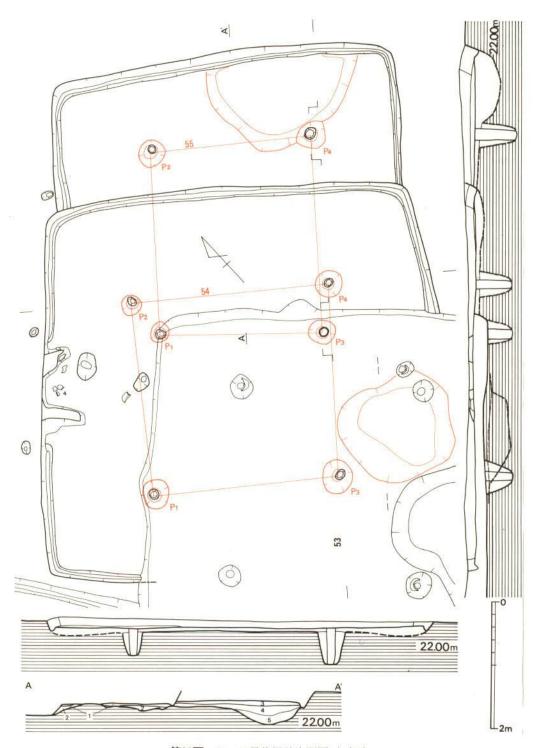
54号住居跡 (図版22, 第99図)

55号住居跡を切り、53号住居跡に約半分程切られた住居跡である。53号住居跡下層より2本の主柱穴を検出し、主柱穴は略正方形に配置されている。壁小溝は他と同様になると推測される。床面は残存部分でやや硬化していた。53号住居跡下層で検出された東側の土壙が当住居に伴なう遺構と考えられる。

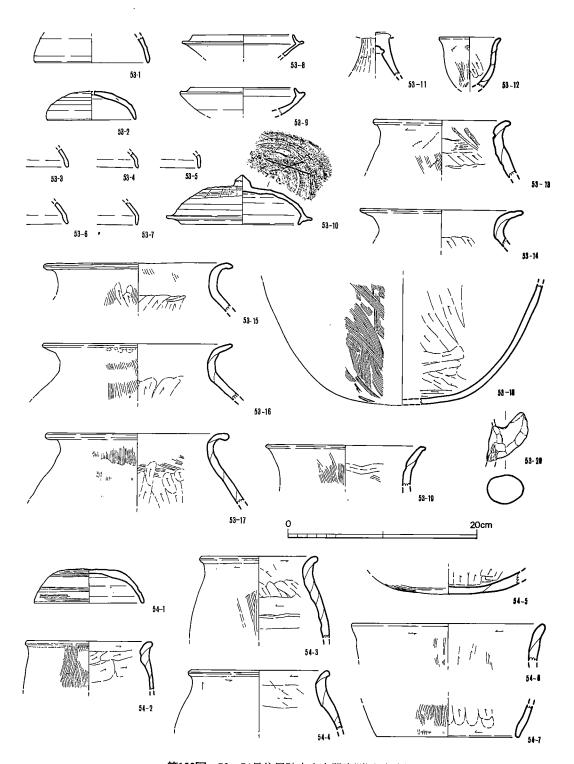
カマド(第98図) 北西壁中央に付設されていたが大半が壊れた状態であった。カマド内からは甕のみが出土し、支脚は存しなかった。竪穴部外で壁際に P_{11} と P_{12} を検出したが当住居跡に伴う可能性を有する。これについては後の項で検討される。



第98図 54号住居跡カマド実測図 (1/30)



第99図 54·55号住居跡実測図 (1/60)



第100図 53·54号住居跡出土土器実測図 (1/4)

出土遺物 (図版81, 第100図)

総出土量は少ない。不明土製品も僅かに出土したのみである。

須恵器(1) 蓋の1のみで床面下層より出土したものである。

土師器 $(2\sim7)$ 甕類が殆どで4がカマド内より出土した以外は埋土中よりの出土品である。 同一個体と考えられる甑の6と7も埋土中よりの出土である。 (武田)

55号住居跡 (図版22, 第99図)

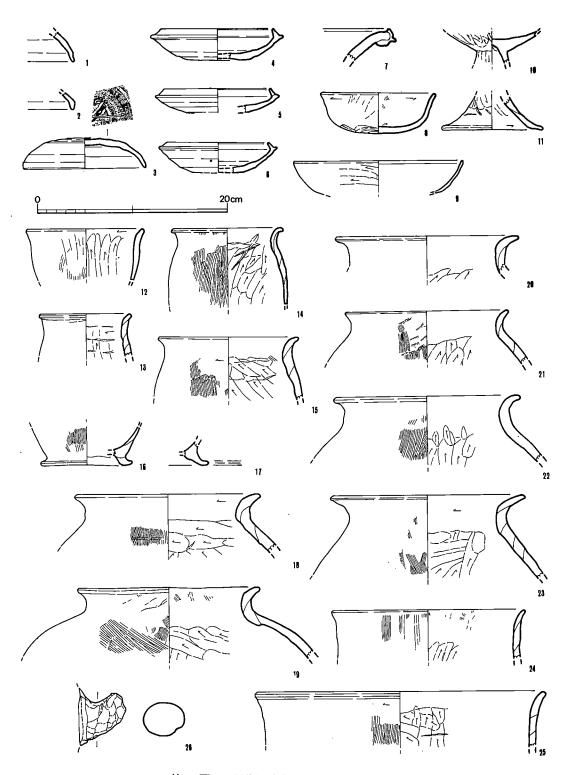
54号住居跡にカマド部も含め大半以上切られている。主柱穴は略正方形を呈し、やや大型規模の住居跡と推定される。壁小溝も残存部分から他と同様になると思われる。床面は主柱間エリアが特に硬化していた。床面下層はやや不明瞭な掘り込みが施されていたし、南東部隅付近に深い土壙が検出された。 $52\sim55$ 号住居跡の床面下層より壁際で検出した土壙は、一般的な中央土壙と大差なく、位置が相違するけれども同じ性格と考えられる。北西壁際に僅かな焼土が認められたので、カマドは北西辺略中央付近に付設されていたのであろう。この付近の竪穴部外に P_{12} が存したが、これは54号住居跡と同じ性格の柱穴と考えられる。

出土遺物 (図版81, 第101図)

大半以上喪失していることを考え合せれば出土量は多い部類に属する。不明土製品が僅かに 出土した。

須恵器 $(1\sim7)$ 殆どが小片であり、 $2\cdot4$ と5が床面下層より出土した以外は埋土中よりの出土品である。

土師器(8~26) 8~11は精良な坏・高坏と埦である。16と17は台付甕であろうか。12・13・15と17が床面下層より出土したが、他は全て埋土中の出土であった。 (武田)



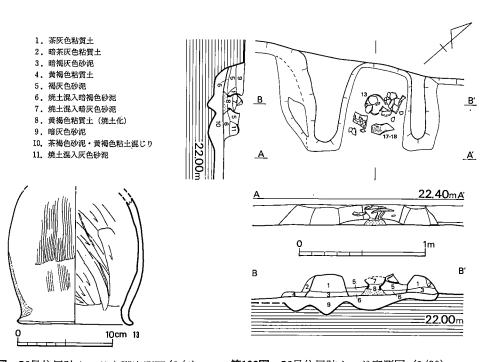
第101図 55号住居跡出土土器実測図 (1/4)

56号住居跡 (図版23, 第104図)

53号住居跡とは切り合いはなく、57号住居跡を僅かではあるが切っている。平面形態・規模はごく一般的であるが、主柱穴の配置は真正方形を呈する。壁小溝はカマド部とその対面及び南東部隅付近を除き小穴を多く有して存する。床面は主柱間エリアとカマド対面遺構の周辺部が硬化していた。竪穴部外には主柱穴の略延長上に柱穴を5個検出したが、当住居跡に伴うか否かは不明である。伴う可能性を有するので後の項で検討してみる。

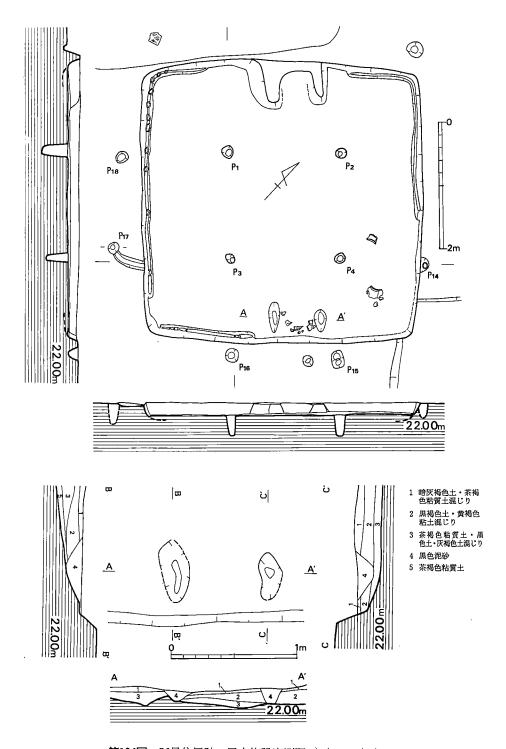
カマド対面遺構(図版23,第104図) カマドの対面には全く粘土は認められなかったが、平面形態長方形を呈する浅い窪みを2個検出した。心心間72cmを計測し、壁際に面した方が緩やかな傾斜の立ち上りをなす。埋土はボソッとした感じの黒色土であり、周辺部は著しく硬化した床面で差異は歴然としていた。形状及び状況などを考え合わせると何らかの入口施設の痕跡ではなかろうか。当遺跡において1例のみばかりか周辺遺跡にも類例は見受けられないので断定する迄には至らない。竪穴部外の柱穴とも関連させながら後の項で考えてみたい。

カマド(図版23, 第103図) 北西壁略中央に付設された残存状態普通のカマドである。両袖共に他と比較して短いのは崩れた(壊された)のかもしれない。支脚は甕を倒立させ粘土で固定したものである。

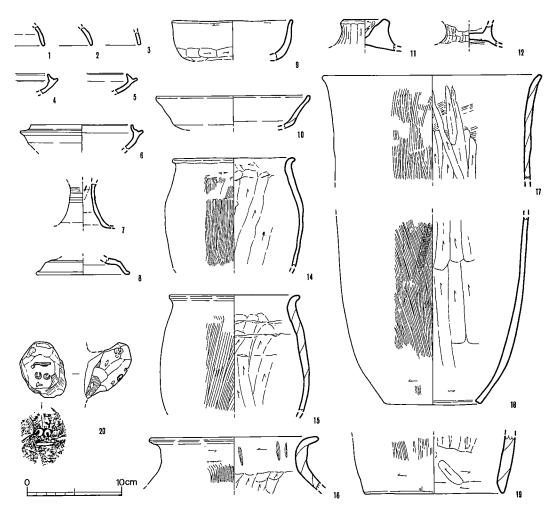


第102図 56号住居跡カマド支脚実測図(1/4)

第103図 56号住居跡カマド実測図 (1/30)・



第104図 56号住居跡・屋内施設実測図 (1/60・1/30)



第105図 56号住居跡出土土器実測図(1/4)

出土遺物 (第105図)

総出土量は少ない部類に属し、カマド内より不明土製品が出土した。

須恵器 $(1 \sim 8)$ 小破片のみで全て埋土中よりの出土である。8は壺の脚部であろう。

土師器 $(9\sim20)$ 9 と 10 は精良な坏と埦である。 11 と 12 はやや荒い砂粒を多く含み一部成形面を有するので蓋の撮みと考えた。 17 と 18 は同一個体の甑でカマド周辺部より出土したが,他は全て埋土中より出土したものである。 20 の把手は 2 個の刺突痕と一条の沈線があり,さも人面を想起させ得る趣がある。 (武田)

57号住居跡 (図版24, 第106図)

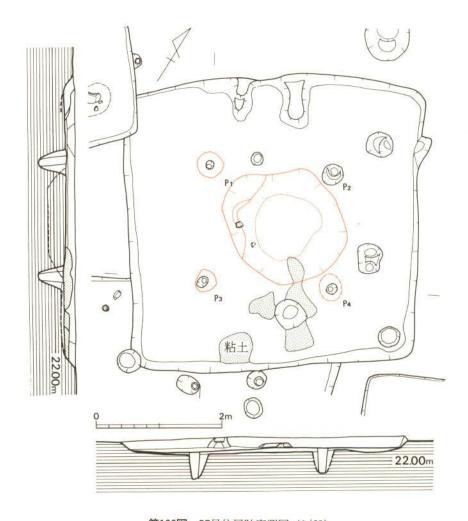
56号住居跡に切られて58号住居跡を切っている一般的規模の住居跡である。なお38号掘立柱建物に切られていた。平面形態は方形を呈しているが主柱穴はやや歪んで配置されている。壁小溝は存しなかった。床面は主柱間エリアがやや硬化し、カマド対面の床面上に粘土が散布している。床面下層の掘り込みは判然としないが中央土壙は存した。

カマド (図版24) 北西壁中央に付設された残存状態不良のカマドである。両袖共に大半が崩れており支脚も存しなかった。

出土遺物 (第111図)

総出土量は少ない部類である。砥石と不明土製品が少し埋土中より出土している。

須恵器 $(1 \sim 5)$ 小片ばかりで全て埋土中よりの出土である。5は坩の蓋であろう。



第106図 57号住居跡実測図 (1/60)

土師器 $(6\sim14)$ $6\sim8$ は精良な坏と高坏である。 $8\cdot10$ と11がカマド内よりの出土で他は埋土中より出土したものである。 (武田)

58号住居跡 (図版24, 第107図)

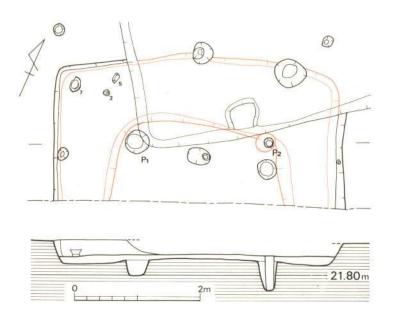
57号住居跡に切られ、約半分程が調査区外に伸展する。壁はやや緩やかな立ち上りで、壁小 溝は存しなかった。床面は普通程度の硬化である。北西部隅の床面上に倒立した甕が座位して おり置合として用いられたと思われる。床面下層で明瞭な掘り込みが認められた。カマドは存 しなかったが、57号住居跡に切られた可能性が大である。

出土遺物 (図版81, 第111図)

総出土量は少ないが、不明土製品が埋土中より僅かではあるが出土した。

須恵器 $(1\sim4)$ 2 は大きく歪んだ完形品であり 2 ケ所片口状に窪みがある。 4 は高坏の坏身であろう。全て埋土中より出土した品である。

土師器(5~9) 5は北西隅床面出土の精良な焼の完形品である。7も略同じ場所より出土 したが、他は全て埋土中より出土した。9は小さな器形の把手である。 (武田)



第107図 58号住居跡実測図 (1/60)

59号住居跡 (図版24, 第108図)

57・58号住居跡と隣接し39号掘立柱建物に切られ、大半以上が調査区外に伸展する。壁面は緩やかに立ち上り、壁小溝は存しなかった。床面は普通の硬化度であり、やや不明瞭な床面下層の掘り込みである。

カマド (第109図) 北西壁中央に付設されているが後世の柱穴などで大半以上壊されている。 支脚は甕を倒立し粘土で固定させて使っていたと思われるが、廃棄時に壁面の方へ押し倒した 状況である。これもカマド祭祀行為の一つと考えられる。

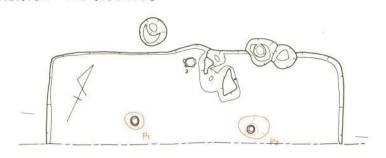
出土遺物 (図版81,第

110・111図)

出土量は僅かであった。

須恵器(1) 坏蓋の小片 で埋土中より出土した。

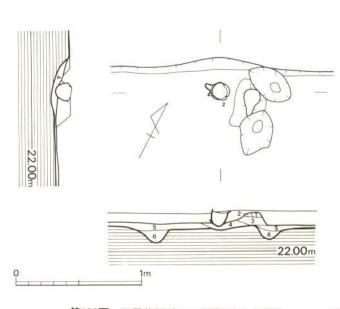
土師器(2~4) 器種は 甕のみで2は支脚に用いら れていた。他は埋土中より 出土した。 (武田)



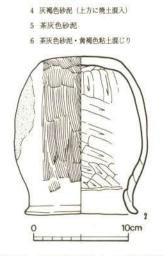


第108図 59号住居跡実測図 (1/60)

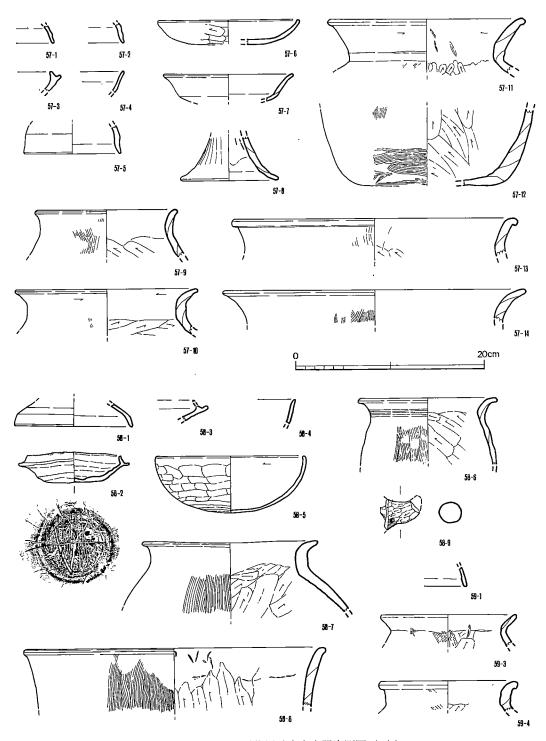
1 淡茶灰色粘實土 2 暗灰色砂泥



第109図 59号住居跡カマド実測図 (1/30)



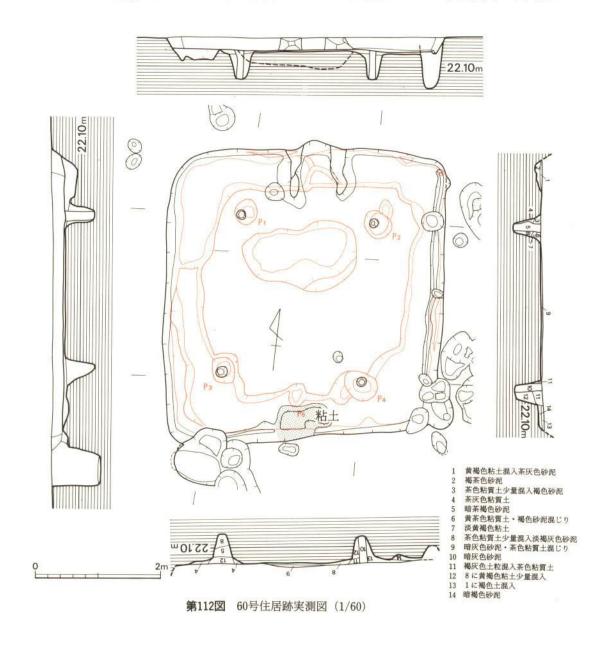
第110図 59号住居跡カマド支脚実測図 (1/4)



第111図 57~59号住居跡出土土器実測図 (1/4)

60号住居跡 (図版25~28, 第112図)

密集した周辺四方の住居跡群と好対照に、61号住居跡と共に2棟が隣接して悠然とした體を醸し出している。平面形態と主柱穴の配置は歪んだ長方形を呈し、覆土が黒色土の住居跡である。壁面は緩やかな立ち上りであり、壁小溝は東辺のみ存する。カマドは北壁中央に付設されており、その対面には粘土の高まりが存した。床面上には使用時の状況が把握出来る程に原位置を略保って遺物が多く出土した。主柱間エリアがかなり硬化していたが、主柱間エリア外は



やや柔らかい床であった。床面下層には明瞭な掘り込みが壁沿いに巡り、中央土壙も $P_1 \sim P_2$ 間寄りに存した。なお南西隅部で壁際より竪穴部外に掘りこまれた袋状を呈する土壙を検出したが、当住居に伴うか否かは不明である。

カマド (図版27・28,第113図) 床面上の遺物出土状況と同じく使用時の様子が窺える状態であった。検出時点の状況は両袖内に土器片がぎっしりと詰り,左袖上に土玉が認められた。カマド内の土器はまず甑(63)があり,口縁部西向きで押し潰れた状態であった。その下方より口縁部が東向きの甕(57)が続いて出土した。甑と甕は口縁部及び底部の向きを違えながら折り重なり出土し,自然的作用(カマド掛口部に西側より作用した力が加わったと推測される)により倒れたと思われる。これらより更に下方から甕(22)を倒立させ粘土で固定した支脚を検出した。支脚と略同じ層より肩部以下を打ち欠いた甕(21)が出土したが,これは器高調整用として支脚の上に置れていたと思われる。(21)の甕と同じレベルで焚口部付近の粘土中より不明土製品($60-M_8\sim M_{10}$, M_{12} , M_{13})が多く出土した。それらの下方灰層内より($60-M_{11}$)の不明土製品も出土している。

カマド本体は、火床面が74×48cmの長方形、袖部長さ95cmで幅38cmの最大値などを計測する。両袖共に壁際及び内側から主に粘土でもって積み上げられていた。なおカマド内より出土した甕(24,27)と袖内出土の甕(23)は袖部の補強用として埋め込まれていたと思われる。以上、検出時より解体時迄を順に従って大雑把に説明したが、ここで若干補足説明する。出土時に甑(63)と甕(57)はセットとして使用されていたと考えられた。これらを復元した後に甑を甕の上に乗せてみると、甑の底部が甕内に4~5cm程しか納まらなかった。案外動いたり揺れたりしないので使用出来ないとは思えないが、カマド周辺部より出土している甕(60,61)の方を用いたと考えるのが合理的であろう。甕(57)が使用された後に甑を置いていたとも考え得る。不明土製品については、灰層内より出土した品は日常用いられたと考えられる。その他のカマド内より出土した品は土玉と同様カマド壁体内に存した可能性が強いであろう。カマド本体については、左袖が略旧態の長さ及び基底部の厚みと考えられる。また出土状況及び崩れたカマド内の粘土より、掛口部のカマド壁体の厚みは約10cm程度となる。このカマドに関しては、カマドのあり方及び祭祀の項で詳細に検討されるので、この程度の説明とする。

カマド対面粘土及び土壌(第113図) 当住居のカマド対面粘土は他の住居跡と比較するとさほど崩れた様相ではなく、段状ないし粘土の高まりと思われる。この粘土上面に甕(37・53)と砥石が貼り付いて出土した。粘土下方より不整形な土壌(窪み)を検出し、粘土層内及び土壌内よりやや多めの土器が出土した。土器の大半以上が甕の破片であったが、精良な境(12)が含まれていた。これら出土土器と粘土層内にやや多く焼土が混入していたことが、カマド対面粘土及び土壌の性格を考える上で重要な問題点となるであろう。この件も後で述べることにしたい。

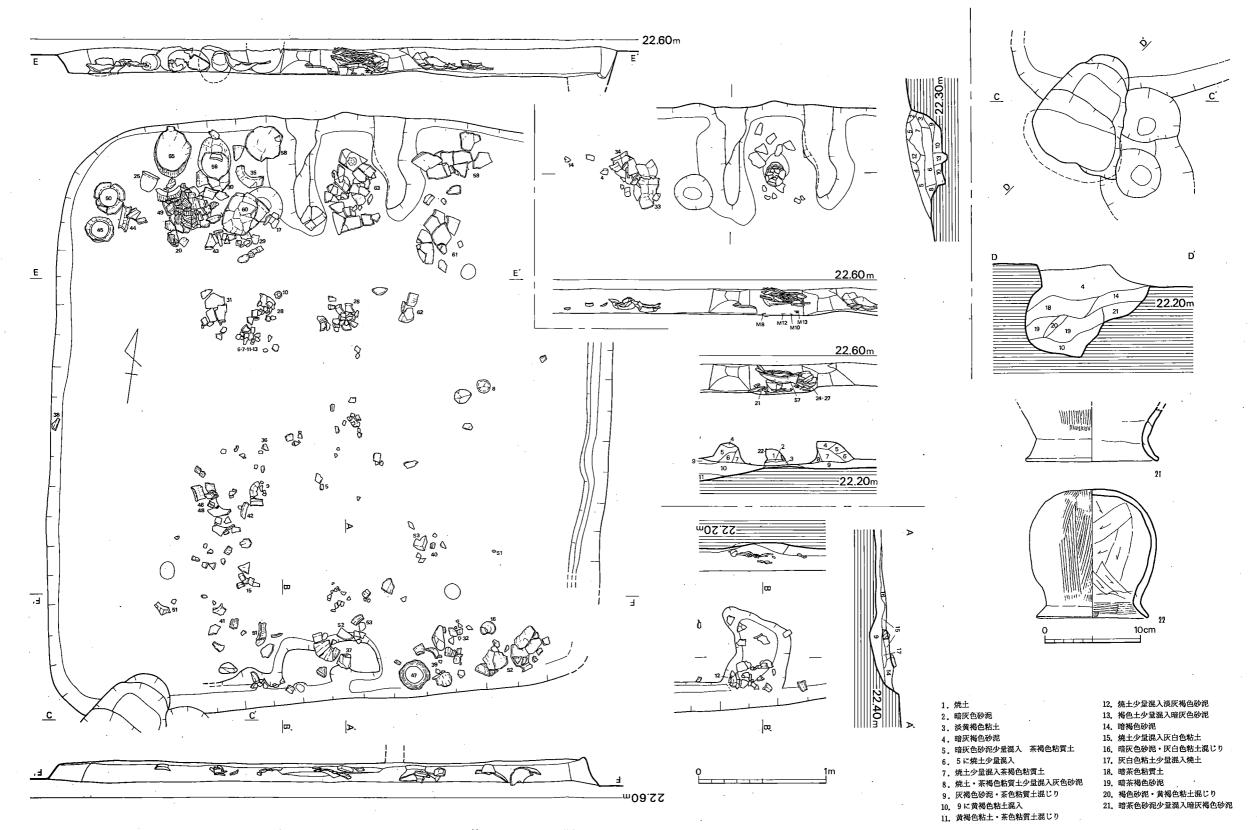
南西部竪穴部外土壙(第113図) 当初は住居跡に伴わないと考えていたが、床面まで掘り下げた時に貼床が途切れていたので伴う可能性も出て来た。埋土は主に黒色土が充塡していたが、住居跡の埋土とさほど大差はなかった。貼床が途切れていることで住居跡よりも新しい可能性は残っているけれども、竪穴部外に居住空間の拡がりを持つ可能性がある住居跡もあり、上記のことを考え合せて伴なうかもしれぬと判断し図示した。当土壙は二段掘りで袋状を呈し、大半以上竪穴部外に存する。出土した遺物は甕の破片のみである。この種の土壙を有する住居は当遺跡にはなく、近隣及び北部九州にも類例は少ないと思われる。伴う遺構なら貯蔵穴の可能性が大であるけれども、後々の課題として行かねばならない。

遺物出土状況 (図版27·28, 第113図)

当住居跡床面上の出土状況は使用時の面影を残しているので、後項で検討されるので概略を述べるに止めたい。出土状況を大別して、カマド周辺部・カマド対面周辺部と主柱間エリアの三つに分けられる。各所の出土数は表(第1表)に記している。先ずカマド周辺部では圧倒的に甕・甑類が多く出土した。(45)と(50)は置台として機能していた。(55)と(58)は壁面に凭れて座位し、(56)は15cm程底部が埋め込まれて正立している。この三個の甕は貯蔵用具として使用されていたのではあるまいか。カマド左袖外の窪みにも甕が置かれていたかもしれない。その他では(25)が完形品であるが、これ以外は押し潰れ重なりあった状態で出土した。これらよりカマド左側は貯蔵ないし物置的空間と推測された。カマド対面周辺部でも甕類が多く出土した。甕以外では粗製の境(16)と精製の坩(15)のみである。倒立して座位する甕(17)も(45)・(50)と同様な置台であろう。すぐ傍には(52)などの大甕が出土している。この空間も貯蔵ないし物置の場所として使用されていたであろう。カマド左側とは出土量も大いに異なるので違った機能を果していたかもしれない。主柱間エリアは精良な供献用土器が多く出土したのが特徴である。主柱間エリアに土器を置くことは不合理と考える(後項の「居住空間の使用法」で述べるので省略する)ので、廃棄時に祭祀行為が営まれたのか投棄されたものなのか、あるいは棚が存しそこに置かれていたものが落ちたのかは判然としない。

器種	須見	惠 器	土			•	師		器		
出土地	坏蓋	坏身	大型	甕 中型	小型	甑	坏	埦	鉢	坩	高坏
埋土	2	1	1	1	1	1					
カマド周辺			14	7			1	1	1		1
主柱間エリア			3	4		1	2	1			5
カマド対面周辺			5	3				1		1	
カマド内			1	4		1					

第1表 60 号住居跡出土土器 器種一覧



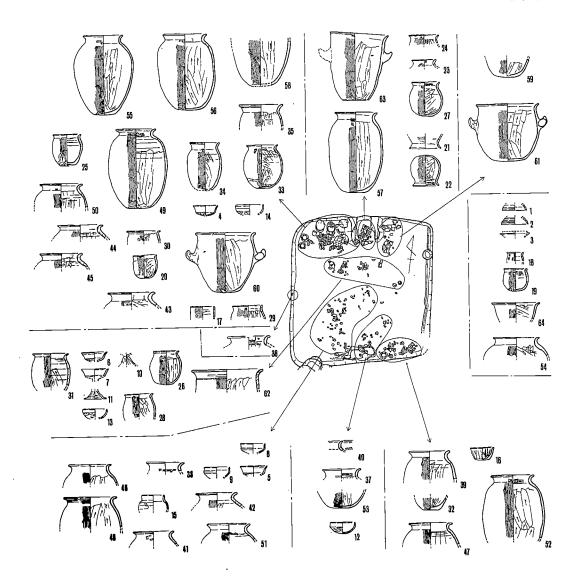
第113図 60号住居跡遺物出土状況, カマド・土壙実測図 (1/30)

出土遺物 (図版82~85, 第114~119図)

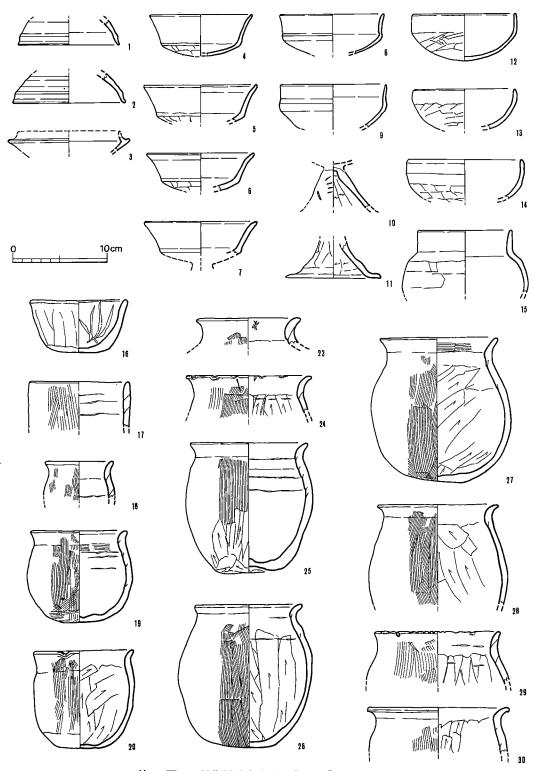
出土状況の項で述べられなかったことを記す。埋土中より紡錘車,床面上 $1\sim5\,\mathrm{cm}$ で手捏土器,床面上より低石が $2\,\mathrm{点}$ とカマド内より剣形土製品が $3\,\mathrm{点}$ 出土している。不明土製品も若干埋土より出土した。

須恵器 $(1\sim3)$ 全て埋土中よりの出土である。

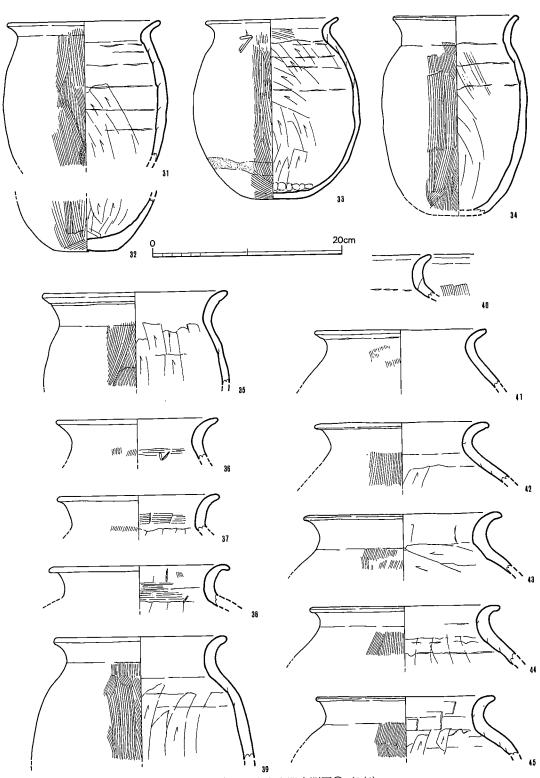
土肺器 $(4 \sim 64)$ 床面上よりの出土品は図示している。それ以外は埋土中より出土した。 (武田)



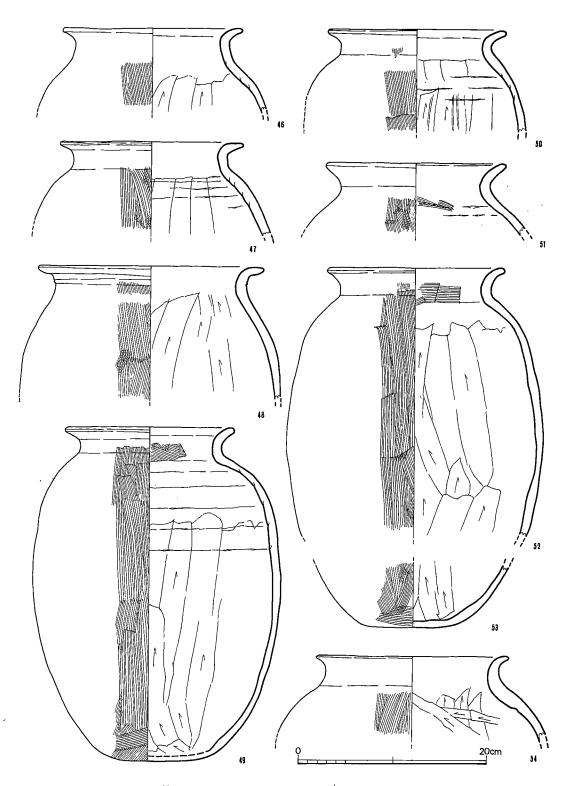
第114回 60号住居跡出土土器位置図



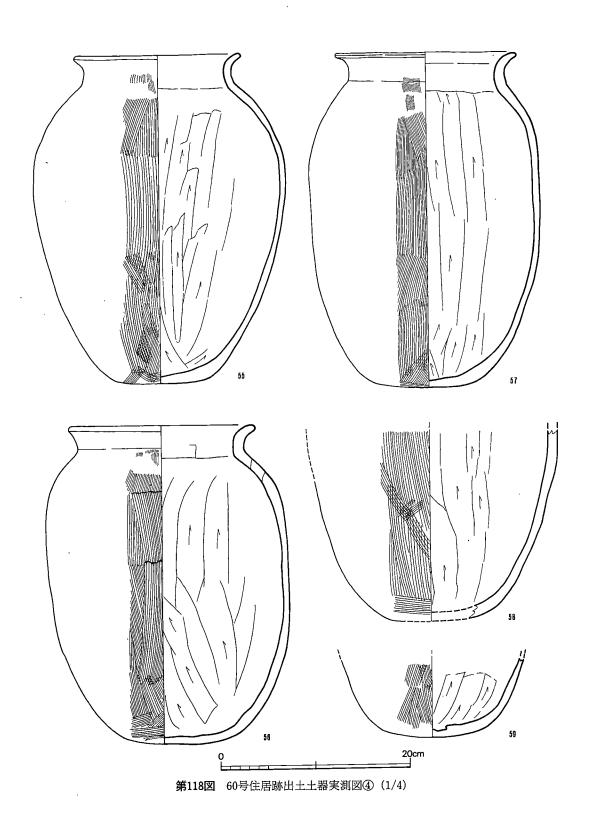
第115図 60号住居跡出土土器実測図① (1/4)



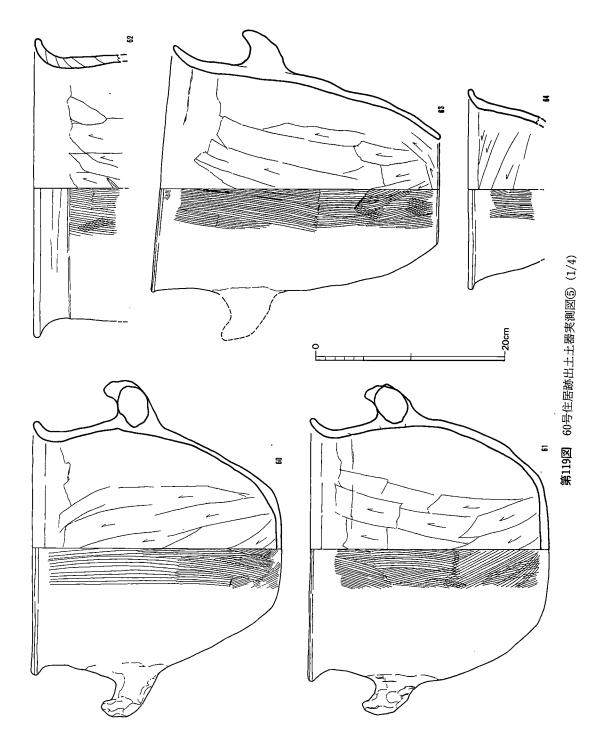
第116図 60号住居跡出土土器実測図②(1/4)



第117図 60号住居跡出土土器実測図③ (1/4)



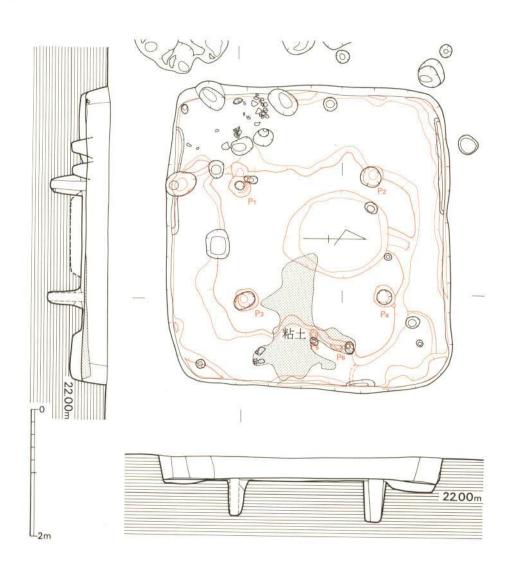
- 115 **-**



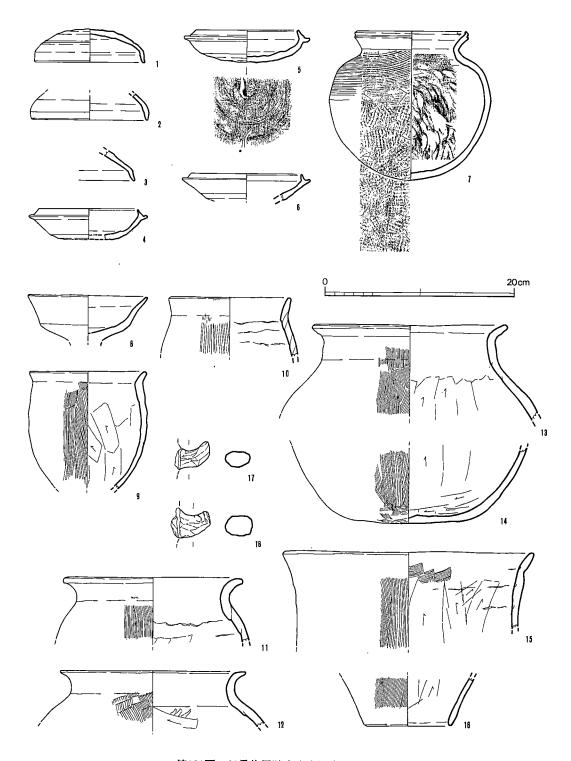
– 116 –

61号住居跡 (図版25, 第120図)

60号住居跡のすぐ東に、切合い関係がなく単独で存在する。東西にやや幅広の方形プランで、埋土は黒褐色砂質土であった。西壁中央付近にカマドが付設されていたが完全につぶれ図示出来なかった。粘土を張って踏み固められた床面には柱痕が見え、4主柱穴のプランは住居跡のそれと異なり南北に幅広の方形プランを呈する。カマド対面で床面との間に黒色土を挟んで黄白色粘土を検出した。また、床面下では掘り込みが途切れずに全周し、やや北に偏して中央土壙を検出した。



第120図 61号住居跡実測図 (1/60)



第121図 61号住居跡出土土器実測図 (1/4)

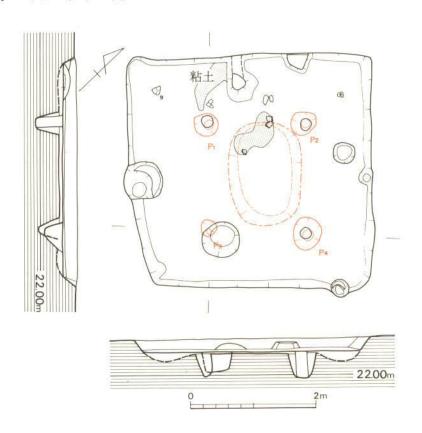
出土遺物 (図版86, 第121図)

およそ100個体分程の土器が出土したが,その殆どが埋土中からの出土で,須恵器は全体量の約1割を占める。手捏土器1と不明土製品・耳環1が埋土中から出土した。またスラッグが2点あり,1は埋土中にあった壺(7)の中から,他の1は床下層で P_4 のすぐそばから出土した。

須恵器 $(1\sim7)$ 坏 5 は完形品でカマドの左側の床面上で横転した状態で検出した。他は埋土中からの出土品で,7 を除いて反転復原図である。7 の体部下半内面にはスラッグによる鉄銹が付着している。

土師器 $(8\sim16)$ 甑15は小破片となってカマドの左側の床面上から出土した。他は埋土中からの出土である。 $9\cdot10$ の小型の甕は支脚として使用し,廃棄したものと思われる。(児玉)

62号住居跡 (図版29, 第122図)



第122図 62号住居跡実測図 (1/60)

61号住居跡の南3mに位置し、40号掘立柱建物に切られたやや小型規模の住居跡である。平面形態は少し歪み、主柱穴の配置も若干東偏している。壁面は緩やかな立ち上りをなしているが、壁小溝は存しなかった。床面では主柱間エリアがかなり硬化している。床面下層の掘り込み及び土壙はあまり明瞭ではない。

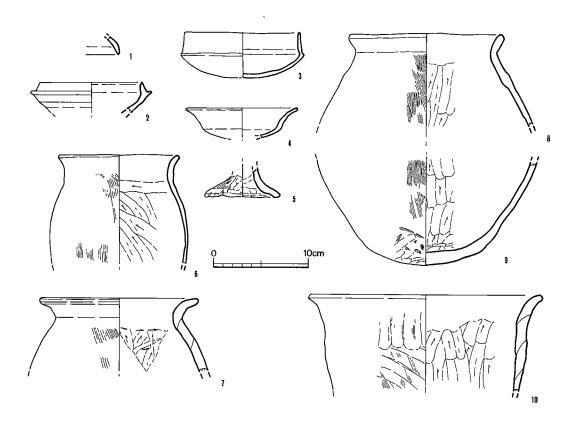
カマド 北西壁中央に付設されていたが、かなり潰された状況で粘土が広範囲に散布していた。両袖の基底部のみが残存し、支脚も存しなかった。

出土遺物 (図版86, 第123図)

総出土量は少なかった。不明土製品は埋土中よりやや多く出土し、盤状土製品も床面より出土している。

須恵器(1・2)1は床面上より、2は埋土中より出土した小片である。.

土師器 $(3\sim10)$ 5 と 6 がカマド内より、 9 が床面より出土したが他は埋土中より出土した。 $3\sim5$ は精良な坏と高坏である。 6 は内外面共に二次火熱を受けているので、支脚として用いられたのであろう。 8 と 9 は同一個体と考えられる。 (武田)



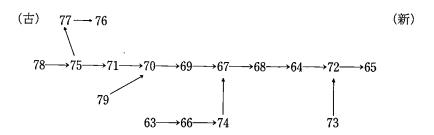
第123図 62号住居跡出土土器実測図 (1/4)

63~78号住居跡群の概要 (図版30, 第124・125図)

当遺跡中で最も多く切り合った住居跡群である。古墳時代後期の住居跡が方形プランを呈することを念頭に置き、上面での検出作業を行った。けれども正確に全体像を把むことは出来なかったので、セクションを設定し試掘坑を掘り下げていった。その結果大まかに把握出来たけれども、検出面で一部住居跡の床面が喪失していたことで正確に把握するのは困難であった。それら不明な部分を発掘区の土層図で補うしか方法が無かった。

63~66・72~74号住居跡の床面レベルは大差なく、重なり合った状況を呈した。67~71号住居跡では、新しい住居跡がより深く掘削され、古い住居跡は殆ど旧態を留めていなかった。両グループが対称をなしているのは注目される事象ではなかろうか。この件に関しては、種々問題が存するので後日に期したい。なおこの住居跡群の主柱穴を図面上のみで確認したのも一部含まれており、また74号住居跡の如く問題を孕んだ住居も存する結果となった。

以上より下の図の様な先後関係となる。



これら古墳時代後期の住居跡群の下層より、平面形態長方形の柱穴を多く検出した。これは 弥生時代の掘立柱建物であり、詳細はC-2で述べられるので図示するに留めておく。

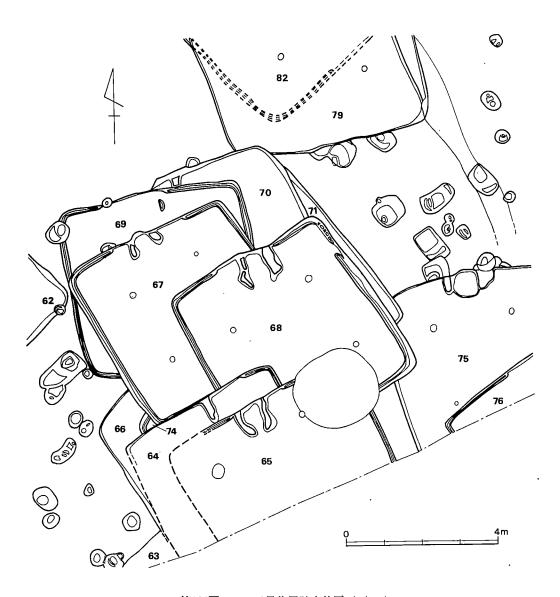
(武田)

63号住居跡 (図版30, 第126図)

大部分が調査区外に伸展し、かつ66号住居跡に切られているので殆ど不明である。床面が存したことと南壁土層観察より住居跡と確認した。カマドは存しなかったが、調査区内西寄りに焼土が若干確認されたので少し西に付設されていたと思われる。

出土遺物 (第128図)

出土したのは土師器の小片が僅かで、図示出来たのは甑と思われる1のみである。 (武田)

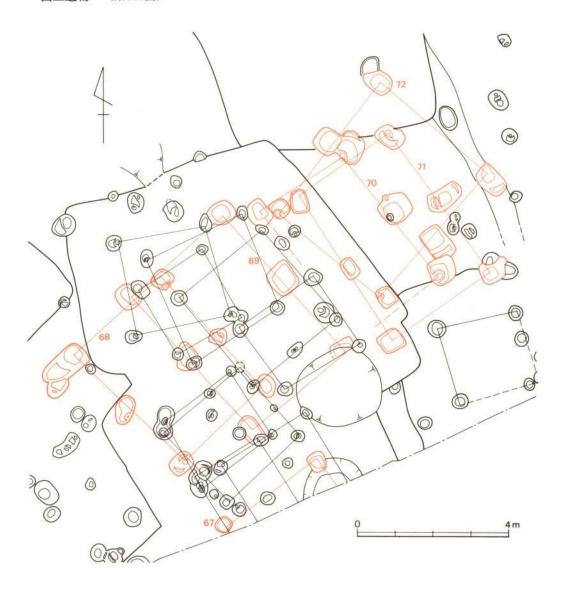


第124図 63~78号住居跡全体図 (1/100)

64号住居跡 (図版30, 第127図)

65号住居跡に大半を切られ、約%が調査区外に伸展する、中型規模と推定される住居跡である。検出時に床面の一部が喪失しており、床面下層にも明瞭な掘り込みは認められなかった。カマドは北西壁に付設されていたが、堆積状況と焼土範囲より左袖が基底部まで壊れたものと思われた。

出土遺物 (第128図)

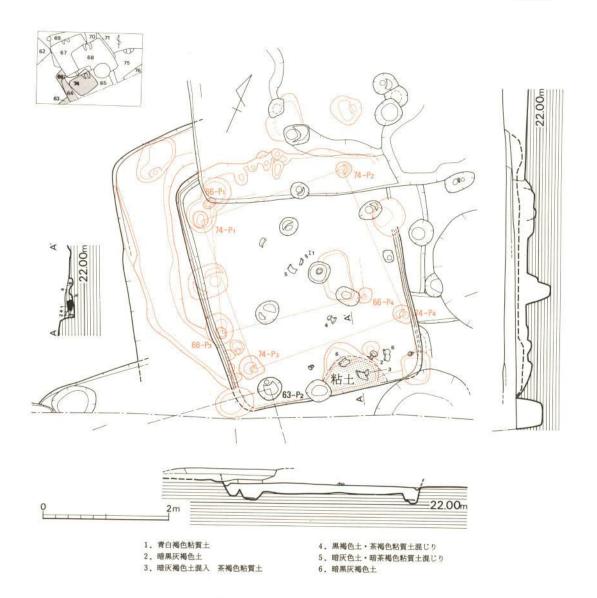


第125図 68~72号掘立柱建物配置図 (1/100)

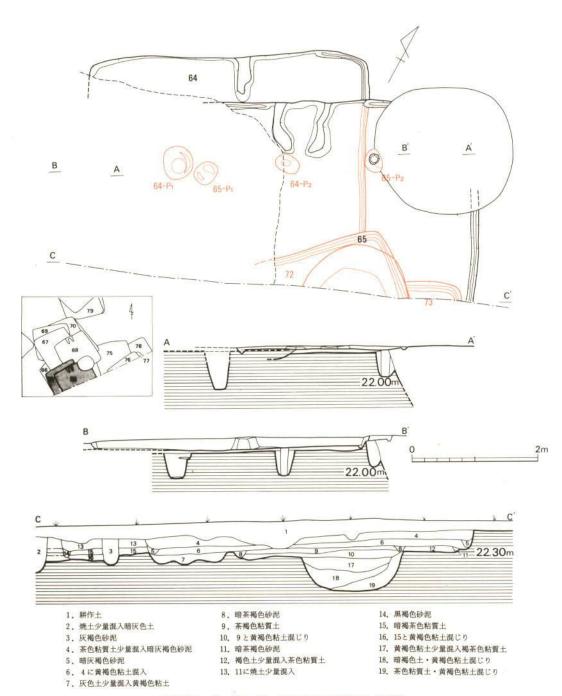
残存状態が悪いので出土量も少なかった。不明土製品が1点出土している。

須恵器 $(1\sim4)$ 全て小片である。 1 は床面より、 2 と 4 がカマド周辺より、 3 が埋土中より出土した。

土師器 $(5\sim14)$ 11が床面より、 $4\cdot6\cdot10$ と12がカマド周辺より出土し、他は埋土中から出土した。8は56号住居跡より出土した蓋の撮みと同様である。13は小型の器種の把手であろう。 (武田)



第126図 63・66・74号住居跡実測図 (1/60)



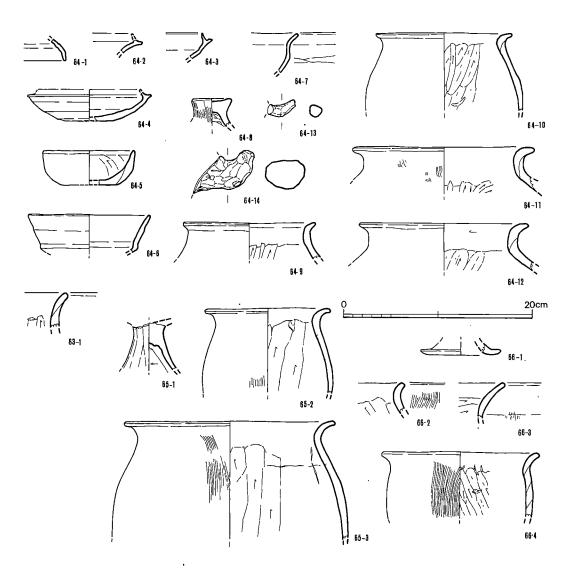
第127図 64・65・72・73号住居跡実測図 (1/60)

65号住居跡 (図版30, 第127図)

約半分程が調査区外に伸展し、北東部隅を新しい土壙に切られている。主柱穴間より類推するとやや大きめの住居跡となろう。床面はかなり硬化していたが、床面下層の掘り込みは明瞭ではなかった。カマドは北西壁中央よりやや西寄りに付設されていたが、残存状態不良で支脚も存しなかった。

出土遺物 (第128図)

出土量は少なく須恵器は出土していない。スラッグが埋土中より出土し、不明土製品も僅か



第128図 63~66号住居跡出土土器実測図(1/4)

ではあるが埋土中より出土した。

土師器 $(1 \sim 3)$ 精良な高坏の 1 は床面より、甕 2 と 3 はカマド周辺下層より出土した。 (武田)

66号住居跡 (図版30, 第126図)

大半以上を $64 \cdot 67 \cdot 74$ 号住居跡に切られている。主柱穴は検出時の層序を基に図面上で考えたのを図示したが, P_2 は74号住居跡が深く掘られているので無くなったと思われる。しかし74号住居跡の形態及び主柱穴の配置に若干疑問が残るので,74号住居跡の主柱穴としたが本住居跡に伴う可能性も存す。床面はあまり硬化していなかった。床面下層には明瞭な掘り込みが壁沿いに巡っている。カマドは切られて存しない。

出土遺物 (第128図)

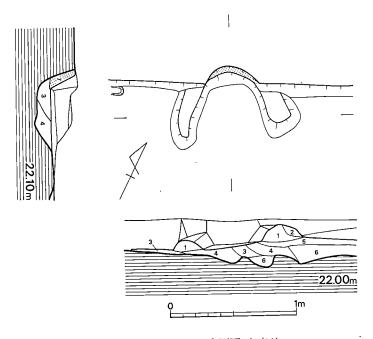
土師器の小片のみ出土した。不明土製品も埋土及び床面下層より僅かに出土している。

土師器 $(1\sim4)$ 2 が埋土中よりの出土品で,他は床面下層より出土した。 1 は精良な高坏であろう。 (武田)

67号住居跡

(図版30, 第130図)

- 1. 黄褐色粘質土
- 2. 暗灰色土少量混入 黄褐色粘質土
- 3. 黒褐色土・
- 黄褐色粘質土混じり
- 4. 灰褐色土・ 黄褐色粘質土混じり
- 5. 淡褐色土・ 淡黄褐色粘質土混じり
- 後面積色粘質土混じり .6. 3に茶褐色粘質土混じり
- 7. 1の焼土化



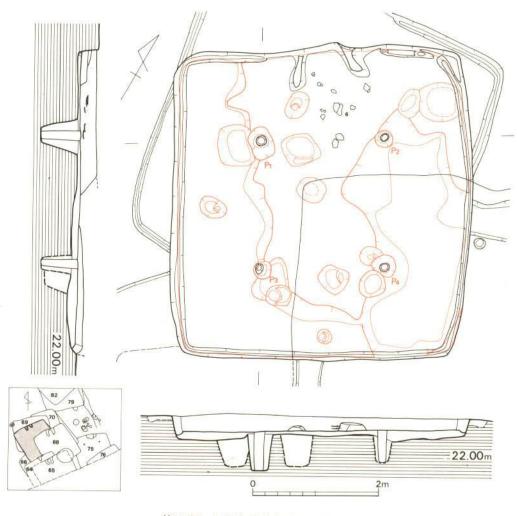
第129図 67号住居跡カマド実測図 (1/30)

64・68号住居跡に切られているが中型規模の住居跡と思われる。平面形態は東辺が僅かに脹らんではいるものの主柱穴配置と同様に略方形を呈する。壁小溝はカマド部周辺を除き巡っていた。カマド対面に粘土は認められなかった。床面は主柱間エリアが硬化していた。床面下層にはカマド部を除いた明瞭なコ字状の掘り込みが壁沿いに存した。

カマド (図版29, 第129図) 北西壁中央に付設されていたが支脚は存しなかった。煙道部には 壁面に粘土を貼り付けた痕が認められた。周辺部より若干の土器が出土している。

出土遺物 (図版86, 第132図)

出土量はあまり多くない。棒状土製品が埋土中より、不明土製品も若干出土している。検出時に67・68号住居跡より手捏土器と有溝円板が出土した。



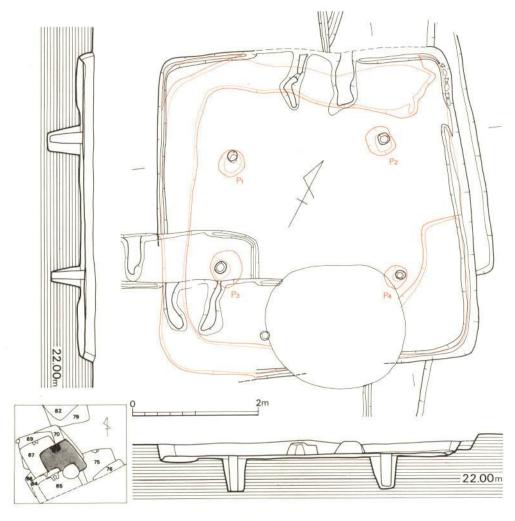
第130図 67号住居跡実測図 (1/60)

須恵器 $(1\sim4)$ 4がカマド周辺より出土したが、他は埋土中より出土した。

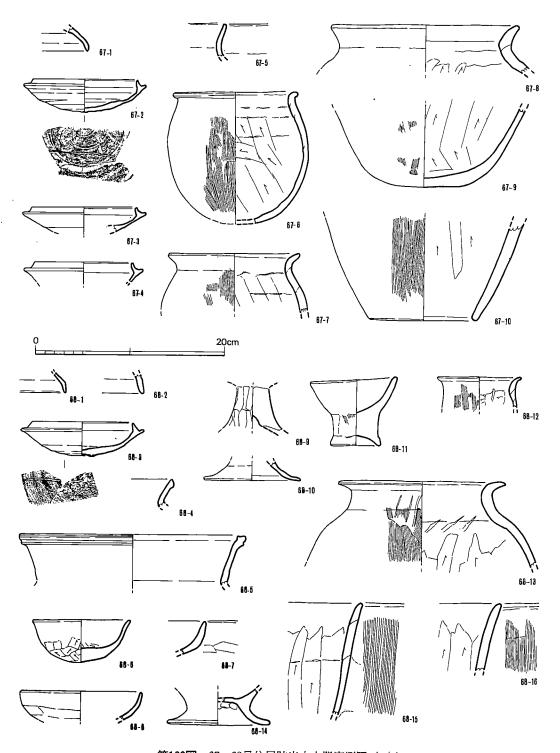
土師器 $(5\sim10)$ 6 はカマド周辺,8 は床面下層より出土し他は全て埋土中より出土した。 5 は精良な坩であろうか。 6 は二次火熱が内外に認められるので支脚に用いられたのであろうか。 (武田)

68号住居跡 (図版30, 第131図)

新しい土壙と64·65号住居跡に切られてはいるものの概ね一般的規模の住居跡と推定される。 一部少し掘り過ぎたが、平面形態と主柱穴配置は台形状を呈する。壁小溝はカマド周辺部を除



第131図 68号住居跡実測図 (1/60)



第132図 67·68号住居跡出土土器実測図 (1/4)

いて巡っている。床面は主柱間エリアがかなり硬化していたが,その外は普通である。床面下層には東側の一部で途切れるものの壁沿いに明瞭な掘り込みが存したが,中央土壙は存しなかった。

カマド (図版29, 第133図) 北西壁中央に付設されていたが支脚は存しなかった。カマドの規模及び形態は一般的である。左袖外に完形の埦と脚付埦が床面上に存した。カマド祭祀が営まれた可能性を有す。

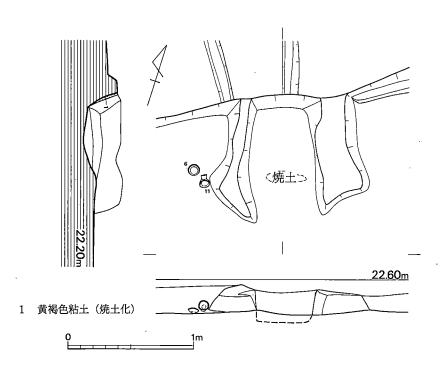
出土遺物 (図版87, 第132図)

総出土量は一般的と言ってよい。把手状土製品が埋土中にあり,不明土製品も若干出土している。·

須恵器 $(1\sim5)$ 殆どが小片であり、1が床面、2と4がカマド周辺床面、2が床面下層、5が埋土中より出土した。

土師器 $(6\sim16)$ 精良な坏・塊及び高坏が比較的多く出土した。 $6\cdot7\cdot11$ と13がカマド周辺より、15が床面上より、16が床面下層より出土したが、他は埋土中よりの出土品である。

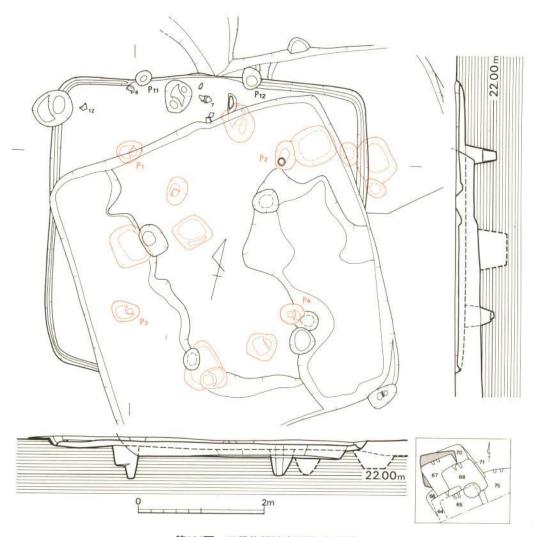
(武田)



第133図 68号住居跡カマド実測図 (1/30)

69号住居跡 (図版30, 第134図)

大部分を67号住居跡に切られ、70号住居跡を切っているが、62号住居跡との切り合いはない。 残存する部分及び主柱穴の配置などより類推すると一般的な規模となろう。主柱穴は68号住居 下層で検出し略方形を呈する。壁小溝はカマド周辺を除き巡っている。床面はさほど硬化して いないのは主柱間エリア外であり首肯ける。カマドは北壁中央に付設されていたが、現代溝で 全んど壊されており袖の基底部が僅かに残っただけである。カマド左側の床面上に若干の土器 が出土した。床面下層には明瞭な遺構は存しなかった。竪穴部外に P_{11} と P_{12} を検出したが、54 号住居跡と同じ性格を有する柱穴であろう。



第134図 69号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (図版87, 第136図)

出土量は少ない部類だが、坏類が比較的多く出土した。埋土中より有溝円板と不明土製品が 出土している。

須恵器 $(1\sim6)$ 坏類の破片ばかりで、6が床面より出土したが他は全て床面下層より出土した。

土師器 $(7\sim14)$ 7は床面より出土した精良な埦の完形品である。8は P_1 内より出土したが築造時の所産と思われる。10は床面上より出土した脚付の埦であろう。12と13は床面出土で,9と14が床面下層より出土した。 (武田)

70号住居跡 (図版30, 第135図)

 $67\sim69$ 号住居跡に殆ど切られている。主柱穴配置と床面下層の掘り込みより類推すると中型規模の住居跡であろう。壁小溝は存しなかった。カマドは北西壁に付設されていたが,69号住居に大半以上壊されていた。竪穴部外柱穴 P_{12} も当住居跡に伴うかもしれない。床面はやや硬化していたし、床面下層に明瞭な掘り込みが存した。

出土遺物 (図版87, 第136図)

出土量は少なかった。床面下層より土玉と不明土製品が出土した。

須恵器 $(1\sim4)$ 坏身のみが出土した。1 と 2 が床面下層より,3 と 4 が埋土中より出土した。

土師器 $(5\sim6)$ 5 は床面より出土し、6 は丁寧なつくりの鉢と思われるが床面下層より出土した。 (武田)

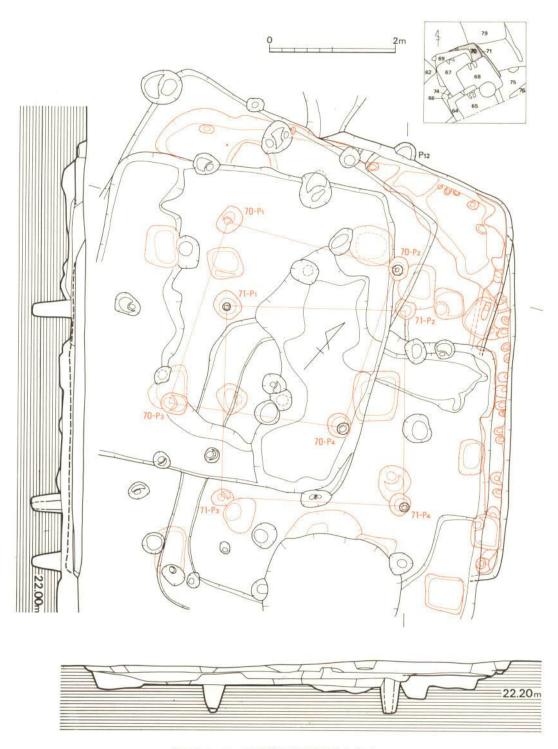
71号住居跡 (図版30, 第135図)

68・70号住居跡に殆ど切られて東壁部の一部しか残存しないが、75号住居跡を切っている。 主柱穴配置は一般的であり、これより類推すると中型規模の住居跡であろう。壁小溝は存しな かった。床面下層は凹凸が著しく掘削痕であろう。

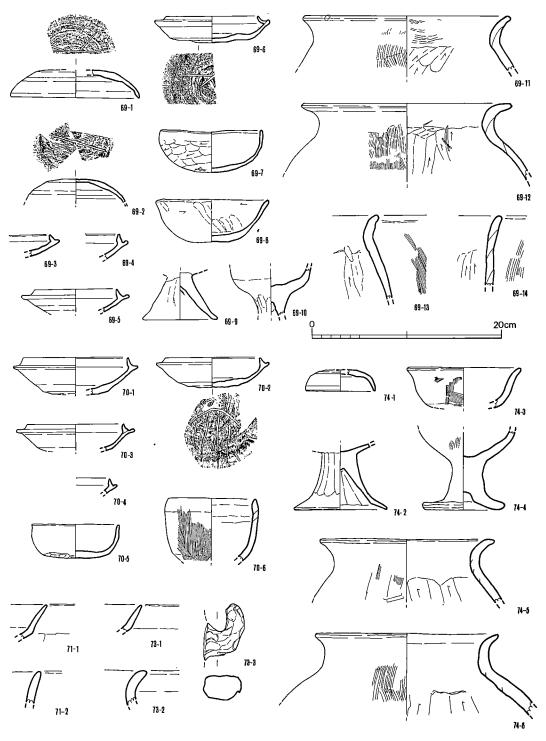
出土遺物 (第136図)

殆んど出土しなかった。不明土製品も1点だけ出土している。

土師器(1・2) 図示出来たのは 2 点のみである。 1 は坏であろうし 2 は甑と思われ、埋土中より出土した。 (武田)



第135図 70·71号住居跡実測図 (1/60)



第136図 69~74号住居跡出土土器実測図 (1/4)

72号住居跡 (第127図)

65号住居跡下層より検出し、64・74号住居跡を切っている。壁小溝が存したので住居跡とした。殆どが調査区外に伸展するので、概ね不明な住居跡である。下層よりD3を検出したが当住居跡に伴うか否かは不明である。出土遺物も土師器甕の小片のみで、図示出来るものはなかった。 (武田)

73号住居跡 (第127図)

65・72号住居跡に切られ、殆どが調査区外に伸展する。壁小溝と床面を確認したので住居跡とした。72号住居跡と同様に殆どが不明である。

出土遺物 (第136図)

土師器の小片が出土しただけである。

土師器 $(1 \sim 3)$ 全て床面直上で出土したものであり、3は精良な坏であろう。 (武田)

74号住居跡 (第126図)

64・65住居跡の下方より検出したが、63・66号住居跡よりは新しい。床面とその上方僅かしか残存せず、カマドも67号住居跡に削平されたと考えられる残存状態不良な住居跡である。主柱穴は壁際の4本としたが、当遺跡でこの種の柱配置をなす住居跡はなく問題を孕む結果となった。しかし一般的な位置を精査したのであるが存しなかった。もし図示した主柱穴が66号住居跡に伴う場合は、当住居跡の主柱穴は床面上に据えられていたとしか考えられない。どちらの場合でも当遺跡では不合理であり、後日の課題としたい。床面は全体的に硬化していた。壁小溝は東西壁際に2条存した。床面下層には明瞭な遺構は認められなかった。

カマド対面粘土及び土壌 南西壁中央部にさ程厚くはないが粘土が散布していた。その下方に不整形な土壌を検出したが浅い二段掘りである。壌内及び周辺より甕(6)が、上端部で高坏(2)が出土したが、残存状態を考え合せるとこれらの土器は粘土内に存したと思われる。

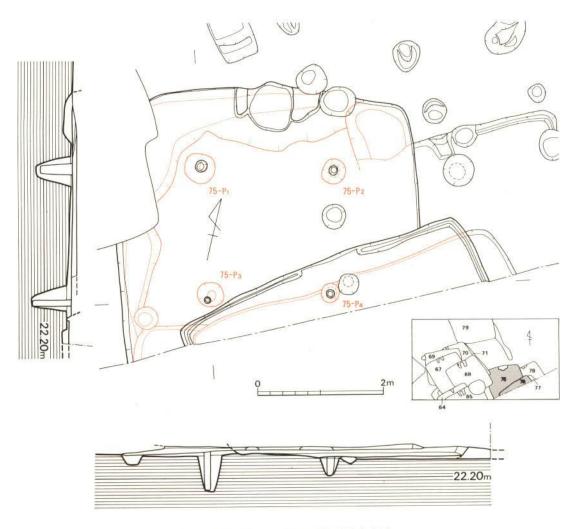
出土遺物 (図版87, 第136図)

残存状態不良な住居跡にしては多く出土した。鉄製刀子が床面上より、手捏土器が床面直上より出土した。不明土製品で布目痕を有するものなどが床面下層より出土している。

須恵器(1) 坩の蓋と考えられ埋土中より出土した。

75号住居跡 (図版30, 第137図)

68・71と76号住居跡に切られ、78号住居跡を切り調査区外に若干伸展する住居跡である。壁 小溝は存せず、床面の硬化は一般的である。床面下層には明瞭な掘り込みが認められ、南西隅 の落ち込みは土壙状を呈する。



第137図 75 • 76号住居跡実測図 (1/60)

カマド 北壁中央部に付設されているが、後世の柱穴などで壊され残存不良である。支脚は存しなかった。火床面は65cmの隅円方形を呈するが両袖共に約半分程が残存していると推定される。

出土遺物 (第139図)

出土量は少なかったが坏類が比較的多い。

須恵器 $(1\sim4)$ 1が床面下層より、2が床面より出土し他は埋土中より出土した。4は高坏と思われる。

土師器(5~9) 6と8はカマド周辺より出土した。6は精良な埦であろうか。8は著しく二次火熱を受けているので支脚として用いられたかもしれない。5は柱穴内より出土した坏であろう。7は精良な鉢で埋土中より、9は床面下層より出土した。 (武田)

76号住居跡 (図版30, 第137図)

75・77と78号住居跡を切っているが、大半以上は調査区外に伸展する。壁面は略垂直に立ち上り、壁小溝は存した。カマドは人為的に壊された様相を呈し、両袖及びその基底部すら判別出来ない程であった。粘土と焼土が広範囲に散布しており、一種のカマド祭祀行為とも考えられる。

出土遺物 (第139図)

僅かな出土量でその殆どが小片であった。

須恵器 $(1 \sim 3)$ 1 は床面下層より出土した。 2 と 3 は埋土中より出土し, 3 は高坏の脚部であろう。

土師器 $(4 \sim 6)$ 小片ばかりであり、床面上より出土した。 6 は甑であろう。 (武田)

77号住居跡 (第138図)

76号住居跡に切られ調査区外に大半以上伸展する全く不明な住居跡である。壁面は略垂直に立ち上り、壁小溝も僅かではあるが検出した。カマドは削平されたと考えられ存しなかった。 床面下層にはやや深い掘り込みが施されている。

出土遺物 (第139図)

土師器のみが少量出土した。

土師器 $(1\sim4)$ 1は精良な坏で埋土中より出土し、 $2\sim4$ は床面下層より出土した。

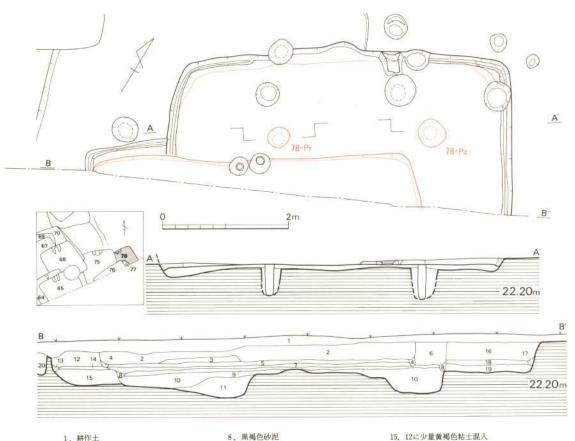
(武田)

78号住居跡 (第138図)

西北部を75~77号住居跡に切られ、約半分程が調査区外に伸展する。壁面はやや緩やかな立 ち上りで、壁小溝はカマド周辺を除き巡っている。床面は一般的な硬化を示し、床面下層には 明瞭な遺構は認められなかった。カマドは北壁中央に付設されていたが、後世の柱穴や75号住 居跡に削平されて右袖の一部しか存しなかった。

出土遺物 (第139図)

出土量は少なかった。不明土製品が埋土中より出土している。

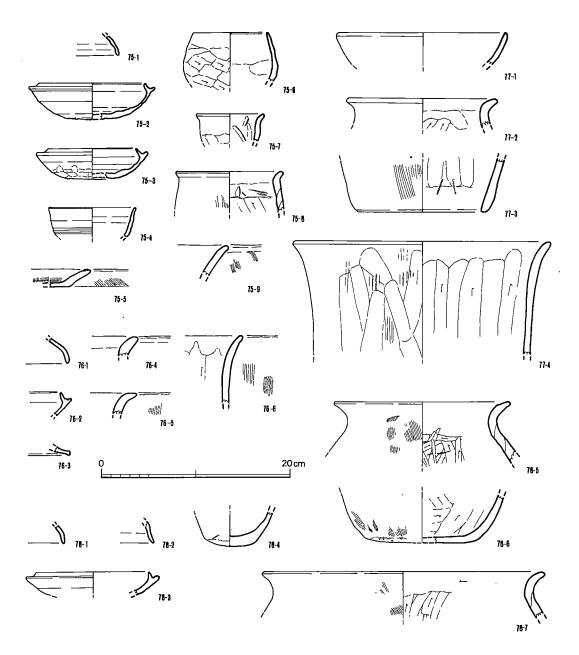


- 2. 茶色土·焼土少量混入黑褐色砂泥
- 3. 焼土混入黄褐色粘土
- 4. 暗茶灰色砂泥
- 5. 黄褐色粘土・黒褐色砂泥混じり
- 6. 2よりも茶色土多量に混入
- 7. 茶色粘質土・黒褐色砂泥混じり
- 8. 黑褐色砂泥
- 9. 黒褐色砂泥やや多く混入黄褐色粘土
- 10. 暗褐茶色砂泥
- 11. 10と黄褐色粘土混じり
- 12. 茶灰色土・黒褐色土混じり
- 13. 暗褐色砂泥
- 14. 灰色粘土・黒褐色砂泥混じり
- 16. 茶褐色土少量混入黑褐色砂泥
- 17、16よりもやや無い
- 18. 16と黄褐色粘土混じり
- 19. 黑褐色土少量混入黄褐色粘土
- 20. 暗茶褐色砂泥

第138図 77・78号住居跡実測図 (1/60)

須恵器 $(1\sim3)$ 1は床面下層より、 $2 \ge 3$ は埋土中より出土した小片である。

土師器 $(4 \sim 7)$ 7 が床面下層より出土し他は埋土中より出土した。 4 はやや粗製な鉢の底部であろう。 (武田)

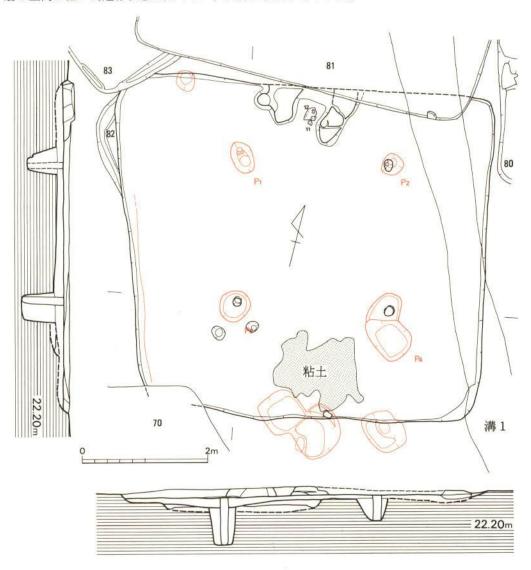


第139図 75~78号住居跡出土土器実測図 (1/4)

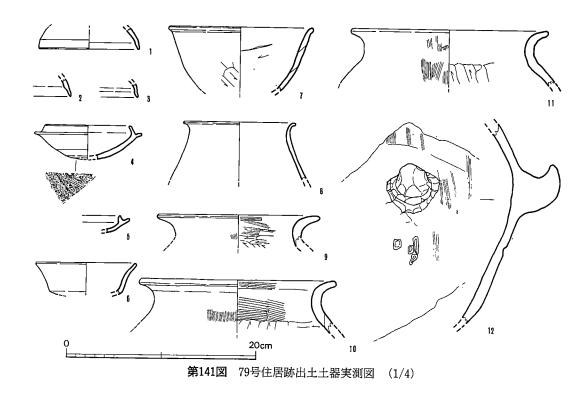
79号住居跡 (図版31, 第140図)

調査区のほぼ中央に位置し、 $80 \cdot 82$ 号住居跡を切り $70 \cdot 81$ 号住居跡に僅かに切られる。また、東壁側を溝1が南北に縦断している。プランは逆台形を呈し、貼床面には P_1 を除いた3本の主柱痕が残る。カマド対面には灰白色粘土が床面との間に黒色土を挟んで堆積していた。貼床を剝がしてはないが、床面下の構造は他の住居跡と同様であろう。

カマド 住居跡は逆台形プランを呈し、その最長辺(北壁)のほぼ中央に付設されている。住居の壁高が低い為遺存状態は良くない。支脚は検出しなかった。



第140図 79号住居跡実測図 (1/60)



出土遺物 (第141図)

45個体分の土器片を検出し、そのうち須恵器が10個体分を占める。

須恵器 $(1\sim5)$ 小片の為反転復原図である。坏身4の口唇部は上端に面を有する。カマド内出土の坏蓋1を除いて他は埋土中がら出土した。

土師器 $(6\sim12)$ 全て小片の為反転復原図である。 $6\cdot8$ は精製土器である。 $6\cdot11\cdot12$ はカマド内,10 は床面下層, $7\sim9$ は埋土中からの出土である。 (児玉)

80号住居跡 (図版31·32, 第142図)

調査区のほぼ中央に位置し、西壁を79・81号住居跡に、南東隅を4号土壙・43号建物に切られている。カマドは西壁中央部に付設されているが遺存状態は良くない。カマド対面の東壁よりやや北に偏して、住居内への"入り口"と考えられる遺構が存在する。この遺構は南北約0.8 m、東西1 m程の略長方形を呈し、深さは20cm程でこの底面と住居床面レベル差は僅かしかない。埋土は暗褐色系のもので粘土は存しない。この遺構に接続して住居内に灰白色粘土が検出され、粘土を使って入口を構築し、住居廃棄時に入口が倒壊したものであろうと推測される。また、カマド対面のこの粘土下には不整形の小形の土壙が存在する。踏み固められた貼床面に

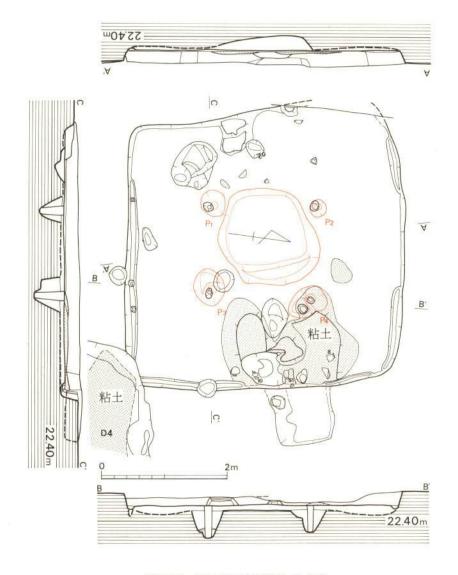
は4本の主柱痕が残っている。また、床面下のほぼ中央に中央土壙が存在する。貼床を完全に めくってはないが、周壁に沿って掘り込みが巡っているだろうと思われる。

カマド 先述のように、遺存状態が悪く、右袖の全部と左袖の前半部を欠失する。

出土遺物 (図版88, 第143図)

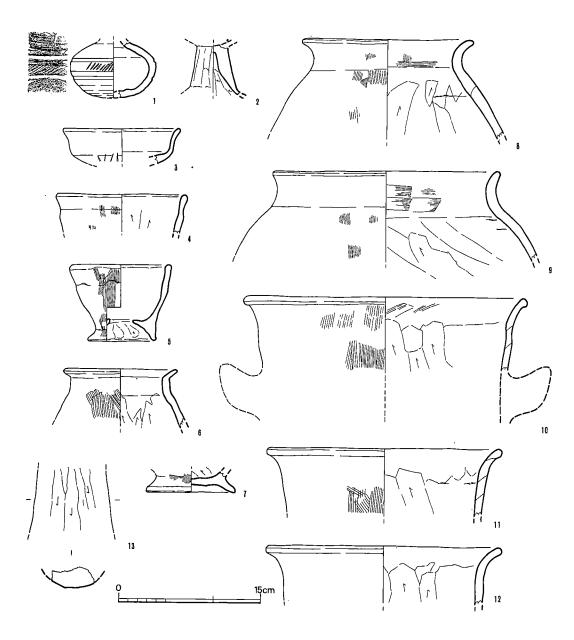
須恵器の2個体分,土師器34個体分の破片と砥石が1点出土している。カマド周辺にて桃かと思われる実が出土した。また、不明土製品も出土している。

須恵器(1) 埋土中からの出土で、反転復原図である。肩には灰をかぶっている。



第142図 80号住居跡実測図 (1/60)

土師器($2\sim13$) $4\cdot6\cdot12$ はカマド対面の土壙から, $8\sim10$ はカマド対面の粘土とともに,11はカマド周辺から,他は埋土中からの出土である。13は小片ながら土製の円柱状支脚で,立野遺跡では出土例が少ない。2 は精製土器である。 (児玉)



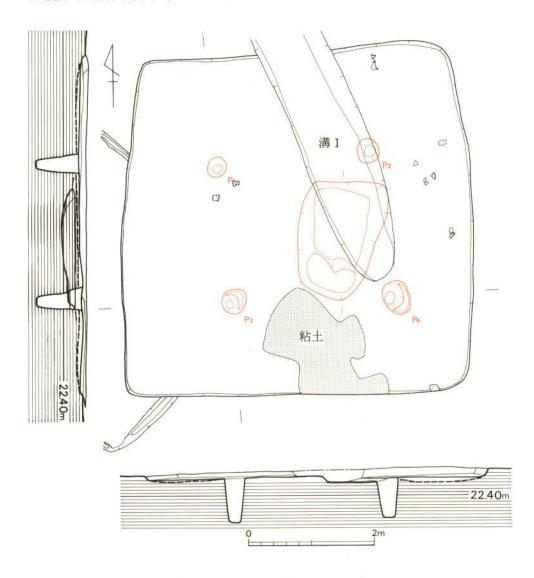
第143図 80号住居跡出土土器実測図 (1/4)

81号住居跡 (図版31, 第144図)

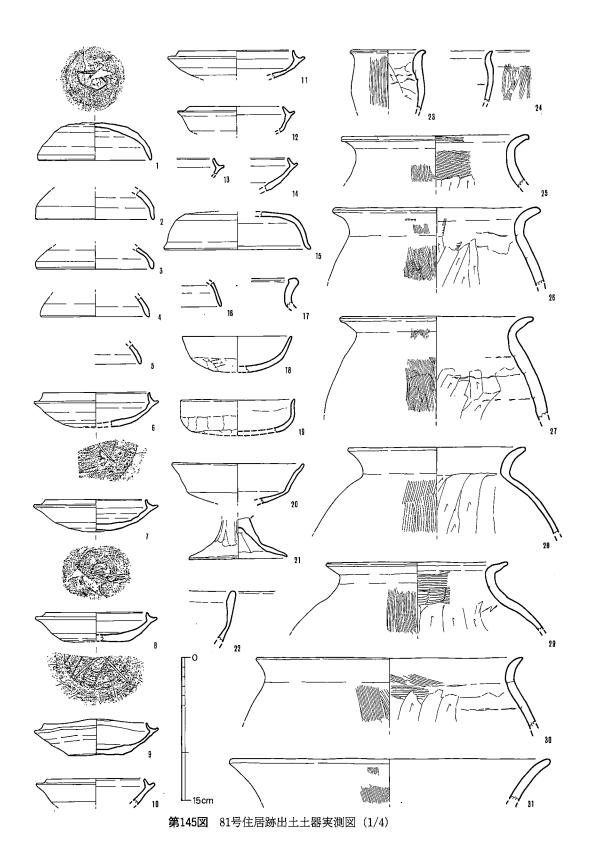
調査区のほぼ中央に位置し、79・80・82・83号住居跡を切り、東半部を溝1に切られる。略 台形を呈し、最短辺の北壁にカマドが付設されていたが、溝1によって破壊されている。カマ ド対面に床との間に薄く黒色土を挟んで灰白色粘土を検出した。床面を完全に剝がしたわけで はないが、やや東に偏して床面下の中央土壌を検出した。

出土遺物 (図版88, 第145図)

108個分の土器片を検出し、そのうち須恵器は34個体である。須恵器甕の口縁部でP1234出土



第144図 81号住居跡実測図 (1/60)



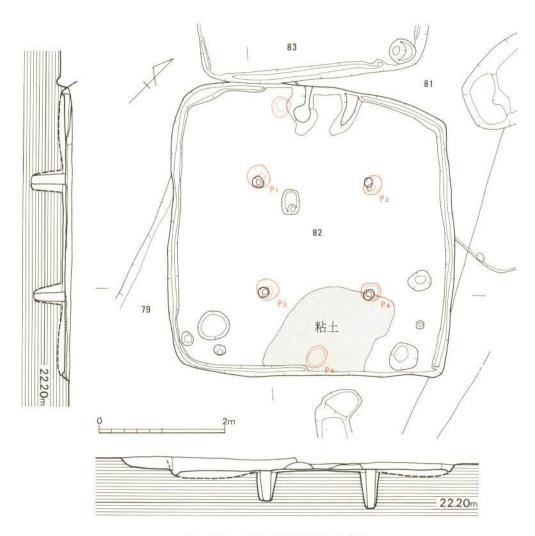
- 146 **-**

品との同一個体資料がある (B-4参照)。他に砥石が1点出土している。

須恵器 $(1\sim17)$ 全て埋土中からの出土で、9 を除いて他は反転復原図である。17は壺の口縁部小片である。

土師器 (18~31) 18は床面,21は床面下層,他は埋土中からの出土である。18~21は精製土器で,22もそれに近い。23は二次火熱を受けている。 (児玉)

82号住居跡 (図版31, 第146図)



第146図 82号住居跡実測図 (1/60)

79号住居跡とほぼ重なり合った状態で切られ、79号住居跡の北西隅に僅かに顔を出している。 が幸いに、79号住居跡の下層に床面と僅かな壁が遺存し、ほぼ方形のプランを確認出来た。床 には4本の主柱痕が残り、北西壁中央にカマドを設置していた。カマド対面には床面との間に 黒色土を挟んで黄灰色粘土を検出した。

カマド 北西壁ほぼ中央に設置される。79号住居跡に切られる為遺存状態は良くない。

出土遺物 (第148図)

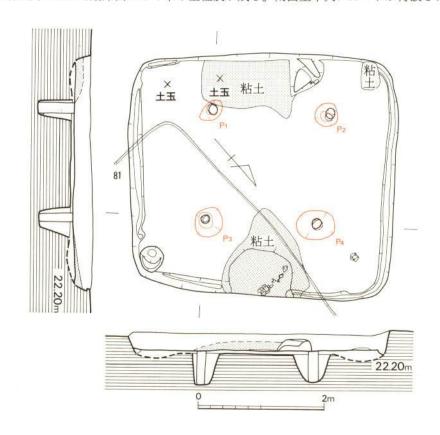
土師器ばかり11個体分の小片が出土している。

土師器 (1~3) 1 は床面出土,2 は床面下層,3 は P_4 埋土中からの出土である。

(児玉)

83号住居跡 (図版31, 第147図)

調査区のほぼ中央に位置し、東側を81号住居跡に切られるが完全な破壊を免れ、床面は残っていた。踏み固められた貼床面には4本の主柱痕が残る。南西壁中央にカマドが付設され、そ



第147図 83号住居跡実測図 (1/60)

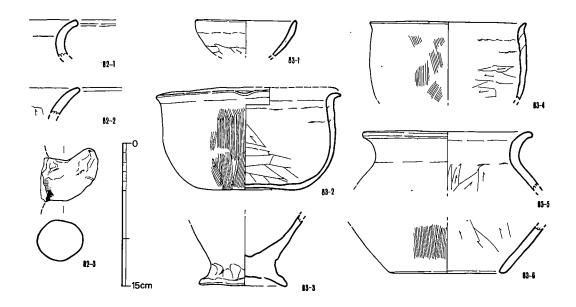
の対面には床面との間に薄く黒色土を挟んで灰白色粘土が堆積している。貼床を剝がしてない が床面下の構造は他の住居と同様であろう。

カマド 南西壁中央に粘土塊の状態で検出したが、詳細な調査は実施していない。なお、この粘土中より土製の玉3点が出土している。

出土遺物 (図版88, 第148図)

土器21個体分の破片,土製玉3点,手捏土器2点がカマド左側と埋土中より,また不明土製品が埋土中から出土している。このうち,須恵器は1点である。

土師器 $(1 \sim 6)$ **2・**4 はカマド対面の粘土中で検出した。他は埋土中からの出土である。 (児玉)



第148図 82·83号住居跡出土土器実測図 (1/4)

84号住居跡 (図版33・34, 第149図)

85号住居跡に切られ、91号住居跡の東隣に存する。西辺に比して南辺が長く、東辺はやや張った形状なので一見横長の台形状となる。カマドは85号住居跡に切られた北辺にあったもので、その対面には粘土が拡がっていた。粘土と床面との間には黒色土の薄い層があった。壁小溝は残存する3辺に部分的に見られる。下層は中央土壙が主柱間エリアの真下にあったが、外周の掘り込みはなかった。粘土下層にて $P_5 \cdot P_6$ を検出した。

出土遺物 (図版89, 第150図)

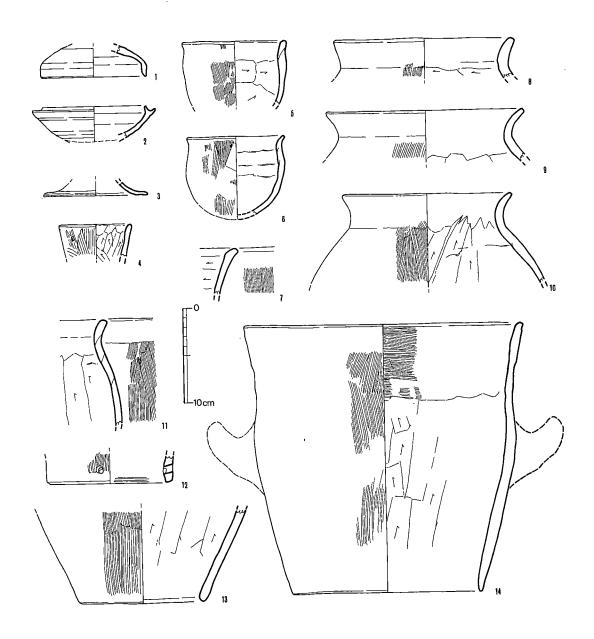
あまり多いとは言えないが、床面にも若干遺存していた。 $P_1 \cdot P_2$ の中間付近で床面より $8 \, \mathrm{cm}$ 程浮いて鉄鎌片が、ほぼ中央部で $5 \, \mathrm{cm}$ 程浮いて土玉が出土した。また、埋土中に不明土製品があった。



第149図 84号住居跡実測図 (1/60)

須恵器 $(1 \cdot 2)$ いずれも埋土中出土である。 $1 \cdot 2$ とも焼成がややあまい。

土師器 $(3\sim14)$ 4 は小型の鉢であろうが、粗質のつくりである。外面に籾痕をもつ。12は 甑であろうが、やや小型にすぎるきらいがある。14はもう少し外傾するか。 $7\cdot9\cdot14$ が床面の出土で、14は $P_1\cdot P_3$ 間の西側壁寄りに存した。 (伊崎)

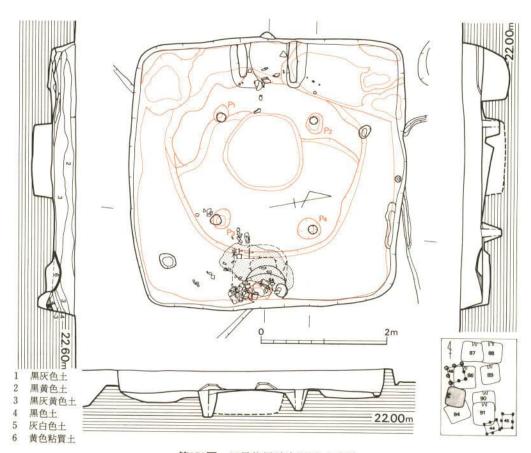


第150図 84号住居跡出土土器実測図(1/4)

85号住居跡 (図版33·34, 第151図)

84・86号住居跡を切り、カマドを西側に向けて営まれたやや小ぶりの住居である。黒灰色・ 黒黄色の土がほぼ水平に堆積していた。主柱穴は内側に寄っていて、主柱間エリアは狭く、全 面積の14.4%でしかない。カマドの上面とその対面に粘土の拡がりが見られた。カマド対面に は土壙があり土器等が出土している。この住居の主軸はカマドとその対面土壙の中心を通って いる。壁小溝は北辺に一部見られるのみである。下層の中央土壙はやや西に寄っている。

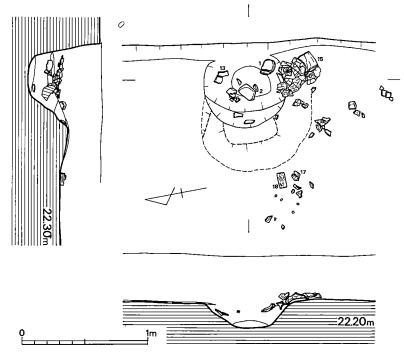
カマド対面土壙(図版40,第152図) 極めて特異な土壙と言ってよい。66×55cm程の楕円形プランで、カマド側の上端は周辺の床面より6cm程盛り上がっていた。これは周辺の床面と同じくガチガチに固くなっており、当初からこの様に高まりを持たせていたものとされる。この上面に灰白色粘土が存したが、それは壁からやや離れて土壙全体を覆ってはいない。むしろカマド寄りの高まりを被覆したかのようであった。下部には灰白色粘土が落ち込んでいて、その上



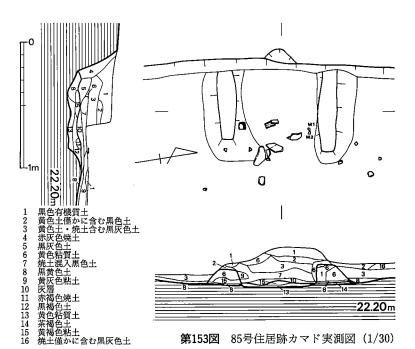
第151図 85号住居跡実則図 (1/60)

に黒がる下点でに自れで手らけのととに増進額がは器がだし出付土て床脚を上で増額がは器がだして外のを大いは、須然込出付土で床脚がは器がだしに、っては流土地がなり、これでよりのり器ら状に面し周片のより、

カマド(第153図)両 袖が残り、焚口幅50 cm, 奥行75cmを測る。 縦断土層図で見るに, 断定は出来ないけれ ども煙出し孔の幅は 15cm程かと思われる。 焚口から火床にかけ て土師器片若干が存 したのみであった。 支脚はすでに無か ったが, カマド対面 土壙の近くに出土し た土製支脚がこのカ マド内にあったもの か否かははっきりし えない。内外に不明 土製品6が存した。



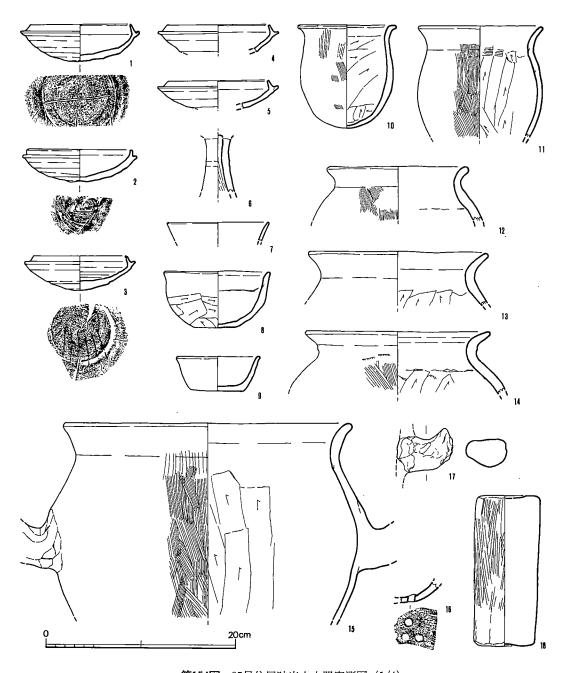
第152図 85号住居跡カマド対面土壙実測図 (1/30)



- 153 -

出土遺物 (図版89, 第154図)

床面遺存のものは前述カマドとその対面土壙周辺のみである。埋土最上層より紡錘車1点が 出土し、他に不明土製品がある。埋土中の土器は多寡いずれとも言い難い。

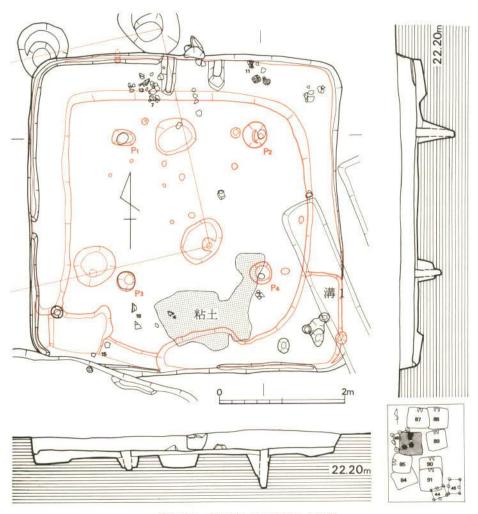


第154図 85号住居跡出土土器実測図(1/4)

須恵器 $(1 \sim 7)$ 1・2 はカマド対面土壙内,他は埋土中に存した。 6 の高坏脚は細身でや や長めのものとなる。 7 は壺であろう。他に甕の破片が 3 点ある。

土師器 $(8\sim18)$ 8・9 は一見精良品に見えるが粗製である。8の底部はケズリを施さない。 11がカマド周辺, $13\cdot15\cdot17\cdot18$ がカマド対面土壙の周辺出土である。15は或は甑II類になるのかもしれない。18の支脚は高さ15.7cm, $46.4\sim6.8$ cmで上下面ともやや窪んだ形状となり,外面には工具痕の稜が見られる。 (伊崎)

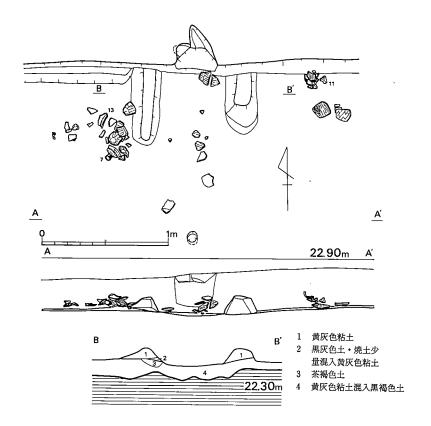
86号住居跡 (図版33·35, 第155図)



第155図 86号住居跡実測図 (1/60)

南西隅のごく一部を 85号住居跡に、東側を 近時の溝に切られてい る。また、46号掘立柱 建物とも重複し,この 住居の方が新しい。ほ ぼ正方形のプランで, カマド中心を通る主軸 はほぼ真北方向に近 い。カマド上面は粘土 が崩れ, その対面には 灰黄色粘土の広がりが あった。下層には壁周 辺掘り込みはあるが、 中央土壙はない。また, 46号掘立柱建物のピッ トが現れた。

カマド(図版38, 第156 図) 黄灰色粘土を 使った両袖が残存す。



第156図 86号住居跡カマド実測図 (1/30)

焚口幅・奥行とも55cm程である。壁外に溝状に突出している窪みは、煙出しの名残りであろう。 左袖横の手前側に土師器高坏・甕等が、内部と右袖から40cm余り離れて土師器の破片が出土した。

出土遺物 (図版89・90、第157図)

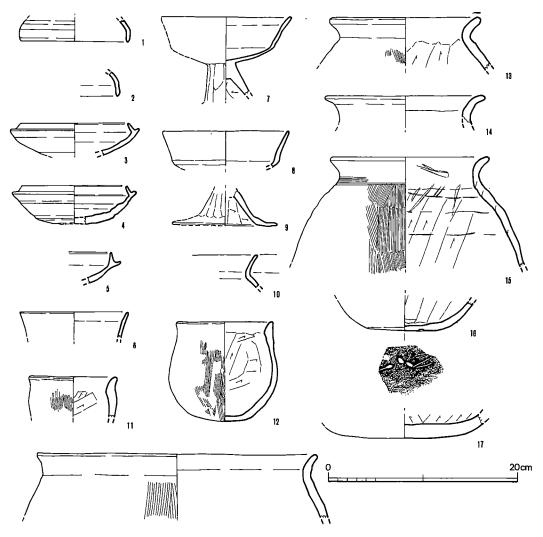
カマド周辺以外にはカマド対面粘土の周辺で床面から土器少しが出土している。埋土中に土 器はあまり多くないが、不明土製品と砥石1が存した。

須恵器 $(1 \sim 6)$ 6は壺であろうか。 4は床面の出土。

土師器 $(7\sim18)$ 7 はカマド左袖横に転倒していた高坏である。 $10\cdot11\sim13$ もカマド内外, $14\cdot18$ が床面の出土である。16は埋土中に存したが底部外面に籾痕 3 個が見られた。長径 $6.5\sim7.1$ cmで,うち 2 個には社の圧痕もあった。 たは完全に圧痕のあるものが長さ2.1cmである。 (伊崎)

87号住居跡 (図版33·35, 第158図)

南西からのびてきた溝1が南東へ直角に向きを変えて折れ曲がる所にあり、この溝に切られている。東辺は88号住居跡を切る。黒褐色〜黒灰褐色土を埋土としていた。東辺はかなりカマド寄りに傾いており、全体のプランは台形状となる。柱穴配置もそれに近い。カマド対面には黄色粘土が拡がっていた。下層の中央土壙は $P_2 \cdot P_4$ 間に寄っている。カマド対面に径20cm、深さ $3\sim10$ cm程の浅い円形ピットがあり、中に角礫 3 個が存した。その中には他に遺物はない。これは今までのカマド対面土壙とは区別して考えたい。 $P_3 \cdot P_4$ 間には後代の攪乱になる土壙があり、中に鉄器があった。



第157図 86号住居跡出土土器実測図(1/4)

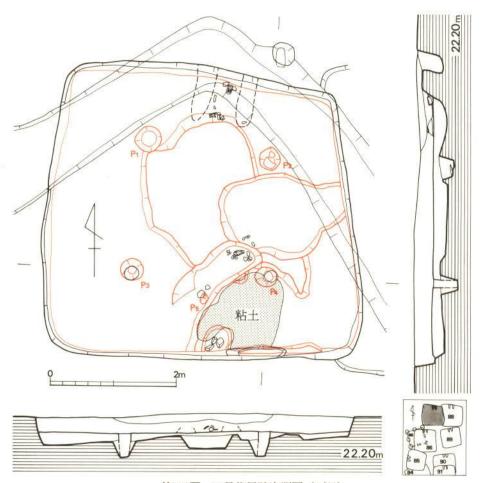
カマド (図版38, 第159図) 溝1と別のピットに切られて両袖ともに殆ど残っていない状態であった。しかし、痕跡から復すれば焚口幅 55cm、奥行70cm程と思われる。 火床中心より奥の方へ土製支脚が倒れて存し、焚口付近にも土師器片があった。

出土遺物 (図版90, 第160·164図)

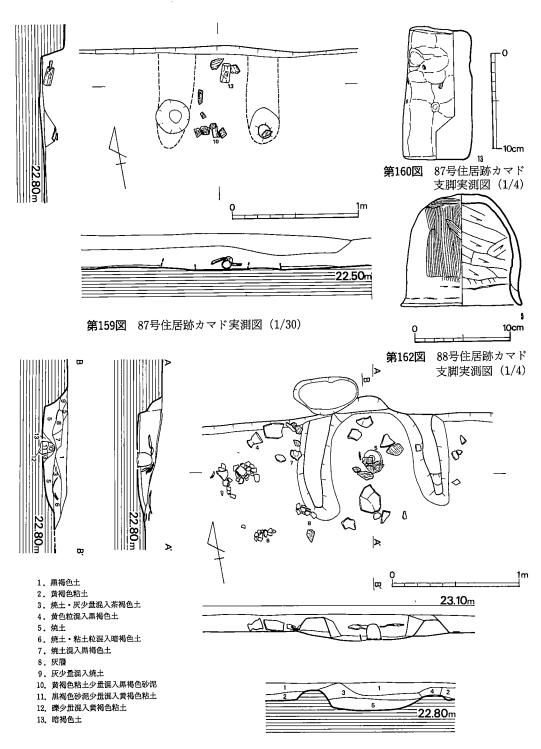
カマド内以外で床面に遺存した遺物はなかった。全体の遺物量はあまり多くない。埋土中に 盤状土製品と不明土製品があった。

須恵器 $(1 \sim 3)$ 2は焼成あまく十分に発色していない。 3は平瓶の口頸部であろう。

土師器 $(4\sim13)$ $4\sim6$ は精良品である。6 は内外とも丹塗りを施す。7 は極めて小さいが手捏ではない。9 は底部に穿孔がある。 $5\cdot12$ が床下層,10はカマド内の出土である。13の支脚は高さ14cm,4 6 6 7 8 7 cmで円柱ながら五角形状となる。外表面に籾痕が多く見られるのは意識的に付けているのかもしれない。上端部には煤が付着している。 (伊崎)



第158図 87号住居跡実測図 (1/60)



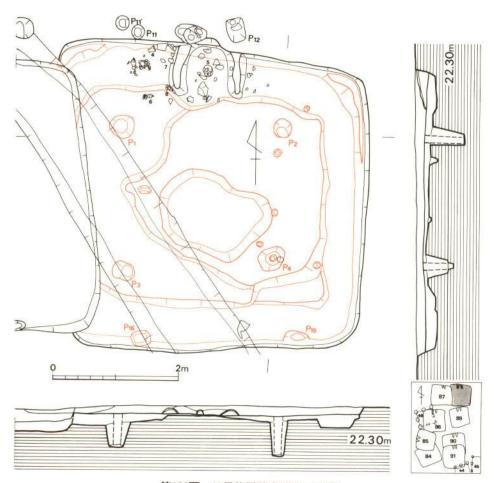
第161図 88号住居跡カマド実測図(1/30)

88号住居跡 (図版33·36, 第163図)

溝 1 と87号住居跡に切られる。87号住居跡と同様の埋土で,プランも東辺が短い事などよく似ている。主柱間エリアは良く固められていた。下層は一般的パターンをよく示している。P 3・P 4 の南側壁際に対応するようにピットがあるのは,何か意味があるのかわからない。

カマド (図版39, 第161図) 両袖ともに基部は検出面の高さまで残り、支脚も完形にて完存していた。焚口幅65cm、奥行85cmを測る。内部は支脚に転用した甕が奥から35cm程の位置にあり、その上には甕か甑かの破片が折れ重なっていた。その周辺にも破片が散乱している。左袖外側には壁際にプランデーグラス形の脚付埦が転がっており、周辺に土師器片の散乱が見られる。右袖外側にも土師器片があるけれども少ない。

出土遺物 (図版90, 第162·164図)

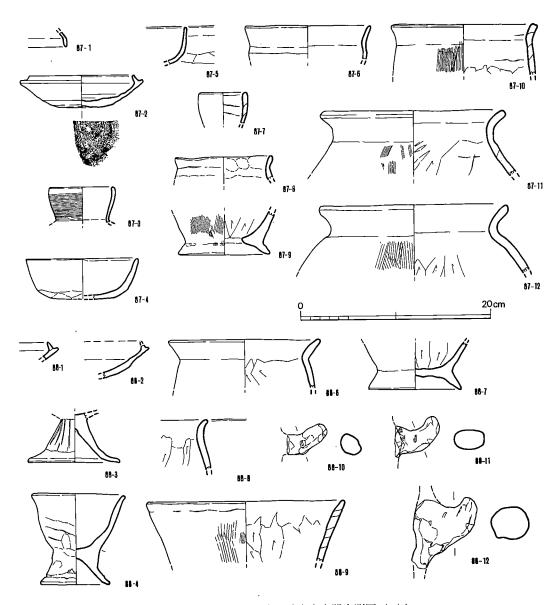


第163図 88号住居跡実測図 (1/60)

カマド内外を除けば遺物量は少ない。中央付近床面から手捏土器が斜倒立で出土している。また、埋土中より不明土製品、黒曜石片、サヌカイト片が出土している。

須恵器(1・2) 1は焼成あまく灰白色を呈す。

土師器 $(3\sim12)$ 4 は完形で胎土は粗い方に属する。 $4\cdot6\sim8$ がカマド横から出土した。 支脚転用の甕 (5) は中型の中で最小の部類に入る。器高は11.7cm。二次火熱を受けている。 (伊崎)



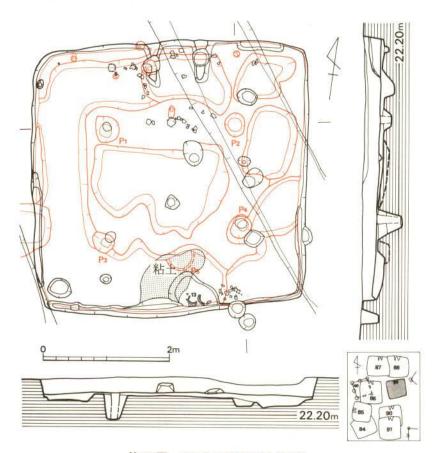
第164図 87·88号住居跡出土土器実測図 (1/4)

89号住居跡 (図版33·36, 第165図)

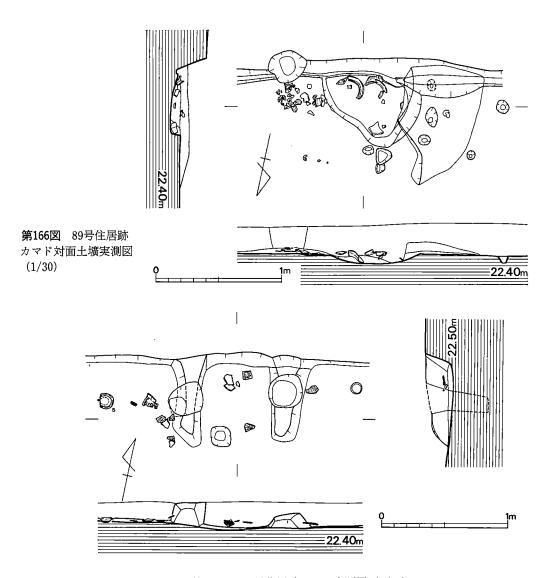
 $88 \cdot 90$ 号住居跡に挟まれた所に他と重複することなく単独で存するが,溝 1 と近時の溝に一部を切られている。この近隣では85号と同じく小さめの住居である。壁小溝は一部にしか存しない。カマド対面には黄色粘土と土壙があった。下層は東側が不規則であるが,それ以外は一般的パターンを示す。 P_6 も存した。なお,西壁南寄りの下層に15号土壙があった。

カマド対面土壙(図版40,第166図) 80×55cm程の不整楕円形で、深さは8cm位しかない。西側から土壙上面にかけて黄色粘土が存するが、この粘土は土壙全面を覆ってはいない。なお、床面直上で粘土との間に黒灰色土が帯状に入っている。土壙内には須恵器破片、土師器甕片、砥石1が存した。土壙外の東側床面に土師器片が散乱している。

カマド(図版38, 第167図) 右袖上面を溝1が走り、両袖とも中程をピットが切っている。焚口幅55cm、奥行65cmを測る。内外に土器片が見られたが、左袖より50cm程離れて須恵器坏身がすえ置かれた状態で出土している。



第165図 89号住居跡実測図 (1/60)



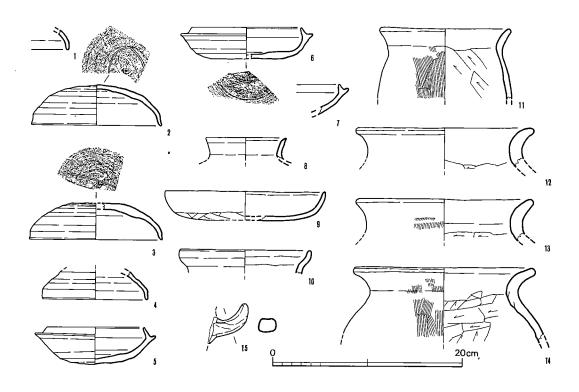
第167図 89号住居跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物 (図版90, 第168図)

カマド周辺とその対面土壙内外を除いたら床面上での遺物はない。埋土中からもそれ程多くは出土しなかったが、カマド上面に土玉が1個あった。

須恵器 $(1\sim8)$ 8 は坩になろう。 5 はカマド左側の出土である。埋土中出土の坏身が39号住居跡出土のものと接合している。

土師器(9~15) 9 • 15は精良土器である。10は□縁形態がやや特異である。11はカマド周辺、13はカマド対面土壙内出土である。 (伊崎)



第168図 89号住居跡出土土器実測図 (1/4)

90号住居跡 (図版33·37, 第169図)

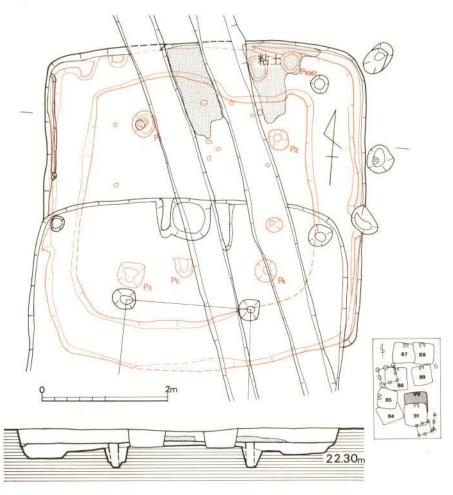
91号住居跡に切られ、近時の溝2条が斜めに縦断している。カマドはその粘土の一部が遺存するのみで、溝に切られていて原形をとどめない。床下層は周囲の掘り込みは整然と巡るが、中央土壙はない。

出土遺物 (第170図)

残存部が少ないので遺物も多くない。床面から手捏土器・同器台・鈴かと思える土製品が出土している。また、不明土製品がカマド周辺・床直上・埋土中から出土した。

須恵器(1) 埋土中の出土である。別に床直上出土の坏が45号住居跡埋土中出土のものと接合している。

土師器(2~6) 3 · 4 はカマド周辺, 2 · 5 は床直上の出土である。 (伊崎)



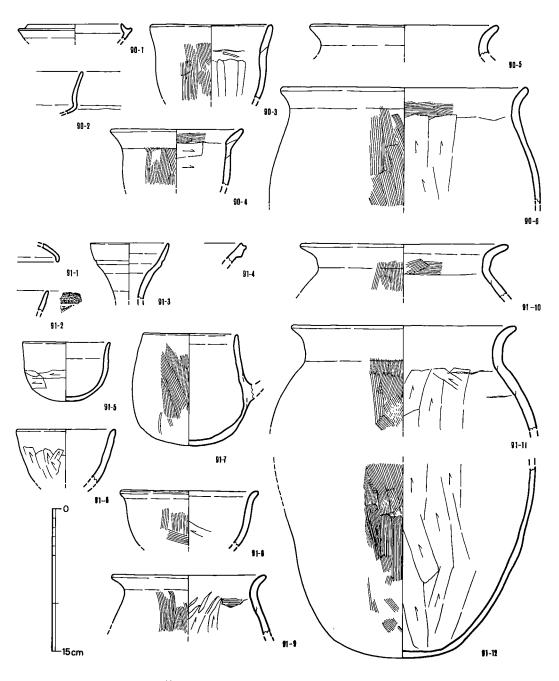
第169図 90号住居跡実測図 (1/60)

91号住居跡 (図版33·37, 第171図)

90号住居跡と方向をほぼ同じくして、それを切って営まれる。また、44号掘立柱建物をも切っている。90号住居跡と同様、カマド上面を2条の近時の溝の内の一本に切られていたが、部分的に残存していた。また、カマド対面に黄色粘土と土壙が存する。床下層は中央土壙もあって一般的形状を示す。なお、竪穴外でカマド対面土壙のすぐ外にP1234がある。須恵器大甕の破片が入っていたが、この住居との関連は判らない。

カマド対面土壙(図版40,第172図) 75×50 cmの略円形に近い。床面から深さ32cmを測ったが,44号掘立柱建物の P_1 との重複があるので,最下部はそれのものらしい。土壙内に落ち込んだ

状態とその西側にてまとまって土器が出土した。土壙内に土師器の大型甕,須恵器趣片,西側に土師器甕・盌があった。



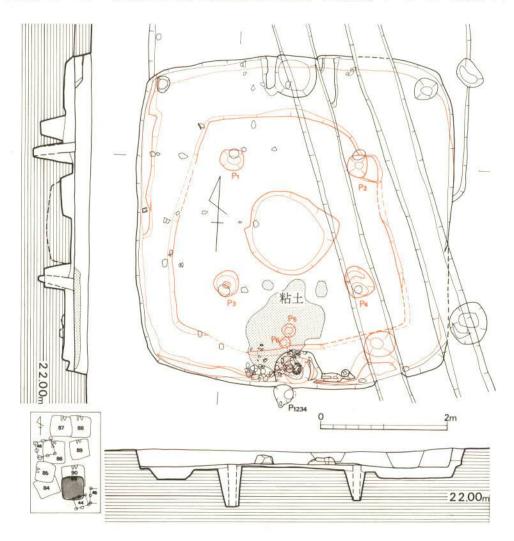
第170図 90·91号住居跡出土土器実測図 (1/4)

カマド(第173図) 前述の如く近時の溝に右袖一部と火床部分を切られているが、ほぼ全貌は 判る。奥行は70cm程を測る。周辺に若干の土師器片を見るのみである。

出土遺物 (図版91, 第170図)

床面にも若干の土器が存したが、全体に多くない。カマド前面西側の床面より5cm浮いて土 玉が、埋土中より手捏土器、不明土製品が出土した。

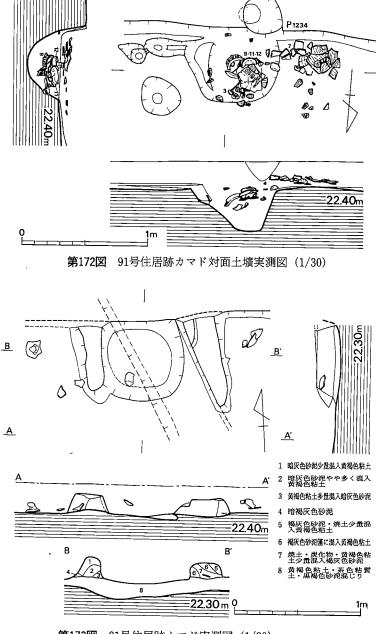
土師器(5~12) 5は薄手の極めて精良な土器である。6は粗製, 7・9・11・12はカマド



第171図 91号住居跡実測図 (1/60)

対面土壙周辺より出土した。11・12は同一個体と思われるが接合はしなかった。

なお、この住居との関連性は不明であるが、カマド対面土壙の所の壁面を切って存する P1234 には、 須恵器大甕の破片が入っていた。 深さ55cm程の最下部からやや浮いて石と、 その上に須



第173図 91号住居跡カマド実測図 (1/30)

恵器片があり,更に 少し間隔をおいて又 石とその辺に須恵器 片がの意味するとこ ったするとこ とを可だが,は81 号住居跡出土ものの, 同一個体と思われる。 (伊崎)

92号住居跡

(第174図)

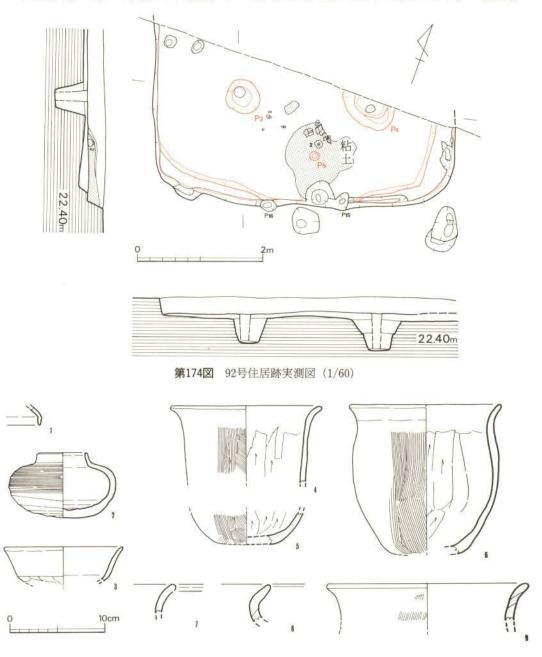
88号住居跡の北に あり、%は調査区外 にかかる。南壁中央 付近の粘土の存在か らして,カマドは北 辺にあったと推定出 来る。カマド対面の 粘土を切ってピット が掘られている。粘 土の下と P₃ · P₄ の中間から土器が出 土した。下層は掘り 込みは巡っていな い。粘土下に Psが ある。 P₃ • P₄の 掘 り形は大きめである。

出土遺物 (図版91, 第175図)

カマド対面粘土の下から出土した以外に遺物は少ない。埋土中に土玉1個があった。

須恵器(1・2) 2は床面出土の坩で正立に置かれていた。蓋付で焼成した痕が判る。

土師器 $(3\sim 9)$ 3はカマド対面, $4\cdot 7$ が床下層,他は埋土中の出土である。 (伊崎)



第175図 92号住居跡出土土器実測図 (1/4)

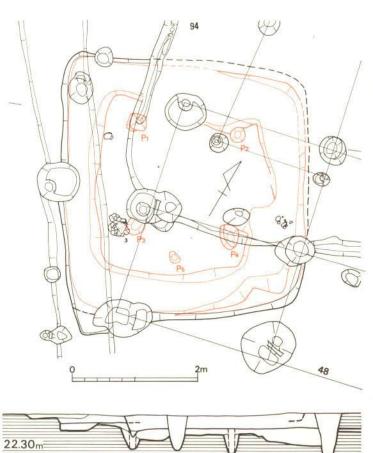
93号住居跡 (図版41, 第176図)

94号住居跡と溝1に切られ残存状態はあまりよくない。48号掘立柱建物もこの上に営まれていた。復原してみた東辺は西辺より短く、平面形は台形プランとなる。カマドは北辺にあったものとみてよかろう。

出土遺物 (図版91, 第177図)

残存部の少ない事もあって遺物は少ない。 床面では P_3 のそばに土師器甕が存した。また、埋土中より不明土製品、黒曜石剝片が出土している。

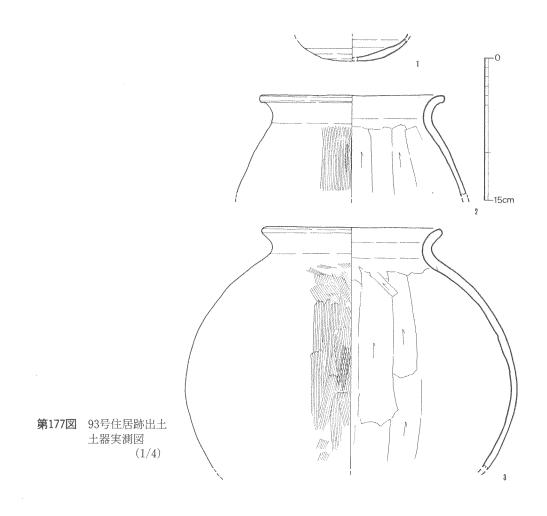
須恵器(1) 埋土中の出土である。別に埋土中の坏身片が、48号掘立柱建物の P8, P1033

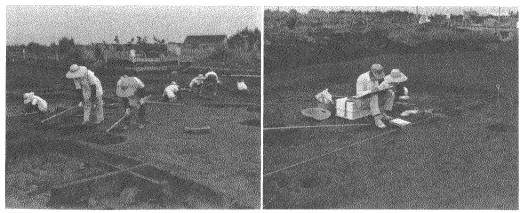


出土品と接合している。 また,甕片1点も出土し ている。

土師器 (2・3) 3は 床面出土で P₃のそばに あった。胴がかなり張っ て特異である。 (伊崎)

第176図 93号住居跡実測図 (1/60)



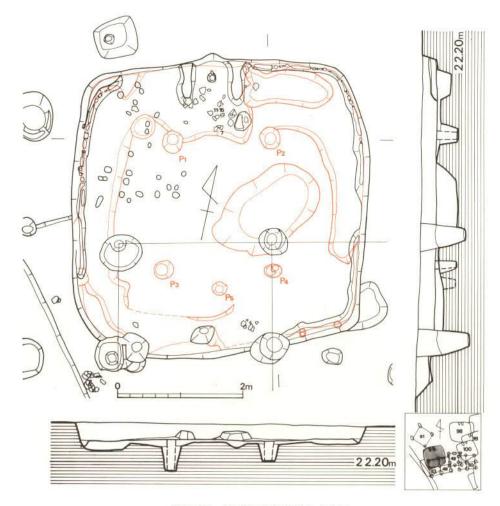


第178図 調査中スナップ③

94号住居跡 (図版41, 第179図)

93号住居跡を切り、48号掘立柱建物に切られる。 P_1 はやや東に寄っている。カマド中央を通り、 P_6 を横切るラインがこの住居の主軸となる。 P_1 の周辺に直径 $5\sim10$ cm程で深さが10 cmに満たない小ピットが20数個検出された。この住居に伴っていた何らかの施設の痕と考えたのであったが、いささかの不安もある。壁小溝は北と西のコーナー部分にて小ピットが見られる。下層の中央土壙は東に寄る。

カマド (図版41, 第180図) 焚口幅60cm, 奥行70cmを測る。奥から30cm弱の火床面に径13~15 cmの小ピットがあり、焼土が入っていた。支脚の抜き跡と思われる。焚口前面に土師器片、右袖外側基部付近に手捏土器 2個, 周辺に不明土製品 2が存した。なお、カマドの構築は黄色粘



第179図 94号住居跡実測図 (1/60)

土を使ってなされているが、その土は地山と同一 とみてよい。

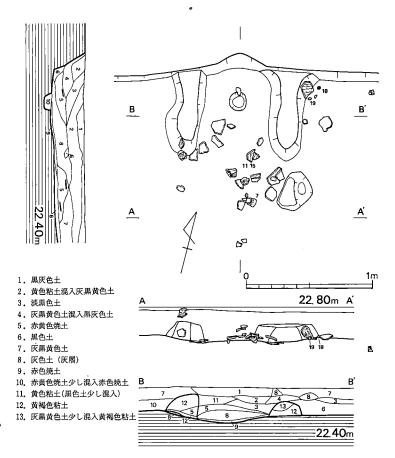
出土遺物

(図版91,第181図)

床面にも遺物少なく, 全体量は多くない。埋土 中にて把手状土製品1, 不明土製品・手捏土器1, 下層で安山岩の剝片1が 出土した。カマド横に手 捏土器が存したことは前 記のとおりである。

須恵器 $(1\sim5)$ 4は 坏蓋としてもよいが,や や小ぶりなので一応坩蓋 にしておく。 2 はカマド 周辺, 4 は下層出土。他 に甕片 2 があった。

土師器(6~17) 6~ 8は極めて精良な土器で ある。9は粗製。16は頸



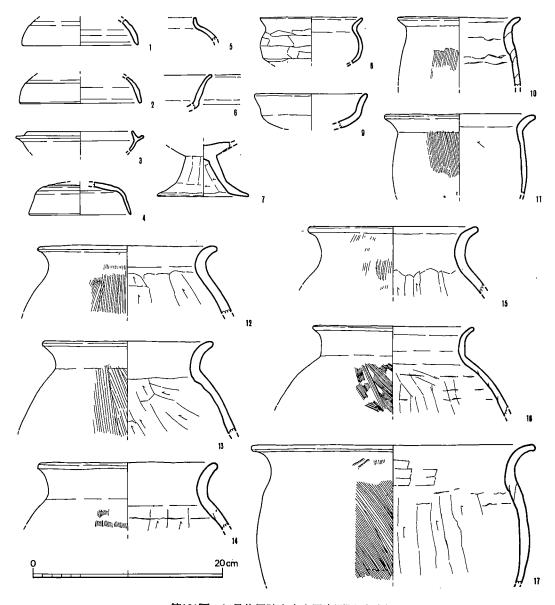
第180図 94号住居跡カマド実測図 (1/30)

部が直に立上っていて特徴的である。 $7 \cdot 11 \cdot 15$ がカマド近辺,10が床面の出土。 (伊崎)

95号住居跡 (図版42·43, 第182図)

96・101号住居跡を切り、97~99号住居跡に切られている。柱穴配置もカマドも全体に東寄りに見られる。下層では周囲の落ち込みは全周するが中央土壙はない。

カマド (図版44, 第183図) 左袖の2ケ所をピットに切られる。焚口幅35cm, 奥行72cmで火 床部がやや狭い。奥から35cmの所に土師器甕を転用した支脚が底部を欠くものの残存していた。 それは、まず火床面上に黄色粘土で25cm程の範囲に、円錐台形状の台座とも言える部分をナデ



第181図 94号住居跡出土土器実測図 (1/4)

にて面をとってこしらえ、その上に甕がすえ置かれたものである。内外から他に土師器片が出 土している。なお、カマド本体は地山の粘土を使用している。

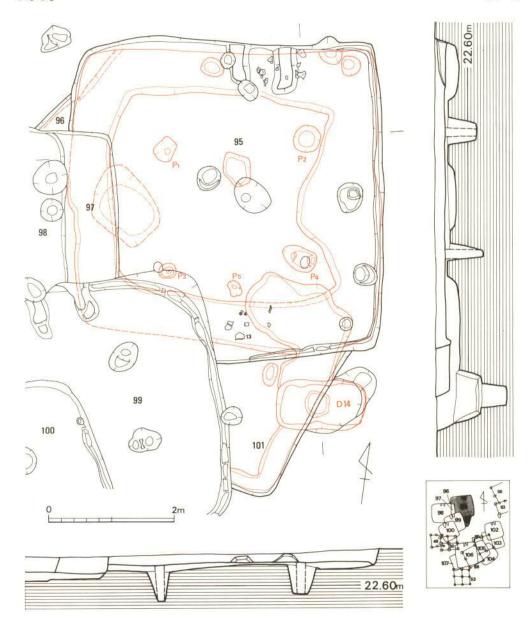
出土遺物 (図版91, 第184·187図)

少ない。カマド対面付近の床面とカマド周辺に少々あったのみである。埋土中から土玉1と

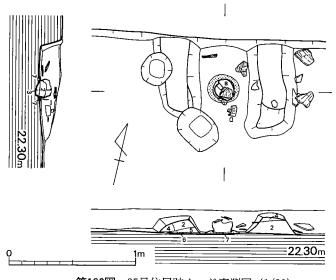
不明土製品が出土した。

須恵器 $(1 \sim 4)$ 4 は床面の出土である。 2 の焼成はあまい。

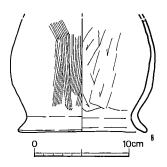
土師器 $(5\sim12)$ 5・6 は精良品。 7 の脚台は当初からの穿孔がある。12の甕の肩の張りのない形態は特異である。 6・11がカマド周辺,9 が下層,12が床面の出土。 8 はカマド支脚である。 (伊崎)



第182図 95·96·101号住居跡実測図 (1/60)



第183図 95号住居跡カマド実測図 (1/30)

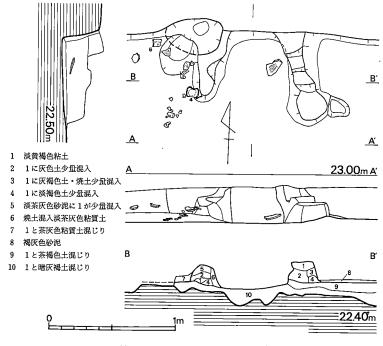


第184図 95号住居跡カマド 実測図(1/4)

- 1. 灰色土混入黄褐色粘土
- 2. 黄褐色粘土
- 3. 黑褐色土混入黄褐色粘土
- 4. 焼土混入黄褐色粘土
- 5. 3に焼土少量混入
- 6. 黒褐色土
- 7. 2の焼土化

96号住居跡 (図版42 · 43, 第182図)

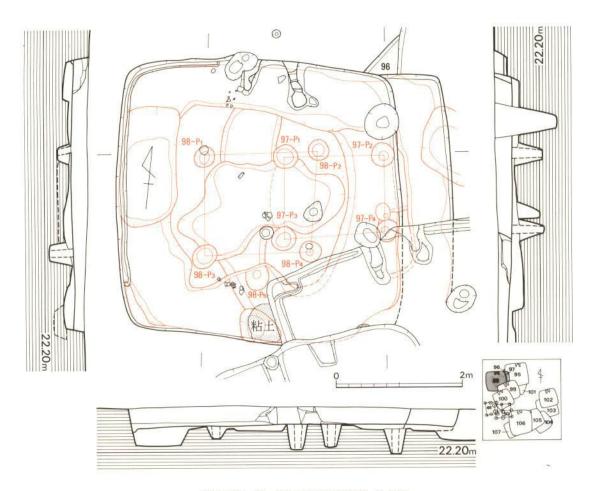
95・97・98号住居跡に切 られ、壁面80cmの長さを伺 い知るのみである。そこの 部分は床面まで15cm程しか なく, あまり深くない。 殆 ど全ての住居に於いて,上 面にて確認出来なくとも下 層の柱穴によっておおよそ の規模まで知り得たが,こ の住居は柱穴が不明であ る。住居自体が浅いので柱 穴も浅くて,新しい住居に よって痕跡なく削られてし まったものかとも考えられ る。95号住居跡の P₁・P 3 間の西にある下層の土壙 はこの住居に伴うものであ



第185図 98号住居跡カマド実測図 (1/30)

97号住居跡 (図版42·43, 第186図)

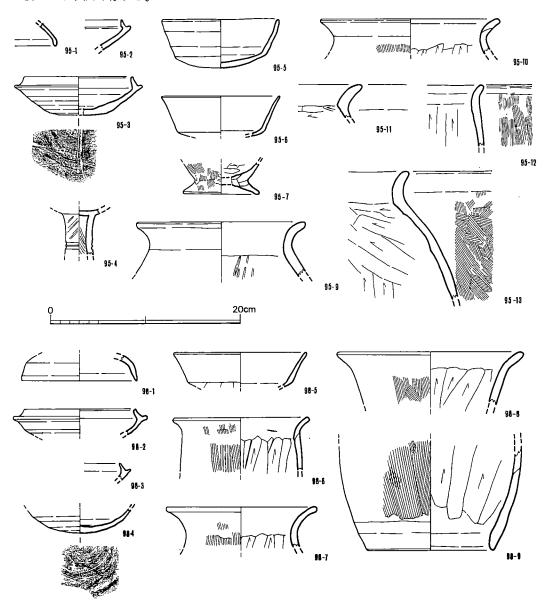
95・96号住居跡を切り、98・99号住居跡に切られている。発掘時の当初は98号住居跡との重複が判らなかった為、残存部はごく僅かながらも、そこから出土した土器(多分多くはないが、いくらかあったと思う)が98号住居跡のものと混入してしまった。しかし、下層から本来のあり方を復すると、規模は小さいものの主軸方向が98号住居跡と殆ど変わらないことより、この97号住居跡を廃してあまり時期を経ないうちに、98号住居跡へ建て変わったのではないかと考えている。 (伊崎)



第186図 97・98号住居跡実測図 (1/60)

98号住居跡 (図版42・43, 第186図)

 $96 \cdot 97$ 号住居跡を切り、99号住居跡に切られる。カマド対面には下層で検出した土壙があり、その上を粘土が全面ではないが覆っている。土壙は 50×65 cm程で深さ20cm。また、下層の掘り込みが全周する中で、 P_1 の西は長方形土壙状に深さ30cmばかり一段深くなっている。中央土壙はかなり広く存する。



第187図 95·98号住居跡出土土器実測図 (1/4)

カマド (図版44, 第185図) 左袖の基部がピットに切られている。焚口幅60cm, 奥行65cmを 測る。左袖外側に若干の土器片と不明土製品 1 が存したが殆ど床面より浮いている。

出土遺物 (第187図)

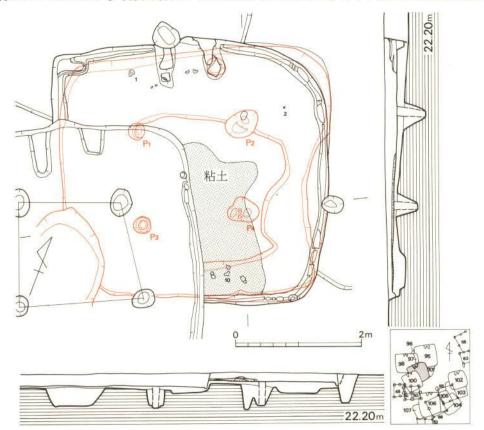
この住居も遺物は少ない。埋土中よりスラッグ 2, 床面より盤状土製品 1, 他に不明土製品が出土している。

須恵器 $(1\sim4)$ $1\cdot4$ はカマド左袖外側出土だが埋土中のものである。

土師器 (5~9) 5は精良品。8はカマド対面粘土付近の床面から出土した。 (伊崎)

99号住居跡 (図版42·43, 第188図)

95・97・98・101号住居跡を切り、100号住居跡に切られている。北西コーナー付近の壁小溝のあり方や下層での壁際の段、柱穴を見ると、確言は出来ないが位置を少しずらして建て直しが行われているらしい。規模は新旧ともに殆ど同じとみてよい。カマド対面にはかなり広い範



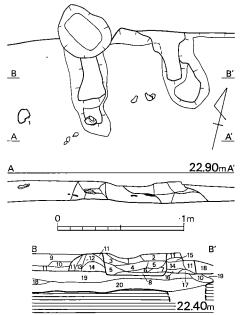
第188図 99号住居跡実測図 (1/60)

囲で黄色粘土が認められた。

カマド (第189図) 左袖基部を ピットに切られる。焚口幅50cm, 奥行70cm程で,内外に土器片,不 明土製品1を見るが皆床面から遊 離している。

出土遺物 (図版92,第191図) 全体にあまり多くはない。北西 コーナー付近の床面より2cm浮い て手捏土器が正立で,埋土中から 剣形土製品1,不明土製品が出土 している。

須恵器 $(1\sim3)$ 1はカマド 左で床面から10cm程浮いて出土した。2は P_2 の東にて壁との中間あたりで,床面より5cm浮いて正立で出土した。



第189図 99号住居跡カマド実測図 (1/30)

- 1,灰白色粘土少量混 入暗灰色粘質土
- 2. 灰色砂泥少量混入 淡白灰色粘質土
- 焼土少量混入暗褐 灰色砂泥
- 4. 灰白色粘土・焼土 少量混入淡灰色砂泥
- 5. 淡灰色粘土
- 6. 焼土少量混入褐灰 色砂泥
- 7. 淡灰色砂質性粘質
- 8. 暗褐色砂泥
- 9. 暗茶黄褐色砂泥
- 10. 淡茶黄褐色粘土
- 11. 暗褐茶色砂泥
- 12. 淡黄茶色粘土
- 13. 濁灰色砂泥
- 14. 淡黄灰白色粘土
- 15. 淡褐灰色砂泥 16. 烷土少量混入茶灰
- 10. 烷工少型混入余灰 色砂泥 17. 暗白灰色粘土
- 18. 黄褐色粘土プロッ
- 19. 灰褐色砂泥多量混 入茶色粘質土
- 20. 茶灰色砂泥少量混 入暗褐色砂泥

土師器 $(4\sim13)$ $4\sim6$ は精良品,10の口縁の屈折は著しい。 $11\cdot14$ がカマド対面粘土下の床面より出土した。 (伊崎)

100号 (図版42・43, 第190図)

99号住居跡・49号掘立柱建物を切り、50号掘立柱建物に切られている。この周辺でも小さめの住居である。主柱穴は P_4 がやや東に寄っていた。また、 P_3 は50号掘立柱建物の P_2 と重複する。カマド対面には粘土の拡がりがみられた。下層では中央土壙とカマド対面土壙とが連結した形状をなしている。

カマド (図版44) 残存状態はあまり良くない。火床面と周辺から不明土製品が出土した。

出土遺物 (図版92, 第191図)

カマド対面粘土の下より須恵器坩破片と不明土製品が、埋土中から不明土製品が出土した。 **須恵器** (1) 床面出土の坩である。他に、埋土中出土の坏身1片が98号住居跡出土のもの と、別の1片が108号住居跡付近出土の破片と接合した。また、甕の破片が3点ある。

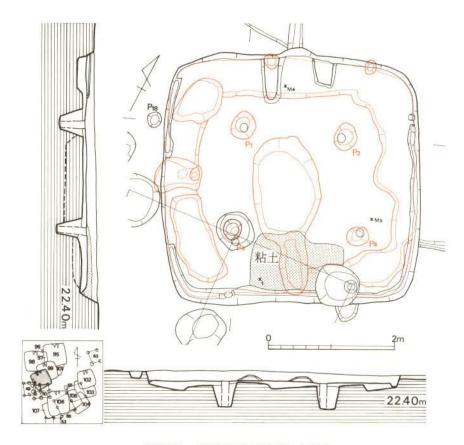
101号住居跡 (図版42·43, 第182図)

95・99号住居跡に切られ残りが悪い。加えて、96号住居跡と同様にこれも柱穴が不明であったため本来の規模を復しきれない。ただ、95号住居跡との切合いからすれば東壁の延びが 4 mを越えることはなく、恐らく 1 辺3.5m \sim 3.7m程の大きさであったろう。なお、東壁に半分かかって下層から14号土壙が検出された。

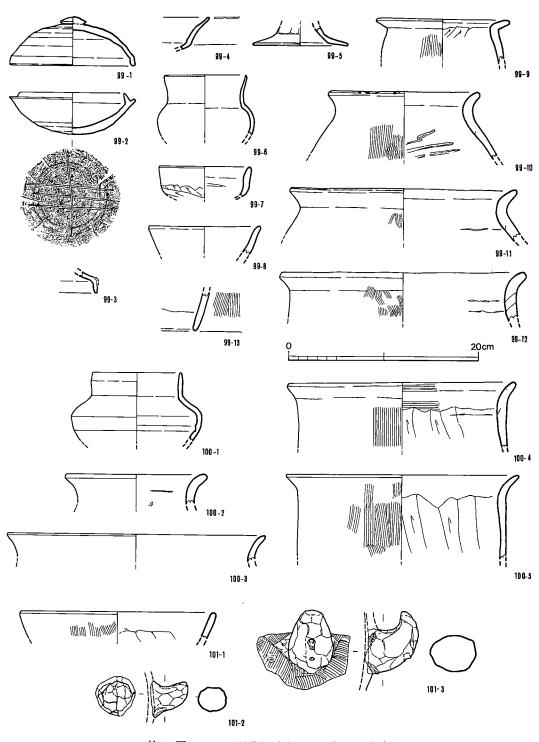
出土遺物 (第191図)

ごく僅かしかない。須恵器は坏身1点があり、 $95 \cdot 98$ 号住居跡出土品と接合している。埋土中に不明土製品があった。

土師器 $(1 \sim 3)$ 1は鉢になるものか。 3 には孔が 2 個あり, 2 には 1 個もない。 $1 \cdot 2$ が床下層, 3 が床面の出土。 (伊崎)



第190図 100号住居跡実測図 (1/60)



第191図 99~101号住居跡出土土器実測図 (1/4)

102号住居跡 (図版42·45·46, 第192図)

103号住居跡を切って営まれる。ほぼ正方形プランで、カマドはやや東に寄っている。主柱間 エリアよりやや外側までの床面がよく踏み固められていた。下層はほぼ典型的パターンを示し ている。

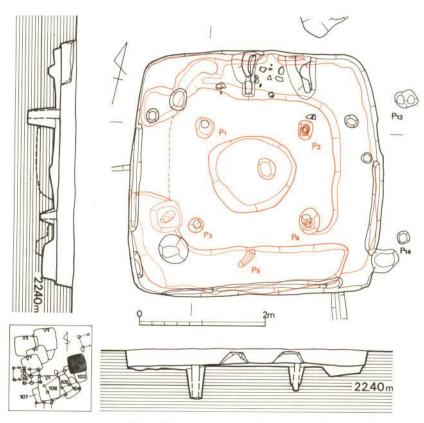
カマド (図版46) 焚口幅70cm, 奥行65cmを測る。本体は地山の黄色土を使って構築されている。内外に若干の土器片と手捏土器が存したのみである。

出土遺物 (第194図)

床面からの遺物はカマド周辺を除いて殆どない。カマド周辺より手捏土器・不明土製品が出土した。

須恵器 (1~3) 2はカマド周辺出土。3の坏身は口縁端によく面をとっている。

土師器 $(4\sim9)$ 4 は精良品。坏・高坏の孰れになるかは不明。 5 は甕でも特殊な小型品である。 7 がカマド周辺出土。 (伊崎)



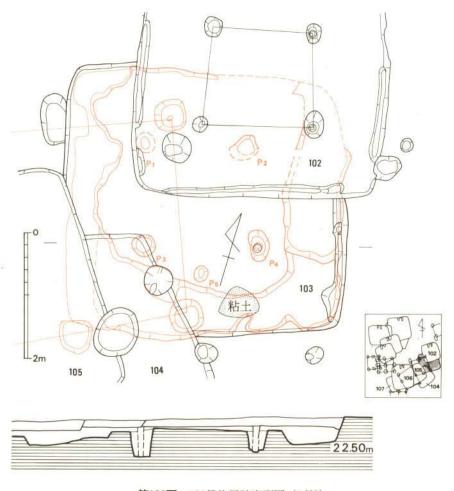
第192図 102号住居跡実測図 (1/60)

103号住居跡 (図版42・46, 第193図)

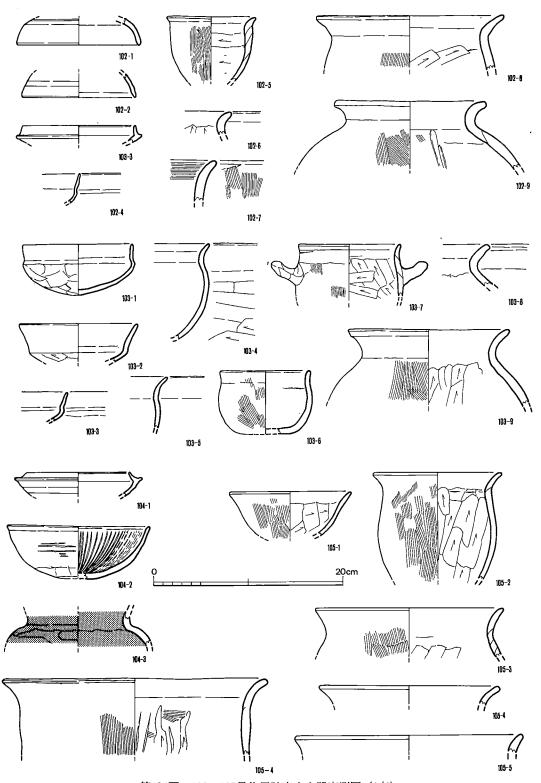
 $102 \cdot 104 \cdot 105$ 号住居跡に切られるが、各々の下層に現れた段等で本来の規模はおおよそ復原出来る。 $P_1 \cdot P_2$ はごく一部しか残存しなかったもののこの位置とみてよい。カマドは102号住居跡に切られた北辺に存したものであろう。その対面には僅かながら粘土が存した。

出土遺物 (図版92, 第194図)

須恵器は坏片ともう 1 片があるのみで図示出来ない。全体にごく僅かしか出土していない。 土師器 $(1\sim9)$ $1\sim5$ は精良品。 $4\cdot5$ は鉢になるか。別に,内面黒漆塗りの壺の肩部 が出土しているが,104号住居跡出土のものと同一個体と思われた。6 は粗製の鉢。7 は復原口 径10.6cmの特殊な小型の甕であり,実用品とは言いかねる。5 が床下層の出土。 (伊崎)



第193図 103号住居跡実測図 (1/60)



第194図 102~105号住居跡出土土器実測図 (1/4)

104号住居跡 (図版42·46, 第195図)

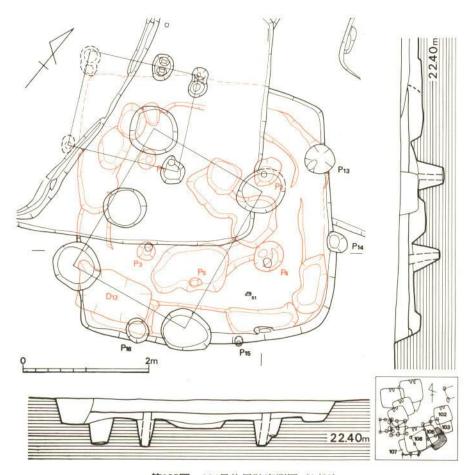
103号住居跡を切り105号住居跡に切られる,あまり大きくない住居である。柱配置はかなり横長プランとなる。カマドは北辺に存したものと思われる。54号掘立柱建物にも切られる。なお,下層には65・66号掘立柱建物のピット,13号土壙が存した。

出土遺物 (第194図)

少ない。 P4 の南側床面より砥石1が出土した。

須恵器 (1) 坏身1が存するのみである。外面灰被りで焼成はよい。

土師器 (2~4) 2の城は精良品で、内面に放射状、外面に横方向の暗文をもつ。3の壺も精良品で、内外とも黒漆を塗っている。2・3ともに特殊品といえる。2・4は床下層から出土した。 (伊崎)



第195図 104号住居跡実測図 (1/60)

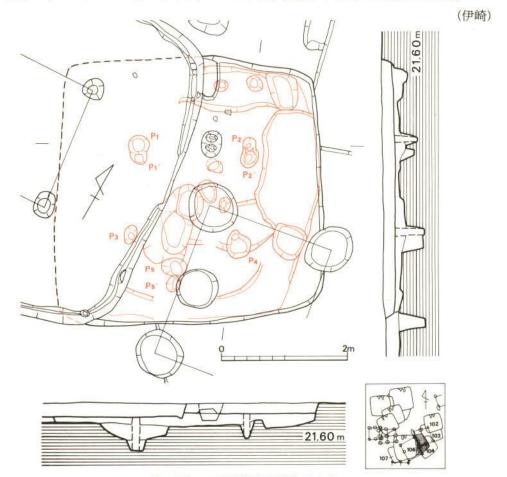
105号住居跡 (図版42·46, 第196図)

 $103\cdot 104$ 号住居跡を切り,106号住居跡に切られる。カマドは右袖部分が60cm程残るのみで全容は不明である。検出時に明確に確認しえなかったが,下層にて検出しえた主柱穴は $P_1 \cdot P_2$ に於いて 2 連となり, $P_3 \cdot P_4$ 間に見られるピットは普通は 1 個なのが,この場合 $P_5 \cdot P_5$ の 2 個を見るので,建てかえがあったものと考えられる。その場合, P_1 $\cdot P_2$ $\cdot P_3$ $\cdot P_4$ $\cdot P_5$ のピットをめぐるプランから, P_1 $\cdot P_5$ $\cdot P_5$

出土遺物 (第194図)

極めて少なく、須恵器は埋土中に坏・甕の破片があったのみである。他に埋土中に不明土製品があった。

土師器 $(1\sim5)$ 1は鉢になろう。 $2\sim5$ の甕は皆細身である。 2 が床下層出土。



第196図 105号住居跡実測図 (1/60)

106号住居跡 (図版42・45・46, 第197図)

104・105・107号住居跡を切り、50号掘立柱建物に切られる。東辺に比して西辺が長く、台形状でやや縦長のプランとなる。下層に66号掘立柱建物のピットがある。

カマド (図版47, 第198図) 右袖が短くなっているが、焚口幅35cm, 奥行75cm程に復される。 支脚は既になかったが、内外から多くの遺物が出土した。左袖外側には浅い土壙状の落ち込み



第197図 106号住居跡実測図 (1/60)

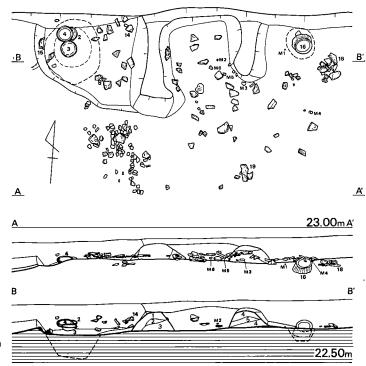
があり、その中に須恵器3個と土師器があった。須恵器は2個が坏蓋・身のセットで完形であ り,他の1個は坏蓋の半欠品である。これらの直下に径45~50cm,深さ20cmのピットが存した。 左袖前面には土師器細片が床面にこびりついた如き状態で出土した。火床面から焚口にかけて は土玉・不明土製品が床面からやや浮いて出土している。右袖外側には30cm離れて径20cm, 深 さ10cm程の小ピットがあり、その中に土師器甕が口縁を上にして存した。そのすぐ横の床面に 土玉1個があった。

(図版92, 第200図) 出土遺物

この近隣では多めの出土量である。ことにカマド周辺が多かった。埋土中に鉄鏃片2,スラッ グ1,手捍土器3,不明土製品3が,カマド対面の床面直下に手捏土器1,そしてカマド内外 に土玉2があった。

須恵器 (1~9) 2~4がカマド左袖外側出土である。3・4は完形。4は口縁端部を殆 ど全周にわたって打欠いている。他に甕の破片も数点ある。

土師器 (10~20) 11 は埦になるものか。12も 埦になろう。13は特に小 型の甕である。20は数少 ない甑II類のひとつであ る。13~16、18・19がカ マド内外から出土した。 (伊崎)



- 1 黄褐色粘土 (焼土化)
- 2 黄灰褐色粘土
- 3 黒色土
- 4 灰黄色土
- 5 暗黄褐色粘土(やや焼土化)



第198図 106号住居跡カマド実測図 (1/30)

107号住居跡 (図版42・45, 第199図)

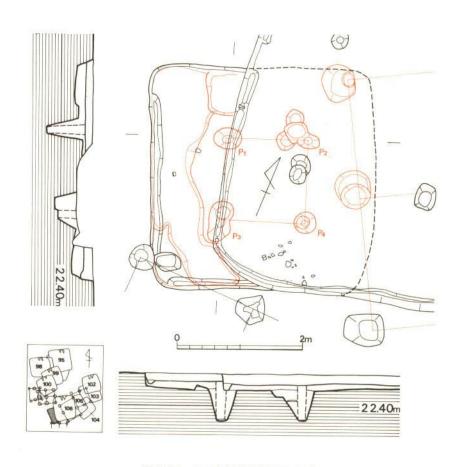
106号住居跡に約%を切られた小型の住居跡である。53号掘立柱建物にも一部切られている。カマドは北辺に存していたものだろう。下層にて検出した主柱穴は $P_2 \cdot P_3$ の所が重複しているので、建て直しがあったものかもしれない。主柱間エリアはかなり狭い。

出土遺物 (第200図)

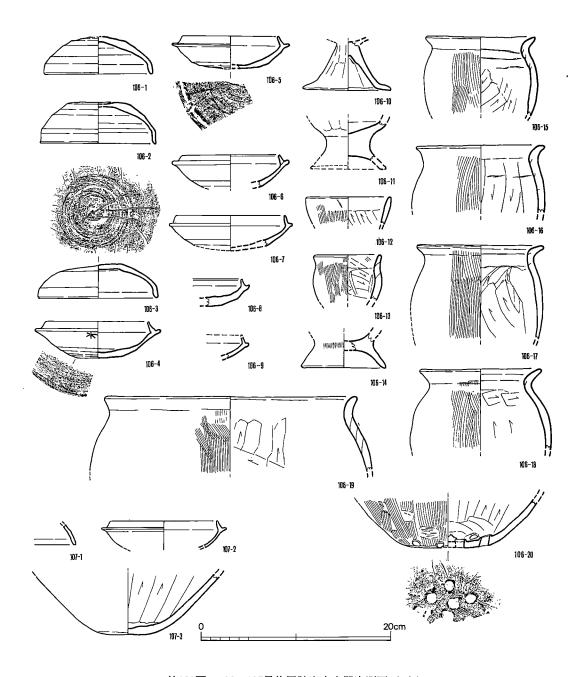
ごく少量しかない。埋土中に不明土製品1がある。

須恵器 $(1 \cdot 2)$ ともに焼成良好である。2はスマートな器形になりそうである。

土師器 (3) 二次火熱を受けるとともに、外面に煤が付着している。 (伊崎)



第199図 107号住居跡実測図 (1/60)



第200図 106·107号住居跡出土土器実測図 (1/4)

108号住居跡 (図版48, 第201図)

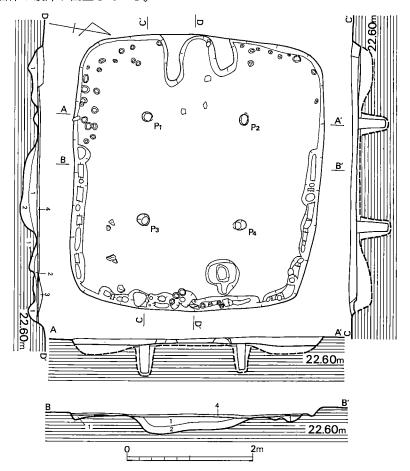
53号掘立柱建物のすぐ東に、切合い関係を持たずに単独に存在する。やや丸味を帯びた方形プランを呈する。よく踏み固められた貼床面には4本の主柱痕が残る。平面的には確認していないが、貼床面下には中央土壙、掘り込みが存在する。また、壁小溝部分には径 $5\sim10$ cm程の小ピットが不規則に並ぶ。

カマド (第202図) 西壁のほぼ中央に付設される。住居の壁高が10cm前後と浅く,カマドの 遺存状態も良好ではない。支脚は検出していない。

出土遺物 (図版93, 第203図)

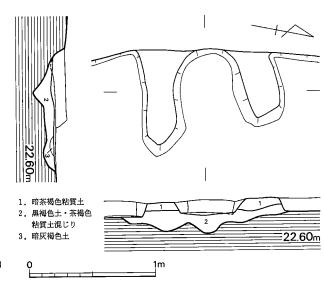
須恵器 7 個体分, 土師器36個体分の破片と不明土製品が出土している。

須恵器 $(1\sim6)$ 全て埋土中からの出土である。互いに接合しないが、 $67\cdot68$ 号住居跡から 6 と同一個体の破片が出土している。

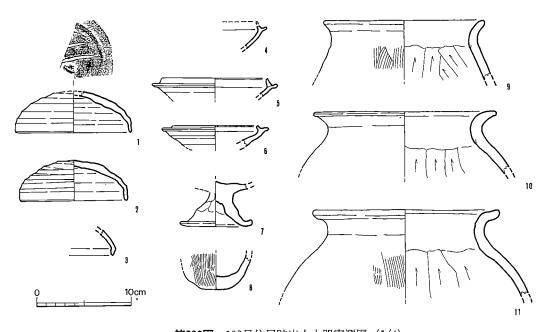


第201図 108号住居跡実測図 (1/60)

土師器 (7~11) 10は本住居 跡外の包含層から,他は埋土中か らの出土である。8だけは精製さ れた胎土の土器である。(児玉)



第202図 108号住居跡カマド 実測図(1/30)



第203図 108号住居跡出土土器実測図 (1/4)

109号住居跡 (図版48, 第204図)

過半が調査区外にのび、110号住居跡を切っている。壁高は10cm前後で遺存状態は悪い。床面は踏み固められ、 P_2 の主柱痕が明瞭に残る。

カマド 北西側の壁に付設されている。遺存状態は良くない。

出土遺物 (第207図)

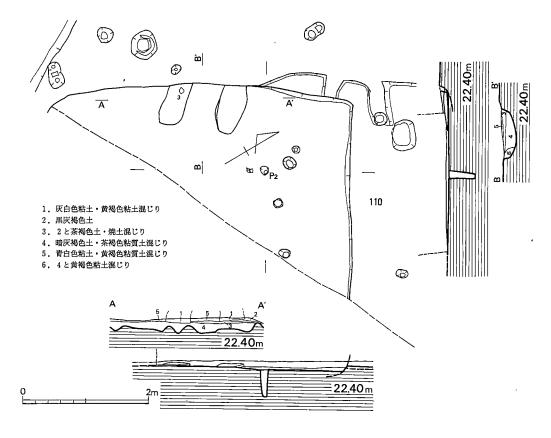
20点の土器と不明土製品が出土している。その殆どは埋土中出土である。

須恵器 (1・2) 全出土土器の1割を占める。全て埋土中からの出土である。

土師器 (3・4) 甑の破片資料でカマド内からの出土である。 (児玉)

110号住居跡 (図版48, 第205図)

109・111号住居跡に切られ、一部が調査区外にのびる。壁高も5cm程しかなく、遺存状態はよくない。床面は踏み固められており、109号住居跡に切られながらも4本の主柱痕がよく残っている。床をはずした調査は出来なかったので壁沿いの掘り込みは不明だが、東北壁に偏して中央土壌を検出している。



第204図 109号住居跡実測図 (1/60)

カマド (第206図) 壁高は低く,また左袖を109号住居跡に切られている為,残りは悪く支脚も遺存しない。

出土遺物

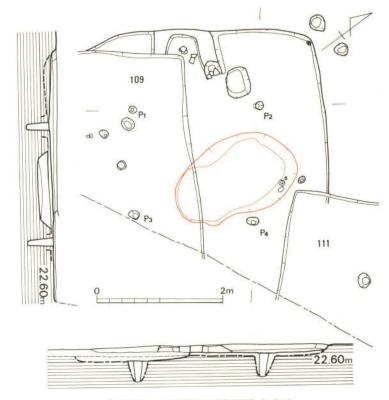
(図版93, 第207図)

住居跡の遺存状態が 悪い為,出土遺物は少 ない。が,カマド右袖 外側より土製の模造鏡 が1点と別に不明土製 品が出土している。

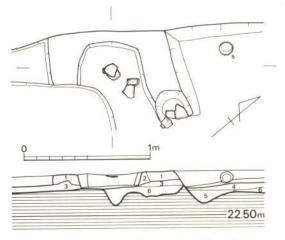
須恵器 (1~4)

2 は床面下層埋土より,他は埋土中からの 出土である。いずれも 小片で4 は反転図であ

土師器 (5~7) 5 はカマド右袖横, 6 は床面から, 7 は埋土 中からの出土である。 5 は図の状態で略完形 で,6 は反転図である。 両者とも精製土器である。 (児玉)

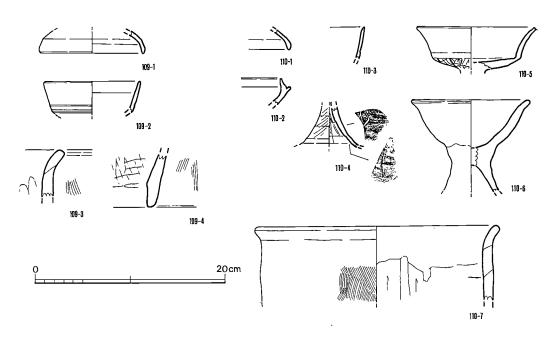


第205図 110号住居跡実測図 (1/60)



第206図 110号住居跡カマド実測図 (1/30)

- 1. 茶褐色粘質土
- 2. 1に焼土混入
- 3. 灰褐色土
- 4. 1と3の混じり
- 5. 焼土・暗灰褐色土混じり
- 6. 黒褐色土・茶色粘質土混じり



第207図 109·110号住居跡出土土器実測図 (1/4)

111号住居跡 (図版48・49, 第208図)

南半分は調査区域外にのび、110・112・133号住居跡を切り、113号住居跡に切られる。床面は踏み固められ、主柱痕を検出した。壁高は10cm前後で遺存状態は良くない。

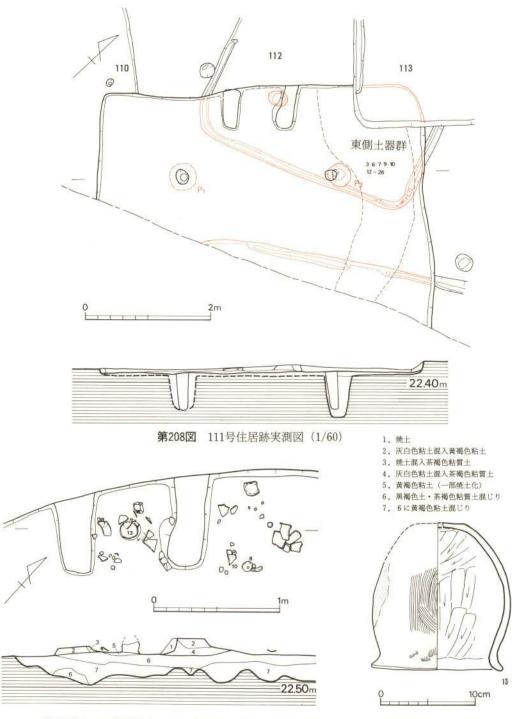
カマド (図版49, 第209図) 北西壁のほぼ中央に設置されている。上面が削平され、袖は高さ5cm前後しか遺存しないが、カマドのほぼ中央に、壁から約35cm離れた部分で、甕を倒立させた支脚が原位置を保って遺存していた。この甕は破片を接合してほぼ完形となり、体部は煤が付着し、口縁部は一部剝落している。また、カマド内及び東側から多量の土器が出土した。

出土遺物 (図版93・94, 第210~212図)

70個体分程の土器が出土し、埋土からの出土品が過半を占めるが、カマド周辺から良好な状態で20個体程の土器が出土した。他に手捏の器台、鉄器、不明土製品が名1点出土している。

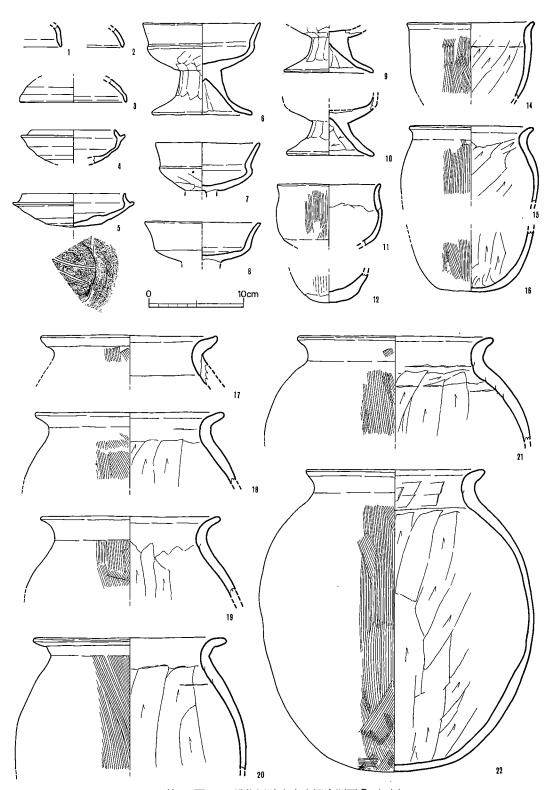
須恵器 $(1\sim5)$ 出土土器全体の14%を占める。2 はカマド内,3 はカマド東側の床面上から出土したが,他は埋土内からの出土である。

土師器 $(6\sim28)$ $19\cdot28$ は出土位置を特定出来ないが,他はカマド内及びカマド東側の土器群からの出土品である。 $6\sim11$ は精製土器である。 (児玉)

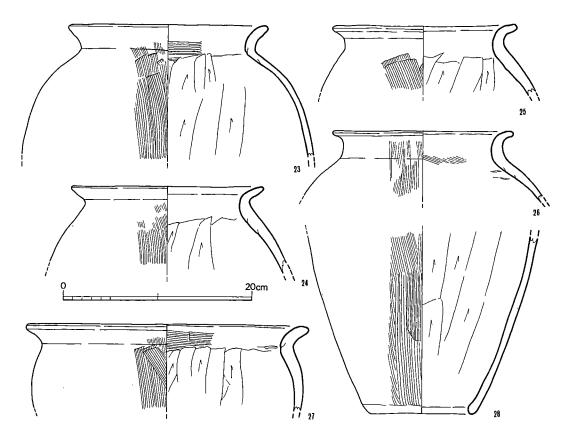


第209図 111号住居跡カマド実測図 (1/30)

第210図 111号住居跡カマド支脚実測図(1/4)



第211図 111号住居跡出土土器実測図①(1/4)



第212図 111号住居跡出土土器実測図② (1/4)

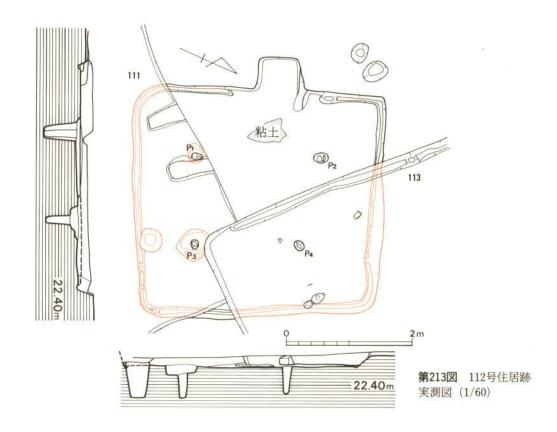
112号住居跡 (図版48, 第213図)

調査区中央の南側に存在し、 $111 \cdot 113$ 号住居跡にその過半を切られる。南北に幅広の略方形プランを呈し、カマド部分を除いて壁小溝が巡る。踏み固められた貼床面に 4本の主柱痕を検出した。一般的には 2本の主柱を結んだ線とそれに対応する壁(例えば $P_1 - P_2$ を結んだラインと西壁)はほぼ平行関係にあるが、 P_4 が南に偏っており、北壁との関係は平行にならない。床をはずしてないので床面下の状況は不明であるが、他の住居跡のそれと同様であろう。

カマド 西壁の中央よりやや北に偏した所にカマドを設置する。幅60cm, 長さ50cmの掘り方が壁から突出し, 左袖は不明だが右袖が掘り方から前面に30cm程のびる。

出土遺物 (第215図)

須恵器 2 個体分, 土師器17個体分の破片, 土製模造鏡 1 点が埋土中より出土している。



須恵器 (1) 埋土中からの出土で、小片の反転復原図である。蓋として図示したが、高坏の可能性がある。

土師器 $(2 \sim 4)$ 4 はカマド内,外は埋土中から出土した。いずれも小片である。

(児玉)

113号住居跡 (図版50, 第214図)

 $111 \cdot 112$ 号住居跡を切り、平面プランは菱形に近い方形を呈する。踏み固められた貼床面で、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4$ より主柱痕を検出した。本遺跡の住居跡では一般的にカマドの対面に崩落した状態の粘土が存在するが、本住居跡の場合はそうではなく、カマドに向かって右壁(南東壁)側に存在する。この粘土は一般的には壁に接して床面上に崩落した状態で流れ込んでいるが、本住居跡の場合、右壁から離れて存在する。本遺跡の住居廃棄時に於けるこの粘土の一般的な在り方と、先述した80号住居跡の"入口"と想定した遺構との関係から、立野遺跡ではカマドの対面に粘土等を使用して住居内への"入口"を作ったであろうと想定する。本住居の場合は必ずしもその可能性を否定するわけではないが、粘土の出土状態が他の住居跡と異なり、"入口"

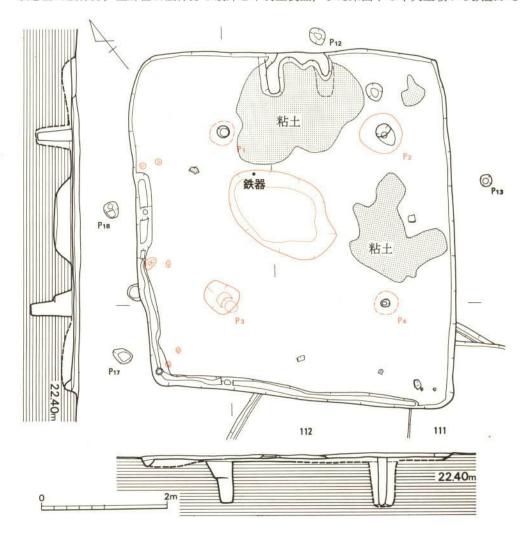
の想定位置はやはりカマドの対面であろうと思う。貼床下のほぼ中央に中央土壙が存在し、貼床をめくって全掘はしていないが、周壁に沿って掘り込みが巡ると思われる。

次に、住居の各壁の外側に、壁から $20\sim40$ cm離れて径20cm前後、深さ $10\sim20$ cmのピットが存在する($P_{12}\sim P_{18}$)。 これらは住居の平面プランに対して、ある程度の規則性を持って位置しているようである。

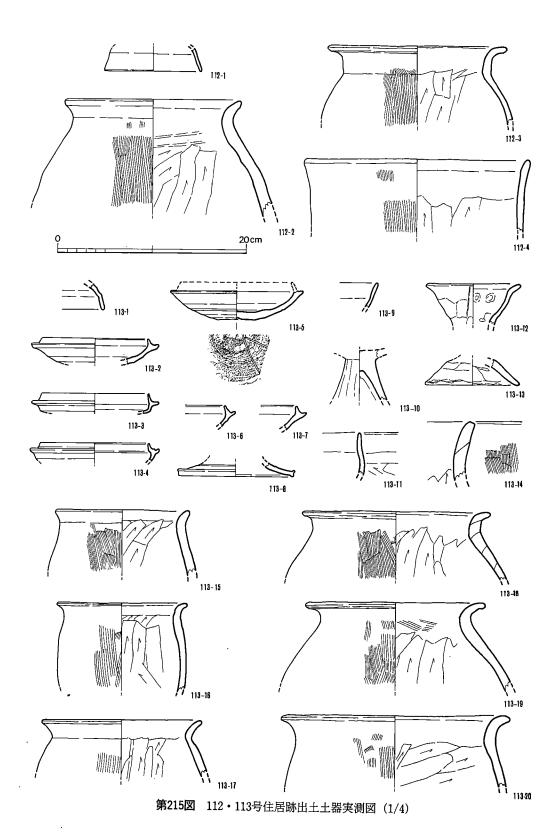
カマド 北東壁ほぼ中央に付設され、検出時には全面が粘土におおわれていた。

出土遺物 (第215図)

須恵器13個体分,土師器46個体分の破片と不明土製品,また床面下の中央土壙から鉄鏃が1



第214図 113号住居跡実測図 (1/60)



- 202 -

点出土した。

須恵器 (1~8) 全て埋土中からの出土で、小破片の為反転復原図である。

土師器 (9~20) 11・13・15はカマド内から,他は埋土中からの出土である。12・13・15・16は,或は支脚として使われたと思われる。10・11は精製土器である。 (児玉)

114号住居跡 (図版50, 第216図)

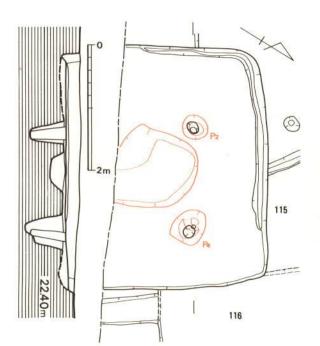
調査区東半部の南辺に位置し、南半が調査区外にのび、 $115 \cdot 116$ 号住居跡を切る。貼床面に $P_2 \cdot P_4$ の主柱痕を検出した。壁小溝は途中で途切れる。壁小溝はカマドの袖付近で途切れるのが普通で、また、本遺跡のカマドは大半が北或は西側に設置されており、それらの状況を 勘案して、カマドは南西壁に設置されたと推測する。

出土遺物 (図版95, 第220図)

出土土器は少なく, 須恵器 1 個体分, 土師器 7 個体分の破片を検出したにすぎない。

須恵器 (1) 埋土中から出土した、小片の反転復原図である。

土師器 $(2\sim4)$ $2\cdot3$ は埋土中、4 は床面下層からの出土品である。3 は支脚として使われたと思われる小型甕の底部である。 (児玉)



第216図 114号住居跡実測図 (1/60)



第217図 調査中スナップ(4)

115号住居跡 (図版50, 第218図)

南を114号、東を116号住居跡に切られる。柱配置よりみてほぼ正方形の平面プランを呈する と思われる。 P_2 を除いて主柱痕が検出された。壁小溝は断続的に存在する。

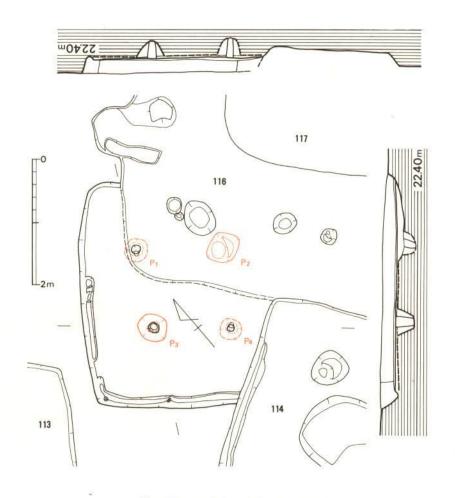
カマドは壁小溝の巡り方からみて、北東壁に設置されていたものと推測される。

出土遺物 (第220図)

須恵器7個体分,土師器10個体分の破片が出土している。

須恵器 (1・2) 埋土中からの出土で、小片の為反転復原図である。

土師器 $(3\sim6)$ 5 は床面下層から,他は埋土中からの出土である。全て反転復原図で, $3\cdot4$ は精製土器である。 (児玉)



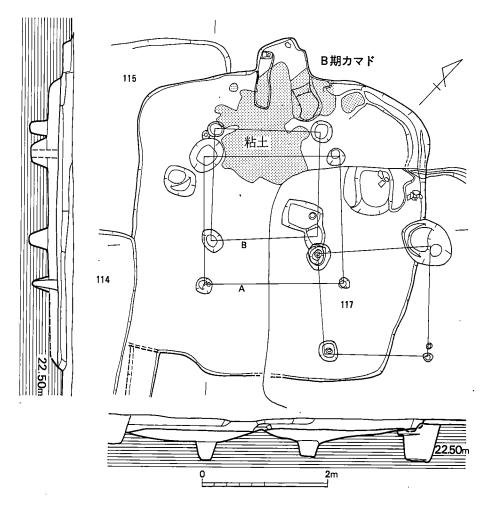
第218図 115号住居跡実測図 (1/60)

116号住居跡 (図版50, 第219図)

1軒の住居として調査を開始したが、床面で2軒分の主柱穴を検出し、2軒がほぼ重複し、やや北東側に移動して建て替えているのではないかと推測する。よって、古期の住居を116A、建て替えた住居を116B号住居跡とする(以下、A期、B期と略述する)。ただ、住居の平面プランは略方形を呈するという以外、正確な規模は不明である。

A期の住居は貼床が遺存し、 P_1 を除いて3本の主柱痕が残っていた。周壁についての詳細は不明である。また、カマドは北西壁に設置されていたが、B期の住居によって完全に破壊されていた。

B期は、主柱痕を検出出来なかった。A期の主柱穴配置と比して小型化し、正方形に近くなっ



第219図 116号住居跡実測図 (1/60)

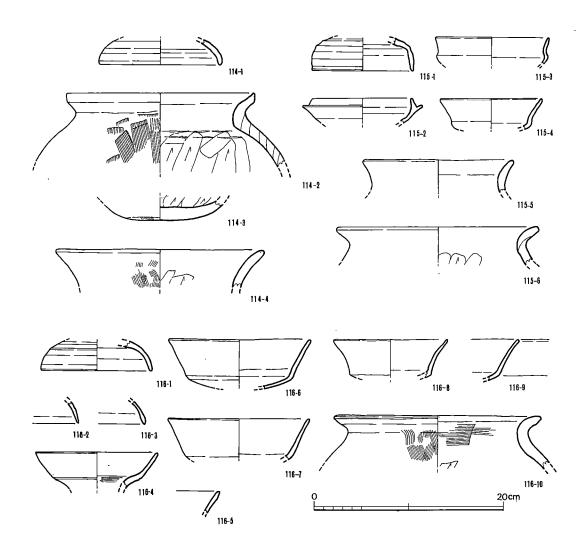
ている。カマドは北西壁に設置され、住居外に突出する。

出土遺物 (図版95, 第220図)

上記の理由で、出土遺物をA・B両期に分離出来ない。須恵器8個体分、土師器23個体分の破片と不明土製品が出土し、他に新しいものと思われる鉄器が2点出土している。

須恵器 (1~5) 全て埋土中からの出土で、小破片の為反転復原図である。

土師器 $(6\sim10)$ 9・10はカマド周辺出土だが,他は埋土中からの出土である。 $6\sim9$ は精製土器である。 (児玉)



第220図 114~116号住居跡出土土器実測図 (1/4)

117号住居跡 (図版50, 第221図)

116・134号住居跡を切り、プランは方形に近い不整形を呈する。切合いのない部分は壁小溝が走るが、他の部分では確認しきれなかった。貼床面で4本の主柱痕を検出した。カマド対面の粘土は検出していない。

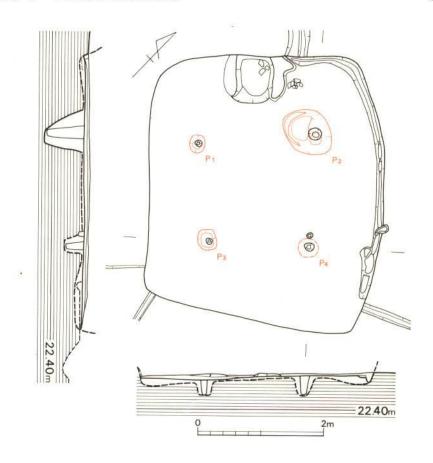
カマド 北西壁 (短壁) の中央よりやや南に偏して設置される。壁高が浅く遺存状態はよくないが、平面的には両袖がよく残っている。

出土遺物 (図版95, 第222図)

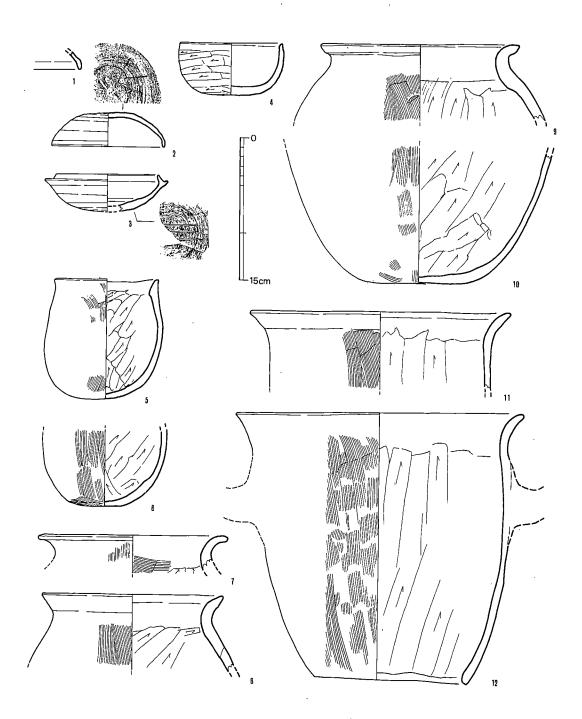
須恵器 6 個体分, 土師器32個体分の破片が出土している。

須恵器 $(1 \sim 3)$ 埋土中からの出土品である。2 だけは完形品で,他は小片である。

土師器 $(4\sim12)$ 12はカマド右床面から、 $8\cdot 9\cdot 11$ は床面下層から、他は埋土中からの出土である。 $5\cdot 6$ は支脚と推測される。 (児玉)



第221図 117号住居跡実測図 (1/60)



第222図 117号住居跡出土土器実測図(1/4)

118号住居跡 (図版51, 第223図)

調査区の東半部に単独に存在し、東壁を56号建物に切られる。貼床面に4本の主柱痕を検出し、カマドの対面には灰白色粘土が崩落した状態で出土した。床面下は、西に偏して中央土壙が存在し、掘り込みは一巡せず東壁側は途切れる。

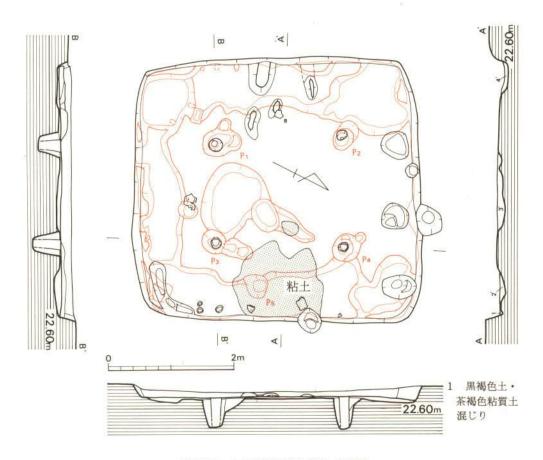
カマド 南西壁ほぼ中央に設置されている。遺存状態は悪く、支脚も遺存しない。

出土遺物 (図版95, 第224図)

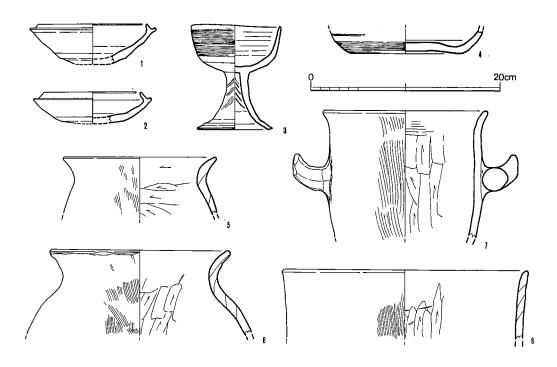
須恵器 6 個体分, 土師器18個体分の破片, そして不明土製品がカマド周辺にて1点出土している。

須恵器 (1~4) すべて埋土中からの出土品で、3以外は反転復原図である。

土師器 $(5\sim8)$ 8 はカマド周辺から、他は埋土中から出土した。小片の為反転復原図である。



第223図 118号住居跡実測図 (1/60)



第224図 118号住居跡出土土器実測図 (1/4)

119A · B号住居跡 (図版51, 第225図)

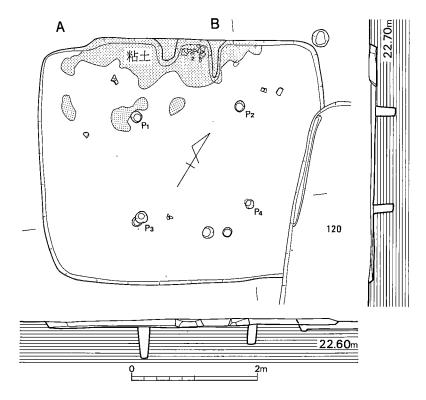
調査区の東半部に位置し,東壁側を120号住居跡に切られている。カマドの付設された北西壁は,北西隅から0.8m程の所で屈折しており,2軒の住居が重複している可能性が高く,西から東へ平行移動している。先行する住居をA,新しい方をBとする。AはBの床面を剝がして調査をしていないので詳細は不明だが,カマドは北西壁に設置されていただろう。BはAとともに当初は1軒の住居跡として掘ったので,南西壁は遺存しない。貼床面には4本の主柱痕が残る。カマド対面には粘土は遺存しない。

カマド (図版52) 北西壁のほぼ中央に設置され、内部より土師器甕片が出土している。

出土遺物 (第227図)

須恵器は出土せず、土師器ばかり10個体分の破片が出土している。

土師器 $(1 \sim 3)$ 2 はカマド内から,他は埋土中から出土した。 1 は精製品である。 3 点とも反転復原図で 3 は蓋と考えた。 (児玉)



第225図 119号住居跡実測図 (1/60)

120号住居跡 (図版52, 第226図)

調査区東半部に位置し、119号住居跡を切り、北東隅を121・122号住居跡に切られる。貼床面には 4本の主柱痕が残り、壁際には断続的に壁小溝を検出した。カマド対面には粘土は検出していない。が、この対面壁の外側に P_{15} ・ $_{16}$ が存在し、これらは P_{1} ・ P_{3} と P_{2} ・ P_{4} のほぼ延長上にある。床面を剝いでないので下層の構造は不詳だが、基本的に他のものと変わらないだろう。

カマド (図版52) 北壁のほぼ中央に設置されている。遺存状態はよくない。支脚も出土しなかった。

出土遺物 (図版95, 第227図)

須恵器 5 個体分, 土師器29個体分の土器片と,カマド南側より鉄器が1点出土した。しかしこの鉄器は出土レベルが遺構検出面と同じであり,かつ形状としても近時の産物になるものと

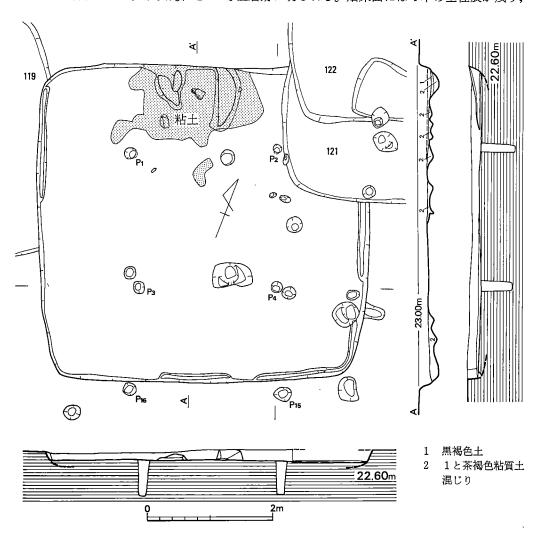
思われる。

須恵器 (1) 埋土中から出土した小片で、反転復原図である。

土師器 $(2\sim4)$ 埋土中から出土した破片資料で、4 は支脚に使われたと思われる小型甕である。2 は精製土器である。 (児玉)

121号住居跡 (図版53, 第228図)

120号住居跡を切り、北側%程を122号住居跡に切られる。貼床面には4本の主柱痕が残り、



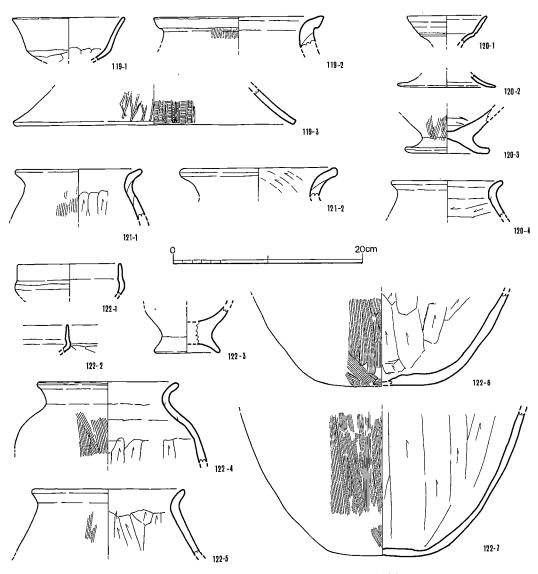
第226図 120号住居跡実測図 (1/60)

南壁側に多量の粘土を検出した。南壁側に粘土を検出したので,カマドは恐らく北壁に設置されていたのであろう。

出土遺物 (第227図)

土師器 2 個体分の破片が出土している。

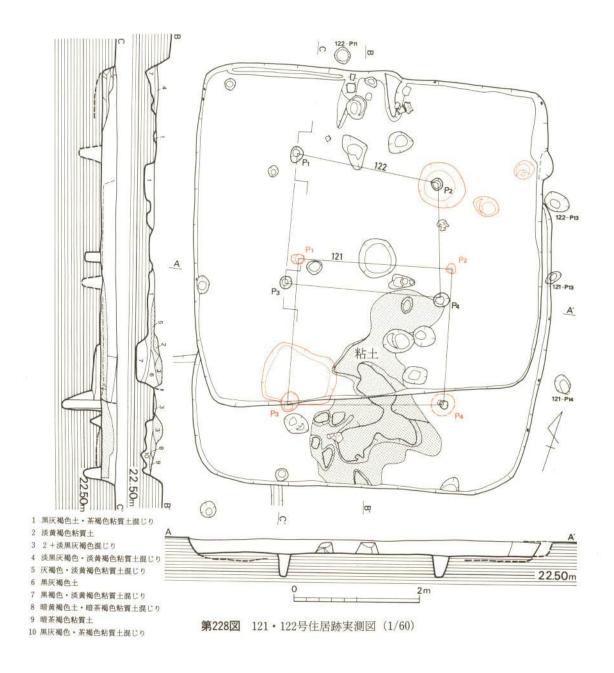
土師器 $(1 \cdot 2)$ 粘土中や埋土中からの出土である。 1 はカマド支脚に使われていた可能性がある。 (児玉)



第227図 119~122号住居跡出土土器実測図 (1/4)

122号住居跡 (図版53, 第228図)

121号住居跡の北側%を切って、北側に平行移動するような形で検出した。西壁に比して東壁が短く、やや台形気味で、貼床面で検出した主柱痕の配置状況も不整方形を呈する。カマドの西側に壁小溝を検出したが、他の壁では検出していない。カマド対面に粘土を多量に検出した。



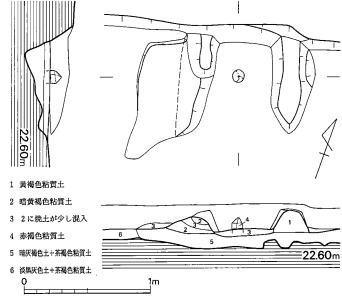
カマド (第229図) 北壁の ほぼ中央に設置される。左袖 の外側に P_{11} を検出した。支 脚は検出してない。

出土遺物

(図版96, 第227図)

須恵器 1 個体分, 土師器30 個体分の破片を検出した。須 恵器の出土比率がきわめて低 い。

土師器 $(1\sim7)$ 埋土中からの出土である。 $1\cdot2$ は精製土器である。 (児玉)



第229図 122号住居跡カマド実測図 (1/30)

123号住居跡 (図版53, 第230図)

124号住居跡が北東側に建て替えを行ったような形で切られ、西・南壁がL字形に残るのみである。弥生期の73・74号掘立柱建物を切っている。南壁のやや西側に粘土があった。124号住居跡の下層で4本の主柱痕を確認した。床面を剝がしていないので下層の構造はわからない。本集落のカマドは西壁か北壁に設置されているのが殆どであり、この住居についても、粘土の遺存場所等からすれば恐らく北壁にあったものと思われる。

出土遺物 (第232図)

土師器が4個体分出土しただけである。

土師器 (1) 埋土中からの出土で、小片のため反転復原図である。支脚に使われていた甕の小片であろう。 (児玉)

124号住居跡 (図版53, 第230図)

123号住居跡の大半を切り、北東へ平行移動して建て替えたような在り方を示す。貼床面には 4 本の主柱痕が残り、東・南壁には壁小溝がある。また、東壁には杭を打ち込んだか、と推測 される小ピットが見られる。

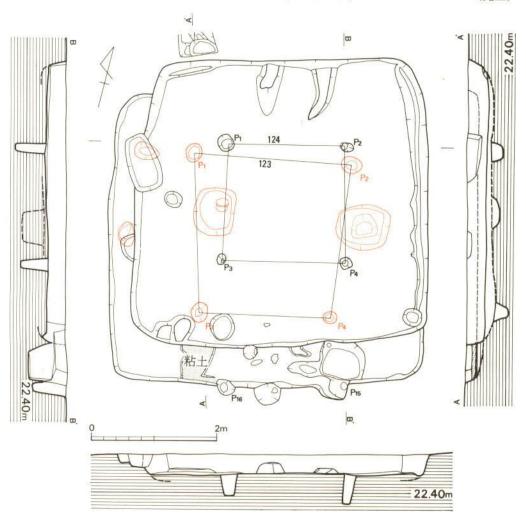
カマド (図版53, 第231図) 北壁のほぼ中央に設置されている。支脚は検出されず、土器も出土していない。

出土遺物 (第232図)

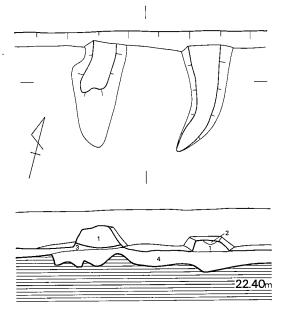
須恵器 3 個体分,土師器11 個体分の土器片が出土している。その多くは埋土中からの出土である。他に,鉄器片 1 と砥石 2 が埋土中から出土している。

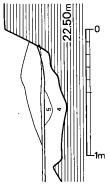
須恵器 (1・2) 埋土中からの出土で、極小片である。

土師器 $(3\sim5)$ 4 はカマド周辺から出土したが、他は埋土中からの出土で、反転復原図である。 4 は小片で不明だが、 3 は支脚に使われた甕であろう。 (児玉)



第230図 123·124号住居跡実測図 (1/60)





- 1. 黄褐色粘質土
- 2. 暗灰褐色土
- 3. 黒褐色土・淡茶褐色粘質土混じり
- 4.3と黄褐色粘土混じり
- 5. 焼土混入黄褐色粘土

第231図 124号住居跡カマド 実測図(1/30)

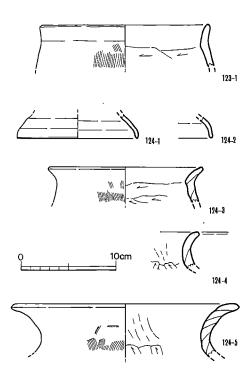
125号住居跡 (図版54, 第233図)

調査区の東端近くに22号掘立柱建物と重複して存在する。やや不整形ながら方形を呈し、断続的ながら壁小溝が存在する。カマド対面の粘土や床面下の土壙等は存在しなかった。また、主柱痕も検出していない。床面下は中央に不整形の土壙があり、掘り込みはカマドの左右の壁に沿って存在し、カマド側の壁ではカマド周辺までは掘り込みが及ばない。また、カマド対面の壁際にも掘り込みは認められなかった。

カマド 北西壁中央付近に設置されているが、遺存状態は良くなく袖部も残らない。

出土遺物 (図版96, 第234図)

須恵器 2 個体分, 土師器41個体分の土器片が出土している。他に手捏土器(床下層), 盤



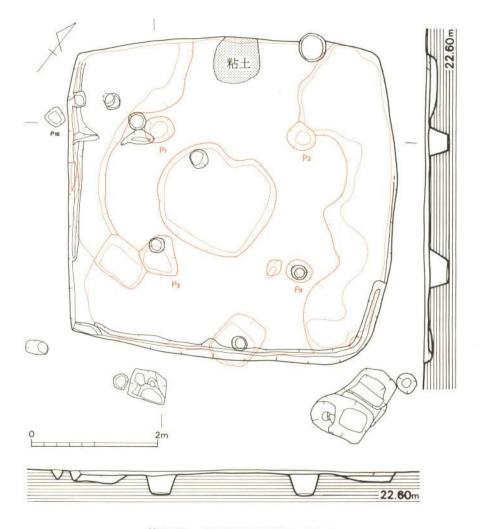
第232図 123·124号住居跡出土土器実測図 (1/4)

状土製品(埋土中),不明土製品が出土している。

土師器 $(1\sim17)$ 甕14は貼床下層から,他は埋土中からの出土品で, $1\sim3$ は精製土器である。 $9\cdot10$ は支脚に使用されたものであろう。11は注口土器の可能性がある。 (児玉)

126号住居跡 (図版54, 第235図)

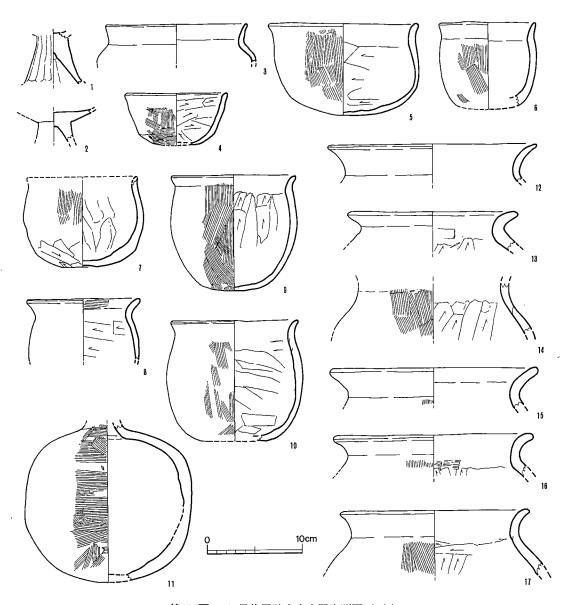
やや東西に広い方形を呈する。北・東壁際の一部に壁小溝があり、床面で3個の主柱痕を検出した。また、カマドの対面で粘土を検出した。床面下は4本の主柱穴の内に不整形の中央土 壙を、4本の主柱穴の外側に掘り込みを検出した。住居の四隅には、掘り込みを掘削した折に



第233図 125号住居跡実測図 (1/60)

掘り残されて僅かな段部を残している。また,住居外で,南壁側に2個,東壁側に1個の小ピットを主柱穴の延長線上に検出した。

カマド (第237図) 北壁の中央よりやや東寄りに設置され、上端で幅80cm、奥行50cm程の北壁から張り出した形態のものである。中央よりやや奥まった所に小形甕形土器を倒立させて支脚として設置している。支脚をセットする際に、まず淡黄色粘土を甕の口径に合わせて厚さ3cm、径12cm程に盛り、その上に甕を倒立させてセットし、口縁部周辺に粘土を張り付けて補強



第234図 125号住居跡出土土器実測図 (1/4)

している。なお, 支脚の甕には把手がついている。

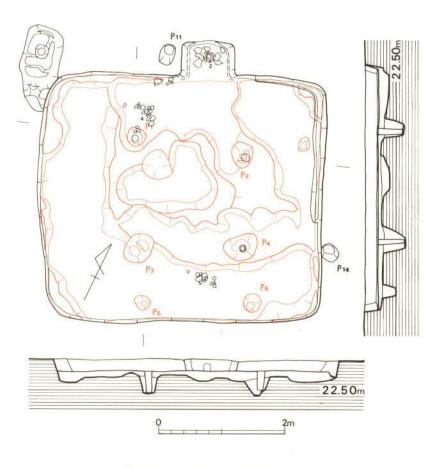
出土遺物 (第236·239図)

須恵器 2 個体分, 土師器14個体分の破片が出土している。

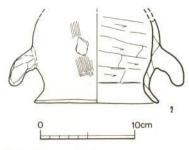
土師器 $(1\sim5)$ 1は埋土中から出土した精製土器で、3はカマド内、4は P_1 の床面、5はカマド西の北壁際床面上で出土した。 (児玉)

127号住居跡 (図版54, 第238図)

125号住居跡の北に存在し、大半がB地区との間の農道下に延びる。よって床面には P_s の主柱痕、南壁際に粘土を検出したに留まる。貼床下は掘り込みがあり、南壁中央で途切れ、西壁

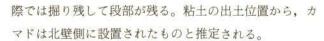


第235図 126号住居跡実測図 (1/60)



第236図 126号住居跡カマド支脚 実測図 (1/4)

- 1 焼土少し含む灰色粘質土
- 2 黑褐色砂泥
- 3 淡黄褐色粘土(一部焼土化)
- 4 灰白色粘土少量混入灰色粘黄土
- 淡黄灰色粘土 (焼土化)
- 7 灰褐色砂泥
- 8 灰色砂泥を含む淡黄色粘土
- 9 灰色粘土少し含む明黄灰色粘土
- 10 焼土層
- 11 灰層
- 12 淡褐灰色砂泥少量混入灰 色粘質土
- 13 灰褐色砂泥混入茶色粘質土
- 14 黄灰色粘土混入灰色粘質土
- 15 黑色土



出土遺物 (図版96, 第239図)

粘土下部から土器がまとまって出土している。須恵器

2個体, 土師器 7個体分である。

須恵器 (1・2) 1・2は 略完形品で、南壁の粘土下から 出土し、本住居に伴う。

土師器 (3~5) 3・4は 埋土中から, 5は南壁の粘土の 下から出土した。 (児玉)

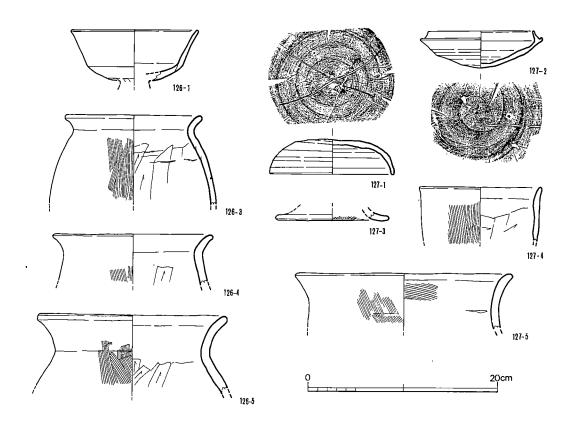


23.10m

第238図 127号住居跡実測図 (1/60)

128号住居跡 (図版54, 第240図)

129号住居跡に北東部を切られ、東側の一部は調査区外にのびる。当初、一軒の住居と考えて 調査したが、主柱穴が2軒分検出され(A・B)、Aが先行し、Bが後続して営まれている。2 軒の住居は殆ど重複して営まれたと思われ、柱位置も接近している。床面下は掘り込みはあるが、中央土壙・カマド対面の土壙は存しない。



第239図 126·127号住居跡出土土器実測図 (1/4)

ガマド Bに伴うカマドが北壁中央に設置されるが、129号住居跡から東半部を切られる。

出土遺物 (第242図)

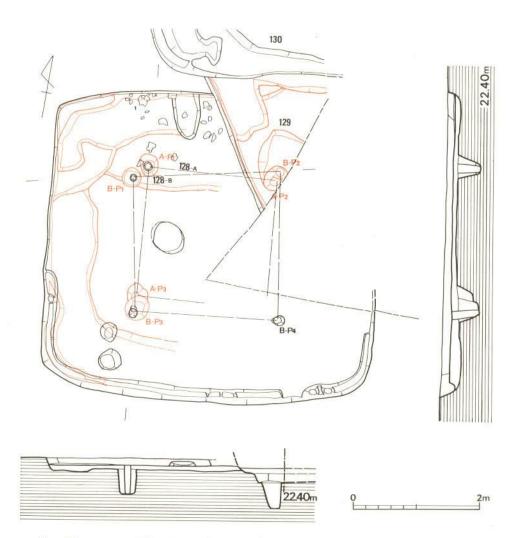
土師器36個体分の破片が出土している。また,カマド周辺より棒状土製品が出土している。 土師器 $(1\sim3)$ カマド内及び周辺から,破片ではあるが土器が出土している。図示出来 るのは3個体だが,1はカマド左,3は床面,2は埋土中からの出土である。 (児玉)

129号住居跡 (図版54, 第240図)

128号住居跡を切り、130号住居跡に切られ、その大半は調査区外にのびる。

出土遺物 (第242図)

土師器 4 個体分の破片が出土している。



第240図 128·129号住居跡実測図 (1/60)

土師器 (1~3) ごく小片の資料で, 1・2は床下層, 3は埋土中からの出土である。 (児玉)

130 Ps 130 Ps 22.40 m

第241図 130·131号住居跡実測図 (1/60)

130号住居跡 (第241図)

129号住居跡を切り、131号住居跡に切られ調査区外に大半がのびる。 P_s に相当する主柱痕を床面で検出し、床下層は掘り込みと主柱穴を検出した。カマドは北側に設置されたものか。

出土遺物 (第242図)

土師器片が10個体分出土している。

土師器 $(1\sim3)$ 破片資料ばかりで、 $1\cdot2$ は床下層、3 は埋土中から出土した。 (児玉)

131号住居跡 (第241図)

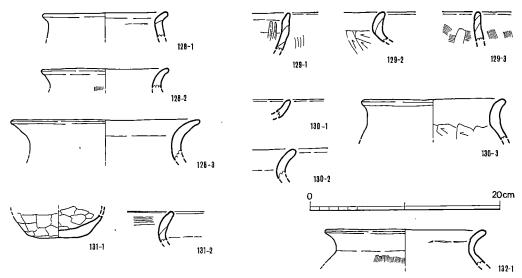
130号住居跡を切って、その殆どが調査区外にのびる為詳細は不明である。埋土中よりスラッグが 2 点出土している。 (児玉)

132号住居跡 (付図4)

61号掘立柱建物北西側で検出し、農道下にその大半がのびる。不注意により図化していない。

出土遺物 (第242図)

土師器 (1) 1は埋土中から出土した破片資料で、他に図化しうるものはない。(児玉)



第242図 128号~132号住居跡出土土器実測図 (1/4)

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—8-

昭和61年6月30日

一発行 福岡県教育委員会 福岡市博多区東公園7番7号

印 刷 株式会社 チューエツ九州工場 福岡市博多区東比恵2丁目9番1号